

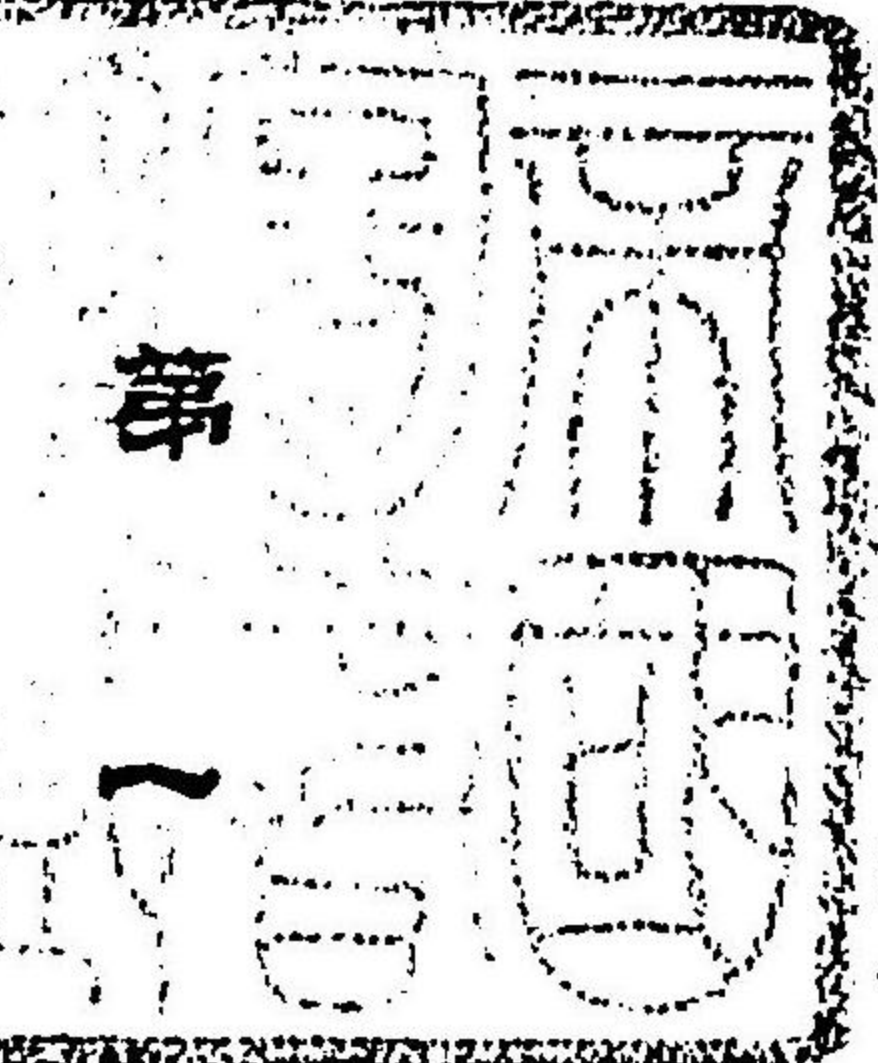


小作  
能



院 藏 寶 の 後

代も片人ないみ 野  
 寶知錄公い出 死  
 藏れ録公た苦し 死  
 院ま館のる心、て  
 嵐せ館のる心、て  
 風ん、夫といはれ  
 五夫れゆへ二代寶  
 代寶院嵐意に到  
 三三三三三三三三  
 代々代代代代代代  
 名寶寶寶寶寶寶寶  
 院院院院院院院院  
 嵐嵐嵐嵐嵐嵐嵐嵐  
 清清清清清清清清  
 手手手手手手手手  
 がががががががが  
 現現現現現現現現  
 はははははははは



席

名譽之の  
 術後之の  
 寶藏院

山 玉  
 田 田  
 唯 玉  
 夫 秀  
 速 齋  
 記 講  
 演

昭和  
 44. 5. 17  
 丙午

院 藏 寶 の 後

れて、よく祖先寶藏院覺禪坊胤榮の名を汚さず、寶藏院流片鎌  
鎗の一派を天下に廣め、徳川十一代將軍家齊公の御治世迄は、  
年々將軍家のお膝許へ召し出され、天下の勇士豪傑を相手とし  
て其の技倆を御覽に供へ、諸士の肝膽を寒からしめ、少しも遅  
れを取らなかつたものでございませう、就中初代覺禪坊胤榮は  
亂世に生れたるがため殊にその名を現はし、天正、慶長、元和  
寛永の初代における迄、普ねく天下を漫遊する事八度、當時の  
英雄豪傑とは悉く出会い、或はその腕前を戦はし、又は交際を  
結んで、非常なる尊敬をうけたものでありますから、従つて  
其の一代におけるお物語りには、電光石火、出沒極まりなく、  
愉快絶なる事柄は、數限りもなくございませう、どうか其の  
お積りて、鷹揚の御愛顧を願つておきます、さても前編「片鎌  
鎗の名入、寶藏院覺禪」に、ひき續いて、今回は「名譽の鎗術  
後の寶藏院」と、題し、玉田家十八番一手專賣の口調をもつて

院 藏 寶 の 後

千變萬化と口演じ續け、愛讀諸君をして御満足を與へる覺悟で  
ございませう、餘事はさておき、前編は如何なる處迄伺いおき  
ましたかと申します、寶藏院覺禪坊が初めて諸國漫遊の途  
次、遠洲濱松へ乗り込みます、あに關らんや濱松城下は、  
人馬の往來物凄く、非常なる大騒動でございませう、何事やら  
んと覺禪坊は、携へたる鎗を里沙門突になし、路傍につ、たち  
容子を伺つて、その折柄、數十名の軍勢が二人の若武士をお  
つたて、バラバラとかけつけきたる様と相みへる、流石の  
覺禪坊もうち驚き、能く容子をきいてみれば、眞田家の豪傑宮  
部熊太郎兼晴、金ヶ崎榮次郎信好の兩人が、問者の嫌疑をうけ  
て、徳川譜代の大名、遠洲濱松七萬石、水野越前守の家臣にと  
り、國まれ、かく悪戦苦闘の眞最中と聞きましたる處より、豪僧  
覺禪坊胤榮は承知せず、日頃の義氣を茲に現はし、兩人を落し  
やらんものと、突然鎗をひき抜き、物をもいはず多勢の眞只中へ

院 藏 寶 の 後

四 躍りこみまするといふ處迄、べんじおさましたる事にございま  
する、然るに覺禪坊は多勢の中へ荒れこみ、得意の鎗術をもつ  
て、縦横無盡につきふせなごたて、闘いながらに大音聲をあけ  
たる事にいたして、覺禪坊は、夫なる宮部、金ヶ崎、美事、ひき  
はすとにげたく、かゝる木ッ葉はわれ一人に澤山、美事、ひき  
うけていくいとめくれん、早く、と、きいた宮部と金ヶ崎も  
敵に後ろをみせる豪傑ではない、宮部、御身は何れの豪傑か  
はしらないが、返つて迷惑をかけては相すまん、われは宮部熊  
太郎兼請といつて、真田家の郎黨である、まつた之なるは同じ  
く、真田の臣金ヶ崎、真田家、信好なり、百二百の蛆虫共に決して恐  
るゝ、我にならず、暫らくその處にて見物あれい、金ヶ崎油断を  
するな、金、オ、合点だッ……」と、両豪傑は四角八面にきり  
捲る、その刃先當り難く予相みへたり、覺禪坊は、大いに感じて

院 藏 寶 の 後

後へひく譯にはゆかん、御身等に手傳つて、片ッ端から田樂ざ  
しだッ」と、愈々烈しく奮闘する、この体みたる水野家の武士  
は、武、大、二人にさへ困つてゐる處へ、大入道  
が加勢に来ては堪らない、敵はんにげい」と、雪崩をうつて敗  
走する、三人は三方にわかれておいふせ、つきたて、なご倒し  
暫くは血戦に及んでおりましたが、水野の武士右往左往にくづ  
れたつたるをみて、別に永おいもせず、宮、ソレ、今だひきこれ  
いッ」と、二人はドン、とかけだした、覺禪坊も後に續いて  
走りだし、三人は漸々天龍川迄おちのびてくると、川の渚に一  
艘の小船がある、これ幸いと三人はとびのり、ズン、しもへ  
く、と下してきて、到頭沖合迄かこぎだした、宮、ア、こ、  
迄くれば大丈夫だ、御坊誠に危急を御加勢に預り忝ない、覺、イ  
ヤ、く、恐、何れの方でござる覺、イヤ、申し遅れてすまなかつた、

院 藏 寶 の 後

恩僧は南都の寶藏院覺禪といへるものだ。宮ナニ、さては寶藏院流片鎌鎗の大名、寶藏院胤榮殿でござつたか、イヤこれは眞田家に隨身なし、諸國を漫遊して地理人情を搜り、又は城の要害等を極め、後日豊臣徳川合戦の節一擧にして勝を制せん主人幸村公の存意でござる、然る處圖らずも松城下において、水野家の役人に見現はされ、すでの事にめしとられる處でござつた、イヤあり難い仕合せでござる」と、一伍一什を物語る、只天下が都合よく治まつて、人民が安堵いたせば結構、とに角御身等は充分忠義を盡されよ」と、或は天下の形勢を論じ、又は種々武藝の話しに及び、三人は興のつくを覺へません、金ヶ崎榮次郎はふとみれば、船は段々沖合へ流れいで、ズン、譯の判らぬ方向へきておりますから、金オヤツ、大變、話

院 藏 寶 の 後

しにみがいつて、船をやリッ放しにしておいたものだから、とんでもない處へ流れてきた宮ウムそうだ、早く大井川の川尻へこぎよせい、金オ、合点だ」と、腕に覺への金ヶ崎榮次郎は權をとつてこぎ出し、瞬間に波をけだて、何なく船は大井川の下流へ着船する、三人は船をすて、陸へ上り、宮御坊、我々兩人は一應信洲へたち歸る考へ、御同道申したいが三人がつれだつていては、人目に掛つて宜しくない、名残はつきねどこの處にてお別れ申す、覺イヤ、それがよい、何れ又後日再會いたす事もあらう、金誠に、失禮を仕つた」と、三人は袖を分つて宮部熊太郎と金ヶ崎榮次郎は大井川を傳つて奥へいりこむ、跡に寶藏院覺禪坊は暫らく兩人の後影を見送り、覺ハ、……、却々勇ましい人間だ、眞田家には立派な豪傑が澤山ある、どれゆこう……、と、葉僧覺禪坊は鎗を杖にしてドシ、歩きたし、島田も何なくすぎで、今しも藤枝の驛へさし掛り、驛端の茶店

院 藏 寶 の 後

八で休み、茶をのんでおります、スルト側に二三人商人の男  
が、同じく休んで四方八方の話をしていまして、きくともなし  
に覺禪坊は、その話をきいていまして、甲「オイどうだい、こ  
の頃府中の町は大變不景氣じやないか 乙「ウム、それは不景氣  
な筈だ、夜になると大變辻きりか流行るとかで、皆なビク  
しているからだ 丙「ハ、ア、悪い事がはやるもんだな、一体た  
れがそんな馬鹿な事をするんだらう 甲「サア、何でもきけば、  
久能山に大變豪い奴がたて籠り、その同類かよなく 府中の町  
端へ出て、辻きりをやらかすのだそう、なんしろ府中は陣屋  
があるばかりで、徳川方の陣代花岡紋左衛門といふ方が、餘り  
豪くないから斯様な事が起るんだといふ噂だ 丙「フーン、どう  
も困つたものだなア」と、三人は話をしている、これをきいた  
る覺禪坊は安からぬ事に思ひ 覺「コレ町人、その話しは眞實か  
……」 町「エ、御出家、實際ですよ、府中の町と久能山の間に

院 藏 寶 の 後

一本松といふ處がありますが、その邊りはごく物騒なといふ事  
です 覺「フム、悪い事をする奴もあるものだ、今に天罰が當る  
であらう」と、覺禪坊はさあらぬ体で茶店をたちいで、歩きな  
がらに一思案 覺「フム、面白い事を聞きこんだ、今夜は府中の  
町へ泊つて、一番辻きり退治とでかけてやらう、武士とか悪人  
とかをさるならまだしもだが、町人百姓を惱ますとは憎くき奴  
ヨシ今にみらう」と、豪僧覺禪坊は漸やく府中の町へつき、三  
保屋傳助といふ宿屋へ泊り、酒肴を注文して獨りガブ、やつ  
ていると、亭主の傳助は帳面をもつてそれへ出てまいり 傳「へ  
イ、御出家あり難ふさまで……どうか御姓名とお職業が伺いた  
ふ存じます」と、スルト覺禪坊は杯をおいて呵々とうち笑い 覺「  
アハ、……、亭主姓名は判つているが、職業は一目みたらしれ  
そうなものだ、おれは出家だぞッ……」 傳「エへ……、イヤ恐れ  
いりました、シテお名前は……」 覺「名前は、覺禪坊胤榮と申す



院 藏 寶 の 後

坊主だ 傳へエ、どうも結構なお名前です。いらつしやいます。出家は長袖といひ、醫者は仁術と申しまして……

その方は却て巧い事をしつて……

いはよく辨へております、然し肴な事も平気で、お食ひなさる處をみると、餘程開けていらつしやいますか、どこか御法事でございましておこしになりましたのですか、覺ウム、マアそんなものだ、チト祈禱をしなければならん事があつて……

へー、左様でございしますが、随分この府中にも豪い御出家が……

ありまして、御祈禱や呪なぞも、よくきくお方がありますか、何といふ宅へ御祈禱にいらつしやいますので……

祈禱をしにゆく處は……一本松だ 傳へ、……

姓は根つから聞きませんな、覺ハ、……

一本松といふ處があるであらう、彼處だよ……

彼處は御出家、家なんかは一軒もありませんよ、御元談を仰し

院 藏 寶 の 後

やつてはいりません、全体あの邊は日がくれますと、誰も住來を……

彼處へは辻ざりができますので、三丁念佛唐竹割りといふ名題の辻ざりができる大變な處です、覺ナニ辻ざりができる、それは結構、實はな亭主、その辻ざりを御祈禱で退散さすつもりできたんだ 傳ウフ、御出家元談も程がありますよ、まじめな顔して……

…… 覺イヤ、元談ではない、本當の話だ 傳ケド、今迄豪い方が澤山おのりこみになつて、おれが退治てやらう、生どつてやらうと仰しやつて、おこしになつたのは數限りもございませんが、皆な翌朝になるとバツサリやられておりますよ 覺ハ、……

……、それは先方より弱いからやられるのだ、おれは呪をもつて退散をさしてみせる 傳へー、真言秘密の法でも申すの……

……、然し亭主風呂はわいていりるか、餘り汚ない坊主だから、

風呂へも案内してくれんな 傳「イヤ、これは恐れいりました、丁度お客様がはいつていらつしやいましたので遅くなりました、すみません、サアおめし遊ばしませ 覺「夫では、よつた勢で風呂にいつてこやう……」と、覺禪坊は冗談をいひながら風呂場へたつてゆく、主人の傳助は店へきて女房に向い 亭「オイお松、妙な狂氣坊主が泊つたよ 松「エ、かの坊さんはきた時から、恐ろしい眼付だと思いましたが、別に口のき、塩梅は、狂氣の様にもないが……」 亭「イヤ、あれで氣狂なんだから可笑い、何だつてお前、辻ぎりを祈禱や呪で退散させる事ができるものか 松「それりやアあの一本松の……」 馬鹿な坊さんだよ、亭「ケド、お茶代をくれる處はおれも感心しているんだ」と、頻りに話しをいたしている、此方は寶藏院覺禪坊、湯から上りまして 覺「コレ」 亭「主、湯からでたぞ 亭「オ、お早ふございます、御愁くりと……」 覺「ハ、……、酷い事をいつているな

狂氣坊主なんて…… 亭「イエ、その……あれは貴公様の事ではないうで…… 覺「ウム、そうだらう、悪口しられて茶代をやる譯にはゆかないから、先刻の茶代を戻せ」 亭「ヘエ、イヤ、ハヤどうも恐れいりました、どうか御勘辨を……」 覺「ハ、……、マア何でもよいわい、せめて酒だけはよいのをのませてくれ 亭「ヘイ、畏まりました」と、女中がもちだす酒を、又もクビリくのみ始め、日のくれるのをまちうけますといふ、之より辻ぎり退治の實に面白さお話しは一寸一服いたしましたして次席にたくはしくのべます……」

第 二 席

さても茶僧寶藏院覺禪坊は、日のくれる迄のみ續け、二升ばかりの酒をのしみほしてしまい、手を拍いて亭主をよび 覺「亭主

院 藏 寶 の 後

もふソロ／＼御祈禱にでかけるぞ、氣の毒だが鶏卵を二ツ三ツと、酒を瓢箪へ一升ばかりつめてくれ。亭へエ、まだ酒をおのみになりませうか。覺ハ、……、たかしな顔をばするな、一本松へいつてまつているのが退屈だから、その間に酒と鶏卵をもつて主傳助は呆れてしまつて、漸々いふが儘に酒と鶏卵をもつてく。覺イヤ、結構／＼、亭主一寸いつてくるよ」と、瓢箪を提げ、鶏卵を袖へいれて、……、たち上ると、亭主は慌て、袖を控へ、亭エ、御出家……、覺なんじや亭甚だ、恐れいりますが、どうか一つ御勘定を願つてお置き申したいので……、へ、……、斯様な水臭い事を申しあげて、御腹だちになりましてはすみませんが……、せひ共お願い申します……、覺ナエ、勘定ッ……、マアいゝじやないか、直に戻つてくるよ。亭デございませうが、どうぞ一ツ……、覺ウム左様か、何れ遣はすものだから、今拂つておいてもよいが、直に戻つてくるのだぞ、夫でも

院 藏 寶 の 後

いかないか。亭然し、辻ざりにおであいなさつたら、お戻りになるかどうだか判りますまい……、よつてその……、覺ハッハ、……、貴様はおれが叩き切られてしまふと思つているな、馬鹿な奴だ、御祈禱をしにゆくのに、そう無暗にさらされて堪るものか……、といつても貴様は安心をいたすまい、こうしやう……、幾等／＼と詳しく勘定をするのも面倒だ、一河の流れ一樹の影、袖よりあふても他生の縁、願づく石も縁の端だ、今宵圖らす貴様の宅へ一泊いたしたのも、何か深い因縁があるのだらう……、亭へイ、覺そこで、こふいふ事にしやうでないか、もしおれが今夜さらされてしまつたら、おれのために石塔をたて、花の一本も手むけてくれ、よいかこれを渡しておく」と、懐中より二百兩、少し小使銭がはいつていゝ、おれが萬一さられたと判つたら、この金を悉皆その方にやるから、ホンの印しばかりの

石塔を一つたて、くれ」と、いひつゝ、件の財布を亭主に渡すと、亭主傳助は吃驚仰天、亭主、……、二百兩餘りもあり、宜しうございませぬ、其奴は、……、難ふ存じます、宜しうございませぬ、も、屹度石塔はたてますが、シテ寸法はどの位の處にいたしませう、覺、ハ、……、コリヤ、……、まださらぬ先から石塔の寸法なんかをどう奴があるものか、亭ケド、一寸伺つておきませんと……、その……、覺、そんな事は、どうでもよい、萬事貴様に任したぞ、亭、へい、長まりました、確かに預り申しました、たが、……、お歸りはございませぬ、どうやら……、覺、コリヤ、……、縁喜でもない事を申すな、チハいつてくるよ、亭、へい、氣をつけていらつしやいませ、金子の處は御心配に及びません、これはもよ頂きましたも同然で……、大きにあり難ふ存じます、益くれのお寺のつけ届けは、相違なく手前の方でいたします、それに御追善もなるだけはやかに仕ります、覺

マア、左様な事はどうでもいゝ、然らばいつてくるぞ、亭、へい、どうぞお迷いなさん様に……、貴僧は御出家だから、冥途へゆくのはよく御存じでございませう、サツサとおこしなさいませ、覺、ウム、ヨシ、……、と、覺、禪坊はにこ／＼うち笑つて表へたちいでます、跡をビツシヤリしめきつた亭主傳助は、亭、オイ、……、お松……、松、ア、何です、亭、どうも、世の中はクヨクヨ思ふもんじゃないよ、宿屋も偶にはこふいふボロい儲けがあるのでやめられない、あの氣、坊主は屹度さらされてしまつて、いきて歸る氣遣はない、立派なお武士でもとてまだめなもの、坊主の癖に祈禱で退散さすなんて笑はすわい、これをみねへ二百兩餘り預かつたよ、松、オヤ、本當に嬉しいね、亭、ウム、思ひもよらん金儲けだ、これこそ濕手の粟の只儲け……、さてよ一つ雑作を直そうと思ふが、この間大工に積らした時に、三十兩もかければ、立派な雑作ができるといつた、そ

れにしても百七十兩餘り残る、幾程石塔を美事にしても二三兩  
 だせばできる、マアよい搦梅に大金を手にいれた」と、然に目  
 のない亭主と女房は、頻りに喜び返つてゐる。然るに彼方寶藏  
 院覺禪坊は、段々町を出外れて、例の一本松の處へさし掛つて  
 くるると、あたりは森閑として水をうつたる如く、人通りは愚か  
 犬の子一匹も通いません、さられた上に三丁も鼻唄を歌いなが  
 ら歩くといふ、所謂三丁念佛唐竹わりといつて、名題の辻ざり  
 のでる處、そこへノコノコやつてきた覺禪坊は、覺ウム、こゝ  
 らだな、三丁念佛といふ處よりみると、餘程腕前の優れた奴に  
 相違ない、ヨシ何でも構はん早く出てうせい」と、路傍の石に  
 腰うちかけ、覺丁度、この邊が上等の場所であらう、ア、どう  
 もよい月だ」と、獨り言をいひながら、袖より鶏卵をとりだし  
 それを石で砕いてすい、一方の手には瓢箪を口のみに、グビリ  
 とやり始め、殆んど一升の酒も空になつてしまふ迄、

ましたが、何も音沙汰がございませぬ、覺オヤツ、今夜はでな  
 いのかもしれん、折角やつてきたのに詰らん話だ、どうも仕方  
 ないソロソロ歸らう、もよ彼是れ八ツ時分であらう」と、ソロ  
 歸つたら亭主が定めて精を落すであらう、アハツ……」と、一  
 歩は高く一步は低く、踏々跟々として、今しもその場をたちさ  
 らんとするその折柄、月は雲間に隠れてあたりは俄かに暗くな  
 る、その途端に背より、バタ／＼とかけつけきたる人の  
 足音、覺禪坊は、ヒョイとふり返つて透し眺め、覺ハ、ア、どう  
 やら出てきた様な搦梅だ……」と、態ど足許危なげにやつてい  
 ると、眞黒扮装の曲者一人、覺禪坊に近づききたつたかと思ふ  
 一刹那、突然のさうちに、ヤツと一聲きりつけた、あはや白刃  
 の下に覺禪坊は眞二つになつたかと思ひの外、ヒラリ体を躲し  
 て空をうたせ、前に延つてくる奴の手首をグイツとひつ掴む、

南無三しまつたと、ふり放そうとする間一髪、又も一人右手よりきりこんだ、これも同じくスカタンくはせ、利腕捕へて聲荒らげ、覺、ヤイ、三町念佛唐竹割りかはしらないが、どうも弱い奴だ、汝等如き未熟の腕前に、命ちをとられるおれではない、又貴様の様な弱虫二匹位の命ちをとつた處で仕方がない、また同類があるかどうだ、曲ウム、イヤあるく……、覺、ヨシ、明、晩も今頃おれがこの處にきているから、同類を殘らすつれてこい、いゝか判つたか……、と、いふ聲諸共、エイ、ヤツと左右等しくなげだした、曲者二人は二三間向ふの田甫の中へほりこまれ、おき上るが早い、これは敵はんと命ちカラハッハッ……、と、後見送つて覺禪坊はカラハッ……、と、うも噂と違つて、存外手應へがない、馬鹿な奴もあるものだ、と、瓢箪拾つてその場を後に、怒々寛々として、衣の袖を夜風にふかせながら、三保屋へさしてたち歸り、表の戸をトンハッ……、と、

覺、亭主、只今戻つた、今歸つたぞツ、早くあけてくれ……、此方は亭主傳助、到底あの氣狂坊主は、さき殺されること極つていと、こふ思つて、まづ奉公人一同をねかしてしまひ自分は前祝じやといつて、女房お松を相手に充分のみ過し、それから財布の中の金をとりだして調べ、三十兩は雜作代、何兩は石塔代、何はなにと、夫に區別をして整然と始末をなし、夫婦はニハハハ喜こんで、ポツハッ……、ねやうとしている折柄、表の戸をトンハッ……、と叩きますから、ハツとさき、答めて、松、オヤツ、傳助さん……、どうやら先刻の坊さんの聲のやうだよ、亭、ウム、おれもそう思ふのだが、迷つてたものではあるまいか、スル、ト表では、覺、亭主、祈禱をすまして戻つて来たよ……、松、アレ御覽、あんなにいつてよるよ、あて事と何やらは向ふから外れるといふが今迄の喜は嬉喜びであつたらしい……、亭、ケドお前、三丁念佛だからうっかり戸をあけると、身体が二つになるかも

判らん、そうでなかつたらばけてきたんだ、やはり金に念が残  
 つているとみへる 松夫では、お金はさし支へあるまいね 亭  
 ウム、大丈夫だ、はきだす氣遣はない……」と、たつり座つた  
 り、色々に氣をもんでいる、表では戸を益々烈しく叩き 覺  
 リヤ、どうしたのだ早くあけてくれんか、おれはばけて出  
 てきたのではないぞ、身体が二つになる氣遣はない、足はチャ  
 ンと二つある、早くあける」 亭主は、もふ仕方が  
 ありませんから 亭へい、只今あけます……オヤこれはごふじ  
 で……私の咽喉笛へくいついてはいけませんせ 覺ハ、……  
 誰が貴様にいくつものか、ぐづししないで早くいれてくれ  
 亭主、大丈夫ですか 覺馬鹿ッ、何を満らぬ事を申す  
 のだ、あける……」 亭主は、溢々門口へまいり、ガラリと  
 戸をあけて 亭主、おはいりなさいませ、 覺オ、御苦勞  
 ……と、にここ 笑いながら、ズイと内らへはいつてい

ると、亭主傳助は恐々物をもちはず、覺禪坊の脊中をなで廻し  
 たり、足許を眺めたりして、怪訝な顔をいたしている、禪坊  
 はおかしくつて堪らないが、態どまじめな顔して 覺コレ亭主  
 その方はなんでおれのこの脊をなでたり、足許をみているのだ  
 亭へエ……、やはり足は二本ございますな 覺アハ、……、  
 足のない奴があるものか 亭へーン、シテ辻ざりにおあいなさ  
 つたか 覺ウン、出喰はしたぞ、然も二人でたが、おれが祈禱  
 をしたら、直に退散してしまつた、二人ばかりでは満らんと思  
 つて、明晩同類を澤山つれてこいと、こふいつておいた、よつ  
 て明晩はもふ一通ゆく積りだ 亭へーン、それはどうもイヤハ  
 ヤ……雑作的が…… 覺コレ、何を判らん事いつている、  
 とも角今夜はねやうと、夫婦を尻眼にかけていまへ通り、や  
 ぐをしかせて、樽りと横になるが早い、その儘前後もしらす  
 高軒でねこみまするといふ、愈々藥僧寶藏院覺禪坊が、天下名

院 藏 寶 の 後

題の榮傑、兩人にでぬい一條、至極勇壯活潑なるお物語りは之からでございませうが、暫らく休憩いたしましたしましてはしく次席にてうかいます……。

第 三 席

然るにその翌晩と相なりますと、寶藏院覺禪坊は相變らす身仕度、見遊山にもゆく如く、人も恐る、一本松へ勇みに勇んで、でかけました、丁度一本松の手前へさし掛りますと、今宵は月夜にいたしてあたりはホノ暗く、物凄きこと譬へ方もございませぬ、豪氣の覺禪坊は少しも恐るゝ氣色なく、小謠を歌いながら段々やつてまいりましたと、確とそれとは判りませんが、何やら松の根方にスツクとたつていゝるものがある 覺ハテナ、何

院 藏 寶 の 後

であらう人間らしいが、彼奴が辻ぎりの張本ではあるまいか、それにしても大膽千萬の奴だ、昨夜言傳をしておいたから、おれにくるのをまつていゝのかもしれない……」と、次第に近づいてまいゝる中にも油断せず、側へたちよつてじつとみると、見揚るばかりの大坊主が、かつと眼をむいて覺禪坊を瞬もせずねめつけていゝる、覺禪坊はこれをみるより、狐篋を傍へにおき、一足後へ退つてきつと身構へ、覺ハテナ、汝は察する處よな、この處にいで、辻ぎりをなす不敵の曲者であらう、サア諸人の難義を救はんため、わが手にかけて成敗いたしてくれん、そこ助くなッ」と、バットとび掛らんとする、この時件の大入道も聲荒らげ入道ナンダ、我坊主、さては汝が辻ぎりの張本人と覺へたり、先刻よりまち構へていたのである、成敗するとは猪虎才なり、イデヤひつ掴へて天誅を加へてくれん」と、大手を擴げて只一掴みと、覺禪坊望んでとびついた 覺禪坊は怯ともせず



院 藏 寶 の 後

覺「黙れッ此奴、われに油断をさせんとて巧い事を吐すなッ、その手はくはぬぞッ」と、同じくカツキどうけとめ、大入道と大坊主が、エイオーと喚き叫んで、互いに金剛力をだし、必死になつてねじあいまするか、双方まけず劣らぬ剛力同志、少しも勝負相つきません、覺禪坊は胸中密かに驚き、覺ウム、此奴容易ならん入道だ、三丁念佛唐竹割りをやる程あるわい、飽迄いけとつて意見に及んでくれん」と、愈々勇氣をこおして奮闘する、相手の大入道も覺禪坊が案に相違の大力に舌をまさき入道オヤッ、すてきに強い奴だ、事によつたらおれが少々剣呑だぞウム……何を糞ッ……」と、力足をふみ鳴して、こゝを先途と争つてゐる、然るに今しも兩人はくんだる儘で横倒しに地響うつておつ倒れましたが、その途端に素早く上になつたる覺禪坊は、覺ウム、もふ敵はんぞッ、何にを小癩なッ、ウム……」と満身の力を奮い起して押へつけると、流石の大入道もはね返す

院 藏 寶 の 後

事能はず、尙も暫らく上と下とで、懸命に戦つております内、下なる大入道は次第に力衰へ、フウ〜といき使ひも荒くなつてきた、もふ大丈夫と覺禪坊は、くみふせながらに聲高く「覺イ入道、汝程の豪傑であつて何を不足に辻ぎりをいたす、それも悪人とか武士を相手にするならとも角も、町人百姓迄きりすてるとは不所存者めッ、サア今夜以後心を改めて眞人間とならば許してやる、さもない時はこの寶藏院覺禪坊が、天に代つて素首をひきぬくがどうだッ」と、確たとはかりねみつける大入道はこれをきくより吃驚仰天入道ヤ、御身が名題の豪僧南部の寶藏院覺禪坊カッ、さてッ夫では違ふ〜、おれは辻ぎりの張本人ではない、何を隠そう元明智家の殘黨にいたして、今は肥後加藤家十勇士の一人とよばれたる、齊藤伊豆入道立本であるッ 覺ウム、御身が名題の豪傑齊藤伊豆入道立本であつたか、ソレハ〜……」と、覺禪坊は急いでとびのき、齊藤立

院 藏 寶 の 後

本を助け起し、覺然し、貴公は何等がためにかく深夜にこの處へ立イヤ、某は府中へ一泊いたしたる處、圖らずも辻ぎりの噂を承はり、下人民の艱苦をみるに忍びず、退治なくれんとこれへのりこんできたのでござる、シテ御坊は……覺されば拙僧とてもその通り、實は昨夜斯様く……と、よつて今夜のりこんだる處、貴殿がいらるゝから、これ果して辻ぎりの張本ならんと心得、そんな失禮を仕つた次第、立アハ……拙者もやはり同じだ、ハ、お互いに味方同志が闘合をするとは驚いた、マア、けががなくつていゝ、盃梅だ、時に覺禪坊がの瓢箪は空かどうだ、覺ア、酒は一杯つめてある、立ウム、其奴はあり難い、近づきのために一杯やらう、覺いかに、それよからう、辻ぎり退治にきて天下の榮傑にであふとは意外だ……オヤツ肝心の者は袖の中で滅茶く……立イヨ、組打のために鶏卵がわれてしまつたのか、ナアニ酒さへあらば結構だ」と、物に頓

院 藏 寶 の 後

着せぬ兩榮傑は、石に腰うちかけ、さしつさ、れつ、口のみにガブ、やりだした、立ア、氣持のよい事は話にならん、エ、少々よいが廻りかけた然し今夜はでないであらうか、覺ア、どうも悪い事だ、昨夜あれほどいつてあるのだから、決して間違ふ氣遣なからうと思ふのだが、わが手並に恐れてよくこないのかもしれん、とに角まだ刻限は早い、暫らく黙つてまつていらうではないか、立ウム、それよからうと、兩人は黙然と相まつてたりしたが、先刻より根限り戦つて、大分疲れている處へ、冷酒を煽りたてたものですから、次第によいは廻つて、段々睡くなつたさへ、二人共コク、と居睡りを始め、立イ、覺禪坊居睡りをやつてはいけん、いつとびだしてくるかも知らんぞ、覺ウム、ケド御身もチヨイ、やつているではないか、油断をしてはだめだよ、立ウム、合点だ」と、互いに氣をつけあつております内、もふ堪らなくなるたど

院 藏 寶 の 後

みへ、覺禪坊はそれへ横によつ倒れて、覺ア、睡い、  
 藤暫らくみはりを頼むよ 立イヤ、其奴は困る、實はおれが頼  
 みたいと思つてゐる處だ 覺マア、そういふは、ホンノ暫時の  
 間だ」と、腕を枕にはやグウ〜と躬をかき始めた 立オヤツ  
 氣樂な坊主もあつたものだ、然しおれも大分ねむいエ、イ儘よ  
 交際かねてやらう」と、又立本も横になり、雷の如き躬をか  
 て、前後正体もなくねこんでしまいました、稍暫らくいたします、向  
 豪胆不敵なる舉動でございます、稍暫らくいたします、向  
 ふの方よりノソリ〜と前後をみまわし、やつてきたつた一人  
 の若武士あり、近づく儘に躬の聲をきき答め 武イヤツ、なん  
 だらう、グウ〜と二つ躬かきかへてゐるが、真逆辻ざりに出  
 きて、ねる様な氣樂な奴もあるまい、それにしても不思議な次  
 第である」と、思いながら段々側へより、じつと月に透してみ  
 る、こはソモいかに、揃いも揃つて二人の大坊主が、大地に横

院 藏 寶 の 後

に倒れ、快よく熟睡いたしてゐる、これをみたる若武士は、一  
 刀の柄を握つて立ち留り 武ブ、ム、一人は大入道で帯刀に及  
 んでゐる、一人は墨染の破れ衣をきてゐる容子では、坊主と入  
 道に迷いはないが、どうも怪しげな風体である、殊に片傍に瓢  
 箆の轉がつてゐる處をみると、此奴等兩人が辻ざりに出て、ま  
 つてゐる退屈だから酒をのみ、思はずしらすねいつた者に相違  
 ない、已れ大膽至極な糞坊主である、イデ真二ツにいたして  
 れん」と、ヅカ〜と側に進み 武イヤ、兩人共おきろ、汝等  
 をひつ捕へんため、この處へのりこんだツ」と、足をあげて確  
 たどけらんとするその途端に、ムク〜とおき上つたる齊藤立  
 本は怒りの大音はりあげて 立ヤア、青武士の分際で天下の豪  
 傑を足げにせんとは不埒なり、さては汝が辻ざりの張本と覺へ  
 たり、イデひつ捕へて一泡ふかさにやおかん」と、一刀ズリと  
 ひきぬいた、この物音に覺禪坊もよと眼を覺し 覺イヨ、齊

院 藏 寶 の 後

藤巧くやれツ、貴様が叶はぬ時にはおれがゆくぞツ 立ナアニ  
 こやつらの五人十人はおれ一人で澤山だ、観念しらう」と、太  
 刀風烈しくきり掛る、相手の若武士も、却々の豪傑とみへ、臆  
 したる気色もなく、一足とび下つて、チャチーンとうけとめ、  
 武ヤ、盗人猛々しいとは汝等の事だ、覺悟に及べい」と、  
 勇氣盛んに結び、上段下段、丁々發止と、火花を散してこ  
 れを先途と奮闘の光景は、めざましける事共なり、凡そ三十有  
 餘合の戦いに及んだが、さらに勝負相つきません、先刻より片  
 傍にあつて、兩人の戦いをみていたる覺禪坊は、覺オヤツ、こ  
 の若武士却々強い、人品骨柄といひ斯程の腕前ある奴、よもや  
 辻ざり退治にのりこんだのかもしれない、事によつたら我々と同じく  
 てやらう」と、バラリとそれへどんでいで 覺アイヤ、兩人共  
 まつた…… 立イヤ、またぬく、他迄此奴をさりすてね

院 藏 寶 の 後

ばおかんだ 武ナニ養ツ、坊主邪魔するな、こやつを片づ  
 ば後で、汝も共に退治する積りだ、一騎うちの勝負をするに妨  
 する法やある、そこのいたく……」 どうしても二人が聞き  
 入れませんから 覺エ、イ、面倒なり」と、何か得物はなにか  
 とあたりを見廻すと、五七間向ふの野中に、一尺廻りの杉の木  
 がはへている、これに目をつけたる覺禪坊は、覺オ、屈強の  
 得物であるツ」と、バラリと進みよつたかと思つたら、兩手  
 にムンツとひつ掴み、ヤツと一聲力に任せてひつ張れば、さて  
 も恐るべし根元よりムリくと烈しき物音と共に、何なく杉は  
 ひきぬけた 覺ウム、之さへあらば大丈夫だ」と、掴みつい  
 たる砂を拂ふ間もあらばこそ、小脇に抱へてドスくと兩人の  
 側へかけよ、突然根こぎになしたる杉をふり廻し 覺ヤア、  
 この勝負は寶藏院覺禪坊が預かつた、まてといつたらよしてし  
 まへいツ」と、双方のきり結んだる太刀をめがけて、エイツと

院 藏 寶 の 後

ばかりに件の杉の木で叩きすへると、流石の兩人もアツと一  
 手許へひき、思はず後ろへとび退り立ア、痛い……目へ砂  
 がはいつた」と、二人ながらに目を擦つてゐる、この時覺禪坊  
 は覺イヤ、砂がはいつた位は大事ない、兩虎相戦ふ時は一  
 方は傷づき一方はしす、天下の豪傑同志が、かゝる事で犬死を  
 しては物笑いだ、然し御身は何人でござるや、恩僧は南都の住  
 人資藏院覺禪坊である」と、名乗をきいた件の若武士は、驚き  
 たる顔色にて武ヤ、さては貴僧は資藏院流片鎌鎧の名人、  
 覺禪坊殿であつたか、何をか包まん某は徳川四天王の隨一、本  
 多中務大輔忠勝の二男、出雲守忠朝でござる、スルト齊藤立  
 本も吃驚いたし立アム、恐るべき若武士と思つたが、夫では  
 御身が平八郎忠勝殿の二男、出雲守忠朝殿であつたか、イヤ失  
 禮をいたしました、拙者は肥後加藤家の臣、齊藤伊豆入道立本であ  
 る 忠エ、……、貴殿が和漢兩朝にその名を轟かしたる、齊藤

院 藏 寶 の 後

鬼立本殿かつ、これは誠にとんだ無禮を仕つた、實は某父  
 忠勝の命により、總洲大喜多より三洲岡崎へまいつての戻り道  
 今夜府中の陣屋へ一泊いたせし處、近頃辻ざり流行との噂をき  
 ら、これ必定徳川家に敵對する奴の所業ならん、イヂひつ捕へ  
 て詮義に及んでくれんと、この處へのりこみきたつてみれば、  
 あに圖らんや御身等兩君の熟睡、さては辻ざりの曲者め、大膽  
 にも酒によい漬れて不敵至極の舉動であるど心得、齊藤氏の頭  
 をけらんとして、事のこゝに到つたる次第でござる、然るに圖  
 らずも天下の英雄にお出合いするとは面目これにすぎず、平に  
 御勘辨下されい覺アム、左様でござつたが、恩僧も先刻之な  
 る齊藤を辻ざりの曲者と存じ、闘試合をいたしましたのでござる、  
 アツハ、……、ダカラ齊藤よせといつたのだ立イヤ、おれも  
 徳川家名題の出雲守忠朝としつたら、滅多にこんな事はしない  
 のだが、頭をけらうとしたに腹をなて、ツイ癪に障つてこの有

様、マア何方もけがななくつて仕合せだつた」と、三人は松の大木の根元に腰うちかけ、互いにその奇隅を語りあい、うちどけて武勇の物語りに及んでおりますといふ、必竟辻ざりの張本人は、これ何者でありますや、この場の落着は如何相なるか、ソハ次席をよんでしり給へ……………。

第 四 席

然るに剛、膽極まる三豪傑は、互いに種々の物語をいたしおるするが、全体この齊藤伊豆入道立本といふ人却々天晴な豪傑でございまして、明智日向守光秀の兩翼といはれたる、明智左馬助光俊、齊藤内藏助利三といふ兩軍師がございました、この齊藤内藏助利三の二男にいたして、十六才の初陣が山崎合戦でございしましたが、丁度この山崎合戦には、父の内藏助利三が明智

方の先陣を承はり、立本も父に従つて軍中にありました、處が羽柴秀前守秀吉は破竹の勢をもつて、五萬有餘の大軍をくりだし、森々どつめよせる、先陣齊藤内藏助利三は既羽柴の大軍おしよせたりと聞くと、次男伊豆利光をよびだされ、内いかに利光承はるに秀吉既に充分備へをなしたる由聞き及ぶ、明日の戦いにこそ、明智家にどりては最も大切の合戦なれば、汝之より斥候をいたし、敵方の先陣より後陣迄見落しなくとり調べてまいれ、この役目を仕損じる時は味方の大事、主家の存亡はそちが今夜の斥候にあるのじや、能々心いたして勤めるがよから、スルト利光は頭をさげ、利ハツ、若年の某へかゝる大役を仰せつけらるゝ段、身にとつてこの上なき面目、必らず共に御父上のおめがね逃げにならざるやう、飽迄敵の備へを見届け、直様たち歸るでございませう、御安心あつて然るべし」と、さらに恐るゝ氣色もなく、父利三の前を退き、立派に斥候の役を勤め

て歸りました、この伊豆利光こそ、當年とつて十六才、殊に初陣で華々しき戦ふりは、敵味方の目を驚かし、天晴涼々しき若武士よと謠われましたが、戦い利あらずいたして明智家滅亡のその後は、故あつて加藤主計頭清正の家來となり、伊豆入道立本となつて、和漢兩朝にその名を轟かしたる、鬼立本といふはこの人であります、なほ又本多出雲守忠朝は、平太郎忠勝の二男でございまして、父に劣らぬ豪勇無双、後年大阪陣において、主君家康の一言に憤激なし、汝死の覚悟を極め、百里と名付たる名馬に跨り、父より譲りの蜻蛉さりの鎗を提げ、縦横無盡に奮闘して、敵軍を粉灰微塵にたいちらし、憐れ一門郎黨と共天王寺夏野の露ときへうせて、立派なる討死をとげるのでございします、かゝる人物が三人も不意にあつたのでありまして、その話は却々につきない、大きな聲をだして笑い興じている、スルト覺禪坊はふと氣づき、覺イヤ各々、我々は辻ざ

り退治にきたのであつてみれば、こんなに高聲で話しておつてはいけな、立ウム、そうだ、頃と忘れていた、辻ざりの奴も我々三人の威勢に恐れて、折角きてもにげだすかも知らん暫らく黙つておらうでないか、忠いかに、そうだつた」と、三人はそれへ腰かけたなり、無言でもつてあたりをにめ廻しております、聽て半時ばかりたちますと、向ふよりバタ／＼と人の足音が聞へる、早くもき、つけたる本多忠朝は、忠ヤア、きた／＼……立ウム、成程まいた様だ、こゝに眼ばつてはよくこないだらう、松の蔭に隠れておらう」と、三人は密かに木の向ふ側へ廻つて身を忍ばせる、まつ間程なく彼方より出てまいつたる六人づれ、何れも黒装束に目ばかり頭巾の扮装でもつて、長やがなる一刀を帶し、ノソリ／＼とやつてまいり、「オ、昨夜やられたのは丁度こゝだぞ、乙ウム、そうだ、ヤツとさ、さりこむとヒラリ、隠されて、チヨイ／＼と二人ながら手を握

院 藏 寶 の 後

まれた時の痛さ 甲「ウム、汝等の弱虫は命ちをとる價值がない  
同類を明晩は深山つれてこいッ……キリッ」たちされッといつ  
て、五六間向ふへなげだされ時には、イヤハヤどうも驚いてし  
まつたよ…… 丙「然し、今夜は大勢揃つてきたから大丈夫仕返  
しはできる、まだきていないかい 丁「ウム、一向みへない様だ  
丙「じゃア、暫らくまつておらう」と、六人は松の根元に腰を  
かけんとする折柄、バラリ墮りてたる三葉傑は、天地に響く大  
音聲をはりあげて、立「ヤア、かく深夜にこの處へきたつたる。汝  
等は、定めてその方等のきたるをまつ事久し、そこ動くなッ」  
と、先にたつたる一人をひつつかみ、ヤツと一擧頭顛倒となげ  
だした、續いて覺禪坊と本多忠朝も、各々一人宛をひつ捕へ、  
礫の如くほり出す、残り三人の奴は大いに怒り 甲「ヤア、何奴  
なる予不埒至極、イチ三丁念佛唐竹わりの腕前みせてくれん」  
と、ズラリッ、と一刀ひきぬき、三人望んできり掛つた、齊藤

院 藏 寶 の 後

立本、覺禪坊、本多忠朝は、ヒラリッ、と体を駭し、暫らくは  
扱ふておりましたが、きりこむ太刀風が餘り烈しいものですか  
ら、齊藤立本と本多忠朝は同じくぬき合せ、チャチン、とこ  
ゝを先途とより結ぶ、寶藏院覺禪坊も手早く先刻の根こぎなし  
たる松の木をとるか早い、ビエー、とより返し、勢い鋭く  
戦つてゐる、相手もなんしろ奇代の腕前とみへ、エイオーと喚  
き叫んで、まけず劣らさふみこみ、奮闘する有様は、悔り  
難くぞ相みへたり、流石の三葉傑も胸中密かにうち驚き、覺  
ム、此奴却々の手の内だ、昨夜の木ッ葉と違つて、我々ど戦つ  
て互角の勝負をするとは感心な奴、定めて名ある人物に相違あ  
るまい」と、こよ思いましたる處より 覺「サア、辻ざり……貴  
様は何者だ、われは南都の豪僧寶藏院覺禪坊だッ、三人共名を  
なのれッ……」と、戦いながらに呼はると、伴の三人も驚いた  
る風休にて。 甲「ヤイ、さては貴様は寶藏院流片鎌鎧の大名入、



寶藏院覺禪坊かッ、道理で一才強いと思つた、オイ坊に阪田：  
 …もふよせ〜」と、聲をかけたッ、後へどび退り、甲イ  
 ヤ覺禪坊、われは黒田家の浪人後藤又兵衛基次であ、るまつた  
 かれなるは兄弟分の塙右兵衛門直之、阪田庄三郎である」と、  
 きいた覺禪坊は大いに驚き、覺ナニ、さては後藤基次殿かッ、  
 オイ齊藤、本多、その戦いはひきわけ、天下の豪傑塙右  
 衛門に阪田庄三郎たぞッ……」と、聲をかける、齊藤と本多  
 も一刀ひいてバラリとびのき、中にも齊藤立本は立ナニイ、  
 おれ相手が塙だッ、塙右衛門ならしつてゐる筈だ、ヤイ頭巾を  
 とつてみる……」と、スルト塙右兵衛門は月に光りに立本の顔  
 を透し眺めて、團イヨ、貴様は鬼の立本であつたか、存分強  
 いやつだと思つていたが、頓としらなかつた、彼方では本多  
 忠朝と阪田庄三郎が互いに挨拶をやつてゐる、この時後藤又兵  
 衛は一瞬に向つて、又然し、我々を退治にくるとは、餘程の豪

傑でなくばできない仕事だと思つたが、流石は揃つた三豪傑、  
 イヤ怪我がなくつて結構……」と、三人は覆面頭巾をとり  
 外し、改めて禮をする、齊藤立本は少しく怒りをおびて、立イ  
 ヤ、後藤氏や塙阪田ともあらうものが、辻ざりするとは何事だ  
 餘り無茶な事をするではないか、塙アハ……オイ立本……まじ  
 めになつて怒るな、我々が辻ざりをやつてゐるにも、大いにわ  
 けのある事だ、本多忠朝の前だから一寸いひ悪いが、關ヶ原戦  
 争以後は、諸國大名は多く徳川家へ加擔なし、豊臣家はあつて  
 なきが如く、甚だ心外千萬と存じ、後藤の兄貴と相談して、諸  
 國漫遊の序にこの處へやつてまいり、少々軍用金を集め、又は  
 味方の同志を募らんだため、晝は久能山へたてこもり、夜になる  
 とこの處へ出てきて、態と辻ざりをやつてゐたのだ、その中に  
 豪い奴が出てうせるかと思つて、毎晩〜でばつても、これと  
 いふ豪傑が少ともこない、處が昨夜二人の家來がたち歸つての

院 藏 寶 の 後

注進に、大坊主が一人とび出し、二人を何のくもなくとつてな  
げ、刺へ汝等の命をとりも価値がない、同類があらば明夜つ  
れてこいと、大言を拂つてたちまつたと聞き、已れッ小癩なや  
ッ、イデ今夜はひつ捕へてくれんと、かく一同がのり出してさ  
たのだが、圖らすも名題の豪傑ばかりにであふとは不思議の到  
り、まづザツとこういふ話した、アハッハッ、……」と、阿々  
とうち笑つてゐる、これをきいた本多出雲守忠朝はヅカ  
進みいで忠イヤ、只今の一言は甚だその意をねぬ次第、拙者は  
徳川家の臣であるが、後藤氏とは關ヶ原戦争において、一度お  
目に掛つた事もある、堀氏の高名も雷の如く承知してゐる、阪  
田庄三郎といへば、堀氏の郎黨として鬼神の勇ある豪傑と承  
る、然るにその各々が辻ぎりをして町人百姓を苦しめるとは心  
得遠い、殊に目下徳川家の勢い盛なるをねたみ、云々せられる  
とは聞きすてならぬ、われも若年なれども徳川譜代の一人であ

院 藏 寶 の 後

るとは、お望どあらば各々を相手に果合をいたしてさし支へな  
い、それとも今夜以後辻ぎりをよされるに於ては敢て谷めん、  
拙者の身体は御身等とは違つて、出雲守に任官なし、徳川の破  
をはんでゐる者であるから、他迄徳川家の邪魔する奴はきつて  
すてるの覺悟である」と、一刀の柄を握り血相かへてつめよせ  
る、さかの氣の堀團右衛門はかつと眼を怒らし、團なんだ本多  
戰場萬馬を往來した堀團右衛門藤原直之に向つて、果合を望む  
とは不埒千萬、オ、少々不足だが相手にとつてやらう、サアこ  
い」と、團右衛門も同じく鯉口寛げにしより、あはや兩豪傑は  
今しも一刀をひきぬかんとすも一刹那、後藤又兵衛と寶藏院覺  
禪坊はバラリと兩人の間とびこみ、又「コリヤ堀、何を馬鹿な事  
をいふのだ、こんな處でまりあつた處で、何方がしんでも犬死  
だ、本多氏のいふ處にも一理あり、全体我々が徳川家の領分内  
をあらしたのが悪い、マア、怒らすとまでッ、スルト覺禪

坊も本多忠朝をおしなだめ、覺イヤ本多、血氣に任せて怒つてはいけぬ、成程御身は徳川家を思つていふのだから公明正大ではあるが、一朝の怒りに任せて、無益のさき死にをするは武士の本意ではない、眞の武士は君の馬前に屍を横へるが本望だ、この場の處は我々に任してくれ」と、漸々に納得させて、覺イヤ後藤氏、天下の業傑たる御身等が、辻ざりとは面白くない、今夜以後は断じてよして貰いたい、又いかに承知いたしました、別に我々は面白つもりでやつていた譯ではないが、少々路金も不足をするし、それやこれやでふと思いついた悪戯だ、イヤ人騒がせをしてすまなかつた、時に齊藤……貴様はどういふ次第で、このあたりまでいる、立ウム、拙者は二ケ年のお暇を貰つて、諸國漫遊をしてゐる處だ、又フム、そうか、シテ肥洲公は御機嫌であるか、立オ、わが君は相變らず御壯儘に涉らせられる、御身が黒田家を退散した事は、大阪表で先年聞き及び、

ア、おしい事をした、黒田の後藤の黒田かといはれた位いの業傑が、浪人をするとはどうした事かと、實は不審に思つていたのであるが、御主君甲斐守様と意見があはなかつたそうだな、又イヤ、そうではないが段々若手の業傑が出てくると、我々の如き老朽は役にたゝなくなる、それゆへお暇を願つて物ずきに浪人したのだ、アハ、……と、六人の業傑は暫らく種々の物語りをいたし、もはや曉近く相なりましたからして、又夫では、これで別れやう、覺禪坊御身とは鎗の試合をいたしたいのだが、又後日對面の時に譲り再會を相またう、覺イヤ、愚僧も天下三鎗の一人たる貴殿にであい、互いにその術を比べたいとは年來思つてゐる處である、然しこゝには得物もなく、遺恨ながら他日に譲らう」と、こゝで一同は快よく別れをつけ、後藤又兵衛、城圍右衛門、阪田庄三郎、まつた三名の家來は何處ともなくたちさりまする、後に覺禪坊、齊藤立本、本多出雲守

の三人は互いに顔見合し、覺イヤ、どうも恐ろしい辻ざりがあつたものだ。立ウムそうだ、我々よりも一枚上手の豪傑共がでるのだもの、大抵な奴がのりこんでやられるのはむりもない、本ハ、……、三丁念佛唐竹わりといつて騒く筈だ、然し無茶なことをするものだ」と、三人は色々噂をいたしながらその場をたち、うち揃つて府中の町へ戻つてまいり……、覺禪坊は兩人を三保屋へ案内をして、こゝに三豪傑は酒宴を催ふし、互いに親を盡して交際を結び、後日の再會を約して袂を別つ事と相なりました。茲に圖らずも覺禪坊胤榮が、奥津の海岸においで、憐れなる婦人を助けたるばつかりに、一つの騒動を惹きおこします。お物語りは例によつて例のごとし……。

第五席

る程に豪僧寶藏院覺禪坊は、その翌朝三保屋をさつてプラリと道を進み、彼方此方を見物いたしながら、はや江尻も過ぎて、奥津街道の海岸清見寺の側へ出てまいりたる頃には、もよほは夕暮に近く、十三夜の月は大海原を向ふ遙かの空に現はれて、さねばならぬか……」と、既に清見寺もちこへて、今しも松並木の街道から海岸へでやうとする處迄くるとその街道の右手の方に軒の辻堂がある、軒は傾き戸は破れ、いかに物凄そうな場所ではございませうが、豪氣の覺禪坊は少しも恐れず、覺ウム、此奴は忝ない、宿にとりはぐれて困つていた處だ、何でも構はない、雨露を凌げは結構だ、どれあの辻堂で一夜を明そうか……」と、ツカくと進みより、ふと耳を澄しますと、辻堂の中より小兒の泣聲が聞へる。「オヤツ、小兒がないてい

とに角見届けてやらう」と、覺禪坊は審りながら辻堂に歩みよ  
り、破れた扉をたし開いてみると、内部は薄暗くて陰気な事は  
限りもございませぬ、そんな事に頓着のない覺禪坊は、じつと  
些をすへて見廻しますと、こはソモいかに、年の頃二十五六、  
衣物はみる影もなく粗末ではあるが、人品骨柄も賤しからぬ一  
人の婦人が、板の間にうつ倒れ、急病でも起つたものか、唇を  
くい縛つて身を悶へ、側には六つか五つばかりの女の児が、す  
ゝりなきをして母親に縋りついている。覺禪坊は、どうしたのだ  
……と、情け深き覺禪坊は忽ちとびこみ、婦人の側へかけよ  
ると、婦女は初めて氣のついた容子で目を細く見開き、苦痛を  
忍んでおき直らうとする。覺イヤ、決して怪しいものではない  
一体どうしたのだ、急病でも起つたのか」と、親切にといま  
す。何れの御出家かは存じませぬが、御親切に……妻はこゝでしぬ

かもしれませんが、どうかこの兒だけは……」と、後は言葉も  
いせず、兩手を合せて兩眼から、熱き涙をハラ／＼と流してい  
る、覺禪坊はみるより最も不憚に思い、覺イヤ、心配する事は  
ない、一寸した病氣位で、人間が容易にしんで堪るものか」と  
慰めながら婦女の脊中をなで擦り、覺オ、お前もなくてはな  
い、今に阿母さんはよくなるよ」と、種々と介抱いたしており  
ますと、覺禪坊の誠心か通じたるにや、婦女も段々苦痛を忘れ  
てまいり、どうも悶へるのも薄らいできた、そこで覺禪坊も漸  
々安心して、覺然し、其方はどこの者で、今頃この寂しい處へ  
どうしてきたのだ、女ハイ、お蔭で大分瘵氣も治まりました、  
何を隠し申しませう、妾はこの向ふの由比の者で、名をお仙  
と申します、父は北條家の榮傑清水太郎左衛門様の邸、伊豆  
七郎重國と申しましたが、味方ヶ原の合戦で御主人と共に敢  
く討死、妾はその時漸々十三才、母と二人で北條家の扶持を頂

院 藏 寶 の 後

き、なに不自由なく暮らしておられます内、聞らすも北條家は豊臣  
徳川の太軍にせめられ、思いもよらぬ滅亡、母はそれに氣を落  
して間もなく病死、妻は只一人となり残され、どうしやうにも仕  
方がございませぬから、この由比に少しの知べあるを便りに、  
伊豆よりこの土地へまいりましたが丁度二十才、人の勸めによ  
りまして、山比ヶ濱の郷士由比九八郎の許へ嫁つぎ、一年ばか  
りするとこの兒をうみ落し、いと安樂に過しておりました、處  
が良人九八郎はとうしてまがさしたものがふいに身持放埒にな  
り、氏素性もしれぬお高といふ婦女を家につれこみ、妻をみつ  
てないかしろの當り方、お高迄が出てゆけかしの面憎き舉動、  
剩へこの兒に情く當り、妻も辛棒かできず、頭娘をつれて家  
をとびだし、でいりの者の宅に厄介になつていました、夫で  
もまたあきたらぬとみへ、お高といふ婦女は妻を村よりおいた  
るんと様々の悪企み、遂にはでわりの宅にもいる事できず、け

院 藏 寶 の 後

さ漸々これ迄まいりましたなれど、餘り残念無念と思いつめた  
のが瘴氣となり、けさよりこんなに悶へ苦しんでおります、  
どうか御推量下さいませる様……」と、いと永々と憐れな物語  
り、覺禪坊は共に目を屢叩き覺つ、それは氣の毒な事じや  
たれあらう清水太郎左衛門の郎黨伊豆七郎重國の娘と生れた身  
も、時よ時節とはいひながら、誠にうき苦勞をするものだ、イ  
ヤ思はず貴い泣をした、マア思僧が山比九八郎殿にあつて、そ  
の不心得を諭してみやう程に、決してクヨク思はんがよい、  
然しこふ日かくれてまいつたに、こゝにいるのも難儀であらう  
殊にお前も小兒もけさから食事をしないといふではないか、ど  
こかこの邊りに宿屋があるであらう 女ハ、之より二十丁ば  
かりゆきますと、一軒の宿屋がございます 覺つ、ムそうか、然  
らばそれへまいらうと、覺禪坊は婦女を助け起し、小兒の手  
をひいて、今しも辻堂をいでんとする折こそあれや、辻堂の後

ちよりバラくく五六人の若者現はれいで 若や、坊主  
 め太い奴だ、由比の奥様を誘拐してにげんとは大膽な事さらす  
 わい、俺等は旦那様にいひつかつて、けさから所々方々と捜し  
 ていたのだ、サア奥様もお嬢様も此方へおいでなさい、お供し  
 て歸りませう」と、二人をひつたてんとする、お仙は身を震は  
 して、わが子諸共覺禪坊の後へ隠れ 仙コレ、お前等は、雇人  
 の身でありながら、お高とぐるになつて、いつ迄私を苦しめる  
 のじや、宅へ歸つたら母子一緒にせめ殺されてしまいます、決  
 して歸る事はなりません、スルト若者共は呵々とうち笑い、  
 若アハ、……」、そんな事は我々のしつたことじやない、お  
 前様等をつれて歸れば、御褒美がもらへますのじや、サアそう  
 ぐづぐづといはずと此方へおこしなさい」と、むりに手をとり  
 ひきすりゆかんの権幕でございますから、みるに見兼ねた覺禪坊  
 は若者をつきのけて聲荒らげ 覺ヤイ百姓、貴様等は情けもし

らぬ奴だ、何といつてもやはり主人ではないか、手荒な事をい  
 たすと許さんチツ」と、はたとばかり睨みつけると、若者共は  
 口々に 若なんじやい坊主め、そんな爺が怖くつてどうなるも  
 のか、邪魔さらすと叩きのめすぞツ、そののけく」と、バ  
 ラく、と力自慢の若者共は、覺禪坊めがけてつかみ掛つてくる  
 覺ハツハ、……、士百姓の分際で不埒な振舞いたすなツ」と  
 ヤツと大喝諸共に、鎧をそれへなげすておき、猿臂を延して前  
 にきたつた二人の胸倉、チヨイく、とつかむが早いかエイツと  
 ばかりに犬轉ろなげ、その場の方へぶつつける 若や、田吾  
 作に権平がやられたツ、已れツ糞坊主ツ」と、又も三人がくみ  
 ついてくる奴を、これも何なくとつて押へ、手早帯をどかして  
 五人ながら珠數撃にいたし 覺ハ、……、どうだ百姓、糞坊主  
 に敵ふまい、元より汝の宅へのりこみ、おれが白い黒いをさば  
 いてやる、とや角いつたら九八郎もお高も捻り潰すから左様心

得らう」と、飽造五人の奴を威しつけ、後ろをふりむいて莞爾と笑い、世ハツハ、……、お女中吃驚したであらう、ナアニ大丈夫だ、之より御身の宅へまいつて、直々談判に及ぶ考へた、怯々せずおこしあれい」と、嫌がるお仙母子を種々と宥め、五人をひつたてその場を後に、段々由比ヶ濱へやつてまいり、由比九八郎の門前にさし掛りますと、お仙母子を門口にまたしおき、登今に、吉左右をおしらせ申す、どこが門内で休んでいるがよい……自分の宅だ遠慮があるものか」と、母子を片脇に忍ばせおき、五人をひつたて、ドス〜とはいもこみ、登ヤア頼む〜……」と、聲高く呼はりますと、奥より一人の召し使いが燈火を持つて出てまいり、若へい、何方……」と、いひつゝ、ヒヨイと縛られたる五人の若者を見て吃驚仰天、若ウワ、泥棒だ〜……」と、死罪だしてこけつ轉びつ奥へにげこんだ、世ハツハ、……、弱い奴だな、今度はどんな男がでるかしたら

ん」と、覺禪坊も面白半分、態と難かしい顔をしてたち開張つておりますと、家の内は俄かに騒ぎたつて、△先生、大變でございます、脊の口が泥棒がきました、先ナニ、泥棒……其奴は結構だ、この間から酒ばかりのんで大變馳走に相なつたが、少しも恩報じができませんのでまぢかねていた處だ、……シおれがのりだしてひ掴へてやらう、皆の者騒ぐでないぞッ」と、大きな聲がしたかと思ふと、ドス〜と現はれたる大兵、肥満の武士あり、一刀を鷲掴みにいたして、はたと覺禪坊を睨みすへ、武ヤイ坊主、天下の傑傑がこゝにいるともしらす、よくも泥棒にはいつてきたせ、イデ真二つに遣してくれん、そこ動くなッ……」と一刀ぬきうち、ヤッ〜と一撃きりこんだ、覺禪坊は問答する間もあらばこそ、世オヤッ、此奴氣の短かい奴だッ」と、思いながらバツと体を躲して、もつたる鎧にてカツキどうけとめ、一足後へとび退るが早いか、バラリ鞘拂いに及ん



で、隆々どひき扱き 覺サア、こいきたれ、天下の豪傑ともあ  
 らうものが、事の善悪をとり糺さず、泥棒呼はり片腹痛い、イ  
 デ南都の豪僧 寶藏院 覺禪坊が 錦玉にあげてくれん……」と、勢  
 い鋭くつゝ掛る、これをきいた件の武士は、横手にヒラリトと  
 びのいて 武マアまで、坊主只今何といつた、寶藏院 覺禪坊と  
 いつたのは 貴様の名前か 覺 黙れッ、他人の姓名をなのつて堪  
 らうや、寶藏院 覺禪坊は 天下におれ一人しかないわい…… 武  
 エ、……、夫じやアこの喧嘩は中止、われは何を隠そう武  
 田家二十四將の随一人、馬場美濃守 信房の三男、馬場三郎兵衛  
 信兼だッ、危いッ…… 覺 ナニイ、さては天下名  
 題の大酒のみ馬場三郎兵衛とは、御身の事であつたかッ 馬  
 かにもおれだ、シテ 覺禪坊この場の容子は一体どうした……、  
 覺 オ、實は云々斯様、よつてわれ黒白を裁判んための  
 りこんできたのだ 馬ナアニ、夫じやアこの家の主人と後妻を

高が悪いのだな、ヨシおれも貴様に加擔して一談判に及んでや  
 らう、ヤア、當家の主人確かにきけ、貞操無二なる妾をおい  
 だし、素性もしれぬ婦女に幻をぬかすとは能々の鼻たれ野郎だ  
 寶藏院 覺禪坊と馬場三郎兵衛 信兼が、之より成敗いたしてくれ  
 ん、いひ譯あらば申しさし、に及べい」と、呼はり、奥の方へ  
 と取つてかへす、覺禪坊は愈々呆れ返り 覺 オヤ、今迄き  
 りこんでおつたが、掌を返す様におれの味方になるとは早い奴  
 だ、イヤ面白男があつたものだ」と、錦を毘沙門突にいたし  
 て、仁王だちに相なつて、容子如何にと相まつている折柄、こ  
 はソモいかに、俄かにジャン、と非常をつぐる梵鐘の響  
 がなり、涉つたかと思ふ間もなく、ワア、と門前忽ち騒が  
 しく、夥多の百姓は各自に竹鎗、棍棒をさげ、轟々九八郎の宅へ  
 おしかけてまいり 百ソレ、泥棒だ、……、と押しへいがす  
 なッ……」と、ドッとはかりに亂入いたしまするといふ、之よ

第 六 席

り由比ヶ濱邊の大騒動、豪傑が九八郎お高をとつて押へ、貞女  
お仙を助けるの顛末は、暫らく休息の上次席におさまして行くは  
しくのべます……………。

この時、寶藏院覺禪坊はきつと門前を見渡しながら、覺ア、ム、  
察する處、この家の者が非常の鐘をならして百姓を集め、我々を  
めしとらん手段よな、何を小癪なツ、もふこうなつたら用赦は  
しない、イデおい返してくれん」と、百姓の眼前にバラリトど  
び出し、覺ア、百姓、われを泥棒とは不埒至極、こゝよりは一  
寸もはいる事罷りならん、萬一亂入いたすに於ては、片端より  
田樂ざしたぞツ」と、大喝一聲となりつけると、荒くれ男の百  
姓共は口々に「百ヤーイ坊主め、よくも由比の旦那の屋敷へ宵

の口から泥棒におしこみやアがつた、にがす事じやアないぞツ  
ソレめしとれい……………」と、バラリと覺禪坊をおつとりまさ、  
得物くをふりたて、四方よりうち掛る、覺禪坊も已をわす、  
身にふり掛る火の子は拂はねばなりません、もつたる鎧をビユ  
ーくと四角八面にふり廻し、つき殺すは不憚の到りと、石突  
をもつてなぎ倒し叩きふせ、無茶苦茶にあれたした、奥では豪  
傑馬場三郎兵衛、今や九八郎とお高を双方の小脇にかいこみ、  
その場へ躍りいで、天地に轟く雷の大音聲をはりあげて「馬ヤ  
ア、百姓共、これをみる、シタバタさらすと兩人を捻り潰す  
がどうだツ」と、二人の首筋掴んで、それへユツとさしたる  
れ、百姓共もこれに勢をくじかれ「百ヤ、旦那様がお人質  
にとられた、こりや敵はんにはげろ……………」と、ねが鳥合の百  
姓共、兩人の威勢に恐れをなし、蜘蛛の子を散すが如く、われ  
先にとにげ出す、にぐる奴には目もかけず、兩豪傑は顔見合し

覺アツハ、……、巧く二人をいけどつたが馬オ、この通  
 りだ、おれが奥へよんこむと、このお高めが二階の物見臺へ上  
 つて、梵鐘をならしていたのだ、ヤイ九八郎、けよ迄厚く馳走  
 に相なつたが全体おれは不都合をする奴は恩人だからといつて  
 遠慮をしないのが性分だ、一体その方はこのお高の色香に迷つ  
 て、貞操正しいお仙とやらをおいだしたそうだが、甚だもつて  
 宜しくない、萬一おれがこの家に厄介となつていなかつたら、  
 兩人共あれなる寶藏院覺禪坊といふ豪僧に突殺される處であつ  
 たのだぞツ、今日以後お高をほりだして、先妻のお仙母子を戻  
 すかどうだ、スルト姦婦のお高は聲振はし高エ、イ、お前  
 さん等のしつた事じやアない、旦那が妾を可愛がるに他人の指  
 圖はうけません、うつ放つておいて下さいます、それにお仙母  
 子は勝手に出ていつたので、今日もけさから捜しにだしていた  
 のじや、それにかの坊主がいらぬ世話をやいて、あの通り六人

を縛つたりして……、皆遣いはさず覺禪坊は聲荒げ覺黙れ  
 ツ婦女、汝が幾等口先をもつてごまかさんとしても、おれは整  
 然と存じているぞツ、お仙母子はその方がセ、うだしたのであ  
 らう、それに何ぞや勝手に出ていつたとは不埒千萬、理を非に  
 まげて村民を瞞着なし、人間面をするど許さんぞツ、又九八郎  
 も九八郎だ、立派な男子でありながら、女房や子供迄もおいだ  
 し、飽造其奴の色香に溺れるとは意苦地なし奴、只今より改心  
 すればそれでよし、さもない時には存じよりのあるがどうだツ  
 と、確たどばかり睨みつけると、九八郎は一言半句の申し譯も  
 できず、青くなつてさし俯向いているにひきかへ、姦婦お高は  
 毒婦の根性を現はし高エ、ツ、私等夫婦の間の事を、どこの  
 坊主やら判らん者が、さし出がましい事をいつて貰いますまい  
 ハイ私は立派に九八郎の妻でござんす、憚りながら他人に一本  
 も指をさされる覺へはありませんと、憎々しきその言葉に、

日頃堪忍強き覺禪坊も、かつと怒りの顔色物凄く、覺ア、女子と小人とは養い難しとは汝の事だッ、イデ天誅を加へてくれん、覺悟しらう」といふ聲諸共さいへの如き拳骨固めて、ヤツとばかりに力に任せて、お高の横面殴りつけた、何條堪らんの別れ、眼珠とびだし、鼻口より血をはいて、その儘いきはたへはてる、馬場三郎兵衛はこの体眺めて、馬アハッハ、……、  
 覺禪坊の一撃にあつてしんでしまつた、イヤよいさみた、コリヤ九八郎、之でも改心いたさぬかッ、今度はおのれの番だアッ」と、拳骨へブウク、いきをふきかけてふり廻している、九八郎はいきたる心地もなく、ワナク震へておりましたが、九ハイ私が悪ふございしました、貴公方の御教訓によつて、初めて夢のさめ心地がいたしまする、誠に恐れいりました」と、平蛛蜘蛛の様になつて叩頭平身に及んでいる、そこで覺禪坊を表納屋にま

たしてあるお仙子をよびいれ、覺九八郎、この後は夫婦仲睦まじく暮すがよいアッ、汝の宅はこの界限では金満家の一人とよばれ、殊に身分は郷士でないか、満らぬ事に家名を傷つびてはとり返しがつかん、お仙其方も今迄通り貞女を盡すがよい……」と、懇々と意見に及ぶ、馬場三郎兵衛も傍よりいつてきかせますと、九八郎とお仙は兩葉傑をふし拜み、仙ハイ、色々御厄介を掛けまして恐れいります、良人の夢がさめましたら、これほぞ嬉しい事はございません……」と、後は涙に言葉もいでず、暫しは嬉泣にないておりまする、スルト馬場三郎兵衛は、馬アイヤ、めでたい、早くお高の死骸を片づけ、祝いの酒を催ふそうではないか、覺アハ、……、客の方から催促とは遠慮がなるすぎるではないか、馬ハ、……、おれは元來遠慮と坊主の頭とはゆつた事がないのだ……オッと失禮覺禪坊を前に控へて……、覺ハハ、……、失禮といふだけが可愛らしいわ

い、とに角今夜は厄介に相なるぞ」と、兩豪傑は九八郎お供  
 につれられて奥へ通り、直様酒肴をとり運び、家内残らす下女  
 から下男に到る迄よびだし、最も陽氣に祝いの酒宴を催ふして  
 いる、一方には主人の九八郎、早速お高の死骸をとり片づけさ  
 せ、役所へは病死の体にいひたて、その翌日心ばかりの野邊の  
 送りも營んでやりましたが、なんしろ亂世の時代でありますか  
 ら、こんな事は別に深くも詮義をいたさず、極めて容易な物で  
 あつたそうにございします、イヤこれは餘計のお話し、さても  
 兩豪傑はその夜は快よくのみ交し、種々の物語りをいたし、枕  
 を並べてうちふし、翌日も朝からのみすへ、幾等覺禪坊が立  
 しやうといつても、三郎兵衛は少とも動かさず馬エーイ、おい  
 く覺禪坊、折角豪傑同志がであつて、この儘別れるとは本意  
 ないでないか、せめて五六日は腰をすへて酒で勝負を決しやう  
 覺イヤ、おれも却々人にひけをとらないつもりだが、酒では

貴様に閉口だ、宛でのひのじやアないあびてる様なものだ馬  
 一、……、豪傑素より酒を好むといつて、豪傑に酒はつき物、  
 馬場三郎兵衛といふ酒のみの豪傑があるとはきいておつたが、  
 これほどのむとは思はなかつた、どうも酒では降参く……」  
 と、流石の寶藏院覺禪坊も、酒の呑みやいには三郎兵衛に一步  
 を譲つておりました、それもその筈でございませう、愛讀諸君  
 も兼て御存じの通り、今でも酒のみの話をすれば、馬場三郎兵  
 衛をひきあいにだす位い、後に到りますとこの馬場三郎兵衛は  
 酒のために大層なる出世をいたすのでございします、餘談に涉  
 る様でございしますが、序でございしますから、馬場三郎兵衛の  
 酒の出世といふ件りを一寸申しあげます、頃はいつなんぬり寛  
 永年間徳川家御盛の頃合、虎の門にお屋敷のあつた内藤紀伊守  
 といふお大名は、隅に屋敷があつたから、俗にこれを隅の内藤

様と申しました、御親類の藤堂大學頭といふ方は、東三十三ヶ  
 國の旗頭でありますが、非常なる強酒家であつたそうで、内藤  
 紀伊守のお妾は新川新堀から上つて居るので、そのお妾の里か  
 ら、始終交水なしの正宗がまいりますゆへ、藤堂大學頭が遊び  
 にこられると、いつもこの酒を馳走にだす、處が大學頭様はな  
 ゐの盃ではお氣にいらぬ、七合いりの武藏野といふ盃をお用  
 いになる、なせこれを武藏野といつたかと申しますと、武藏野  
 は餘り弘くつて、野がみつくとせぬ……のみつくとせぬといふ處よ  
 り、のみつくせぬといふ意をとつて、武藏野と銘をいれたのだ  
 そうにございます、この大盃でもつて六七杯はめし上る、然る  
 に茲に或日の事、例の如くあそびにおこしに相なりましたが、  
 その日はどうした事か、只一盃めし上つた後で、大ア、コッ  
 ヤ、ひやをくれろ」と、仰せいでになつた、然しいつも四  
 五杯はのまれるのであるから、冷酒の事であらうと、近侍の者

が合点をして、氣をきかしたつもりで、冷酒をさしあげた處が  
 大學頭様はうけるとるが早いか、グイと一口めし上つてみると、  
 こはいかに水と思つたのが酒であつたので大層なる御立腹、俄  
 かに聲荒らげて「大アイヤ、内藤の家來衆、予は只今ひやをく  
 れろと所望いたしましたるに、冷酒をのますとは、僅かの酒に大學  
 は性根を亂し、酒か水か判らぬものと思はれるか、この大學頭  
 高尚は、酒量は小なりと雖も、未だ性根は失い申さん、相手に  
 だつしやい、何杯でも頂戴いたそう」と、ソコ、管をよま  
 始めた、家來一統は大變迷惑をいたしましたといふのは、酒の  
 相手といつて、猪口の献酬で、五合や六合なら随分のむが、七  
 合いりの大盃で、やつたりとつたりでは、普通の酒のみではで  
 きません、いひだしたら却々き、いれない氣性であるから、内  
 藤の家來は直様目見へ以上の人を尋ねたが、誰も相手をする者  
 がない、内假令、いかなる身分いやしきものでも苦しふない、

後 寶 藏 院

早々とり調べに及べい』と、段々とり調べますと、廊仲間に三郎兵衛といふものが、朝から酒がなくつてはおられぬといふ事をさしたた、そこで番頭の小山田隼人といふ方が、馬小屋へやつてこられて 小「コリヤ、三郎兵衛はいるが三郎兵衛は……」

三「へい、何方です法被一枚でふるへているのです、さうぞおはいりなさい……」

小「ハ、ア、相變らすのんではいゝな 三「イヨ、これは、お番頭ですか、眞平御免下さいませ、へい例の通り酒をなめているので……」

ナ「アニのむなんで氣のさいた程はないのです 小「フム、其方は餘程のめるか 三「さうです、お耻しい次第でございますが、今迄腹一杯のんだ事があります、おから、どの位いと分量は申しかねます 小「ナニ、それは驚いなじやア七合入の大杯でやりとりができるか 三「ウフ、一升いりでも驚きませんが、先方に相手がありません、又第一その様にのむ錢がないですよ 小「處が三郎兵衛、けふは入費が掛らない

後 寶 藏 院

で、のむ相手もあるんだ、その方さへまいるといふば…… 三「エ、……、大云ひですけれども、一体どういふ事件なんです」

そこで小山田隼人が一伍一什を物語つて 小「色々、詮索をしてみると、その方なら相手ができであらうと、到頭札がおちたのだ 三「へい、それは御免を蒙りませう…… 小「なせ、よすんだ、今さら貴様がやめては困る 三「デモ旦那、相手は三十三ヶ國の旗頭たといふ顔で、苦しふないの頭をあげるのといはれては、のんだ酒もよいません、左様な小面倒な場所より、私共はやはり大胡座でもつて、大平樂をいつてる方が樂です…… 御免蒙ります 小「ケド貴様、今その方が出てくれないと、冷酒をだした家來は、切腹でもして申し開をせんければならぬのだ…… 三「エ、ツ、人間一人切腹といふ騒ぎならでかけます、然し餘り面倒だと途中でひっこみませ 小「ウム、いゝとも…… 三「夫では、一寸まつておくんなさい、新しい法被でもきて……

小「コリヤ、馬鹿な事をいつてはいけな、幾等略して  
も羽織袴でなければ失禮だ。三「ケド、左様な氣のきいた者が仲  
間風情にありませんよ。小「イヤ、おれの分をかしてやる。三「ダ  
ツテ、私がこんなに大きくつて、貴公は小兵だからにいます  
まい。小「然し、それ位は辛棒しろ。三「ヘエ、夫じやアまいり  
ませう」と、三郎兵衛は小山田隼人につれられて一旦小山田の  
屋敷へまいり、羽織袴を着用に及んで。三「ヘエ、でかけませう  
小「オ、よくにあふわい、めみへ以下とはみへん……、コリヤ  
胸にゴテ、をいれたて、手の平で鼻の先をコスツタリし  
てはみつともない。三「ハ、……、よく小言をいひますね、イヤ  
大「丈夫です」と、愈々仲間三郎兵衛事ここ本名は、武田家二  
十四將の随一、馬場美濃守信房の三男、馬場三郎兵衛信兼が、  
藤堂大學頭高尙公と酒問答に及びまする實に面白き一席は、一  
寸一いさいれまして、次席においてくはしく、うかいいついけ

第 七 席

いたします……。

さても仲間三郎兵衛は、番頭小山田隼人につれられて、御前へ  
罷りいでると、大學頭様はいつになく御泥酔で、醉眼をつり  
あげて、シロくねめ廻していられる、兩側に居列ぶ家來の面  
々は、相手があるかどうであらうと大變心配の處へ、小山田隼  
人は遙か下手へ平伏いたし。小「ハッ、當家物頭役三郎兵衛、お  
相手として罷りいでました、コレ、三郎兵衛頭をさげろ……  
三「ハ、ッ、これからだ……、面倒なのが……、小「コリヤ、駄つ  
ている……、三「ヘイ、……、三郎兵衛は頭ばかりビョコ  
くさげている容子を、大學頭御覽あつて。大「コリヤ、その方  
は何と申す者だ……、ナニ物頭三郎兵衛と申すかッ、苦しふない



面をあげい……前へ進め……」と、お聲が掛る小山田隼人は小  
 さい聲で 小三郎兵衛、中膝で首をさげながら前へ出て……、  
 三「いけないく、こゝへきてから左様なむりをいつては……  
 ダカラ前もつて断つてある、もふ歸りますよ小イヤ、然らばそ  
 の儘で進め 三「それこそむりだ、座つた儘で前へでられるもの  
 か 小「おれが、後からおしてやる…… 三「ハ、……宛で糸蒔  
 蕨か心太じやあるまいし…… 小「又、左様な馬鹿な事を申す……  
 ……」と、頻りに悶着が初つてゐるのを、大學頭は御覽遊ばし、  
 大「コレく、その方が色んな鹿瓜らしい事を申すと、酒の相  
 手にでた者は迷惑をする、其方は下れッ」と、小山田隼人はさ  
 げられた 三「イヤ、お番頭……お前さんが下つては心細い……  
 と、大聲あげてよびまするを 大「ハ、……さてはその方は輕  
 聲とみへるな、酒の興を助くるため結局面白い、氣樂に自由に  
 いたしてよいぞ 三「へイ、それはあり難ふ存じます、大將の方

が早判りして話せますね、眞平御免下さいませ、コレハく藤  
 堂様でございますか、初めてお目にブラ下ります、手前は三郎  
 兵衛と申す不束者、どうかこの後はお心安く願います……」と  
 平氣の平左で口喋りだした、イヤ大學頭様を始め夥多の家來は  
 驚くまい事か 甲「オヤ、これは大變な奴をひつ張りあてた  
 お腹だちの折柄だから、殊によるとお手うちでもなりはしま  
 か」と、手に汗握つて控へている、元來大名衆といふものは、  
 又別段なものであつて、返つて三郎兵衛の殺風景な處が、大層  
 御機嫌に叶つたとみへ 大「イヤ、面白い奴だ、其方は何か申  
 したな…… 三「これははいかん、大將よつていなさるね、名前  
 先刻いつたじやありませんか…… 三郎兵衛といふのです 大  
 ウム、そうであつたが、三郎兵衛とはよい名だ、姓は何と申す  
 か…… 三「脊は、六尺五寸七分で…… 大「コリヤく、苗字の  
 事だ 三「ハ、……、とんだ間違いた、何とかいふのでせうが、



院 藏 寶 の 後

「コサ……小山田さんすまねへですが、一寸疊んでおいて下さいませ、私のじやアないお前さんのをかりてきたんだ、イヤこれで少々は樂になつたが……また申し分があるわい……」大コリ「ヤ、何か申し分がある、自由にいたせ」三「じやア、御免を蒙りませう」と、尻をまくつて大胡座をかきますとこれを眺めた内藤「紀伊守様を始め家来一統は、甲イヤ、大變な奴もあつたものだ、餘りといへば無作法千萬、大學頭様も無禮をお咎めになるであらう」と、じつとみておりますと、大學頭はにこく「うち笑ひつゝ、大「イヤ、武者膝と申す奴が、苦しふない許す」はそうか、三「ヘイ、頂ませう、どうやら徹よになつてまいりました」と、又も一杯ひきさうける、スルト大學頭様はいみありげに大コ「レ三郎兵衛、予は汝に酒をさしたが、その方は何か予に肴をいたす考へはないか」三「ヘエ、何も肴といつて旨いも

院 藏 寶 の 後

のはありませんが……大「イヤ、ヤ、座中にちらした残肴はほしふない、予が望む者といふのは、その方の眉間の古傷、なんと者になりそうなものじや……」三「ナニ、眉間の古傷……ハ、……この場の話しは肴にもなにもなりません、私も子供の内から馬屋馬丁ではありませんが、かなりに暮したものです、七つ八つの悪戯盛り、碌々歩いてもしない癖に、大きな庭下駄をはきたがり、二足三足歩く拍子に、庭石に躓いてひつくり返ると石燈籠の臺石へボカリ頭をうつつけて、この様な痕を拵へ、三針とかぬつたそう……これも両親からさいたのですが、別段肴にはなりませんまい……」と、空嘯いて申しますと、大學頭は膝をのりだし聲荒らげ大「黙れ三郎兵衛、この大學頭は葉で束ねた人形と思ふかつ、身不肖ながら東三十三ヶ國の旗頭である予つ、石にてうち破つたる傷か……まつた太刀傷が、それ位のみわけのつかぬ予と思ふかつ、包まず物語れ」と、いただけ

院 藏 寶 の 後

高につめよせたり、此方三郎兵衛は今迄の無禮無作法にひきかへ三ツハ、ツと、横盤三疊ばかりとびたり、伊勢流の禮儀作法正しく、兩手を支へ頭をさげ、言葉を改め辨舌爽かに三ツハ、かく活眼をもつておみぬきに預かりし上は、何をか隠し申すべき、いと長き物語りには候へども、傷の因縁一通り、お聞とり下さるべし、拙者儀は馬場三郎兵衛信兼と申し、甲洲武田家二十四將の随一人、馬場美濃守信房の三男にこれあり、父にて候信房は、教來子民部と申しおたりたるを、晴信公の見出しに預り、天晴七萬石の大名と出世いたせしかども、圖らすも主君晴信公は野田せめの折柄、輕部太郎兵衛の鐵砲に掛りてはかなき御最後、父信房はこれを歎き、徳川家康こそ仇なり、主人の無念を晴さばやと、日夜肝膽を碎き、一子伊奈四郎勝頼の跡部長政の好物輩に感はされ、山岡、土屋、高阪、真田等の豪

院 藏 寶 の 後

傑に始め、及ばぬ迄も父信房等が諫めをきかず、終に織田徳川をひきうけて長篠の合戦となり、今は早やせひもなし、數代輝く武田菱のちぎれくになる迄も、飽迄戦い斃れて後やまんといはす語らず忠義の面々は決死の覺悟を極め、僅か甲洲勢の三萬五千は、織田徳川十餘萬の大軍に當り、何れも華々しく血戦なし、遂に武運拙なく、枕を並べて討死をとげ、その時父信房もとび來りし外玉に當つて無慘の最後、無念の聲は現世に残れど、歸らぬ黄泉へ旅立たれしと、添寝したる乳母の話は、今にも拙者の耳に残りおります、父の討死になしたる時は、拙者僅かに年二才、まだ東西さへ辨へず、亂母の懷中に介抱せられ、濃洲關ヶ原在へ委を隠し、甲洲浪人の名を憚り、人にも悟れずわれも得いはず、内々武をねり文を研き、父の仇なる織田徳川ヤツカその儘におくべきかと、密かに機會をまちたれど、力はたらずとて一人の工風にては、羽振輝く徳川に敵せん事思ひ

院 藏 寶 の 後

もよらす、一生埋まらんかと、天に怨み地にかこち、暫らく  
世間の容子を伺ふ内、まては海路の日和とやら、フト耳にいた  
したるは、石田治郎少輔三成が、關東徳川殿を敵となし、會津  
若松なる上杉家と氣脈を通じ、旗あげなすと承はり、ア、あり  
難し、忝なし、天より與ふる好機會、時は得難し、失し、イザ  
とばかりに、錦かいこみ、佐和山城に罷りこし、馬場の三男三郎  
兵衛信兼は、せまいつたりと申し、いれしに、治郎少輔三成殿も喜  
こばれ、直様一方の旗頭、三百餘人を支配する役目となり、天  
運茲に開けたりと、喜こぶか、いも情けなや、金吾中納言の裏切  
にて、大敗北の耻辱をうけ、三成は捕はれ、大名は討死なし、江  
最、早味方は散々、亂々、中にも拙者は何なく、戰場を通れいで、江  
洲、長濱に許住居して浪人中の生活にと、劍術指南の札をか、げ  
再び、時きたるをまつ中、時しも慶長十八年十月の事にて候、  
右大臣秀頼公、關東と御仲不和となり、大阪城に天下の豪傑勇

院 藏 寶 の 後

士を招くよし、浪人にして荷も一流一派の武藝に達しているもの  
は、高祿にめし抱へんどの高札を、諸方の辻へはりだしたれば  
この度こそは時運きたれり、軍師は眞田左衛門とて、人にしら  
れし幸村なり、こもる處の同勢は、豊臣恩願譜代の大名、これ  
を逸してなるものかと、道場しまつて大阪城へのりこみしは、  
頃も十月小春の中旬、送り花さく埋木の、幸先よしと入城なさ  
ば、又も五百人の頭となり、難攻不落といはれし城に籠れてや  
まん決心の、豊臣勢の籠れるものから、關東徳川の大軍は、獅  
子奮進にせむると雖ども、眞田の智謀、後藤の計略、薄田、木  
村、堀の剛勇に、よく守りよく防げども、如何せん外に援兵な  
く、内は兵糧の缺乏をつけ、遂に元和元年五月七日をもつて、  
總討死とは議を決し、同じしなんづ命かなれば、人より先にせ  
んもの、手の者五百をひき纏め、城門をおし開き、面もふら  
す突進なせば、白地に黒く、葛の紋染めだしたる旗幾流れ、これ

院 藏 寶 の 後

そ 關東名題の旗頭、藤堂勢と覺へたり、しすともかなり進めや  
と、聲を揃へてのりこめば、ソレ夜討よ……うちいりよ、城の中  
よりうつついでたる兵ありと、騒ぎたつたるその中を、何の遠  
慮もあらばこそ、瘦浪人見せん、鎧を捨てつ、掛る者こそ  
のその内より、瘦浪人見せん、鎧を捨てつ、掛る者こそ  
あれ、心得たりと飛びしきり、互いに鎧をつき合し、上段下段  
と争ふ内、ふるやふらすみ五月雨の、はれを綾なす月毛の駿馬  
紫絨の鎧を着なし、兜の中より翠も滴る前髪をふり亂し、新七  
その敵返せよと、薙刀ふつて出たる者あり、ヤア物々しや今夜  
一の戦い誰かれの用赦はあらじと、その若武者につ、掛り、一上  
くんで勝負を決せんすと、得物なげすて、エイヤムンツとヒツ  
くみしが、組打の習いとて兩馬の間にドツとおつ、あはやと思  
ふ間もあらばこそ、武運拙きこの三郎兵衛は、かの若武者にく

院 藏 寶 の 後

みしかれ、はね返さんにも事敵はず、遺恨この上なく、ア、源  
三位頼政より二十四代と傳はりし名家もこゝにたへなんか……  
なに開々とうたるべき、巴れツ小冠者推参なりと、くんづ轉ん  
づいごみ争い、何なく若武者を下にくみふせ、首かきさらんと  
鎧通しを捜る折柄、思はずやられし眉間の太刀傷、アツと驚く  
その後、いかになりけん夢幻、遙か彼方に夥しき軍馬のいり  
亂れての大合戦を、心にかけた件、若武者は、拙者をすて、た  
ちさりたれば、危き命を助かりて、心なくもけふ迄いき永ら  
へ、玉となつて砕けずいたして、死と等しく存命いたしおしま  
する、お尋ねの眉間の傷の因縁由来、かくの通りでございま  
る、と、人を恐れぬ不敵の辨舌、滔々として立板に水を流した  
如くでございます、居列ぶ面々は、アツと驚き、片づをのん  
でおる折しも、その夜汝の扮装は、黒糸絨の鎧にて、兜はさせず大  
き物語り、その夜汝の扮装は、黒糸絨の鎧にて、兜はさせず大

院 藏 寶 の 後

亂髪……三テモよく御存じ、白綾疊んで鉢巻なし、鹿毛の駒  
 に塗鞍おいて……大ウム、新七の敵渡せと、きつていであ  
 る若武者こそ、かく申す大學が十九才の初陣であつたわやい……  
 ……三ハ、ツ、大義親を  
 オ、相手の豪傑は其方であつたか……三ハ、ツ、大義親を  
 滅すとやら、戦に臨んで何予兄弟を論せんや、無禮は平に御容  
 赦……大イヤ、敵ながら天晴剛のもの、今に感服い  
 たしている、目下天下は定まり、そちも縁あつて内藤家に仕へ  
 しからは、この後忠勤を勵んでよからう、三ハツ、あり難き御  
 意にございます……と、當時の事を思い出し、流石の豪傑  
 馬場三郎兵衛も、ハラ、と落涙に及んでいる。この時大學殿  
 は内藤伊豆守に向はれ、大イヤ内藤殿、貴殿はよい家來をもつ  
 てお仕合せ、大學羨しふ存する、シテその者は何百石下しおか  
 る、や……と、お尋ねになつた、最初物頭といつてだしたの

院 藏 寶 の 後

だから、今更仲間だともいへられない、内藤家の重役共は互いに  
 顔見合してたりましたが、重ハツ、畏れながら三百石遣はしお  
 ります……大ナニ、三百石は安い、千石迄の價値はあ  
 らう、腐つても鯛じや、おつて加増を申しつけられい……  
 據ないから内藤紀伊守は、内イヤ、承知いたしてござる」と、  
 茲で大學頭様も大層御機嫌よく御歸館に相なりましたが、三郎  
 兵衛は直ちに五百石の祿を賜はり、内藤家臣下の列に加へられ  
 麻仲間より一足とびに五百石とりの武士と出世いたしました  
 は、誠にこの上もないめでたい事で、馬場家の血統は遂に内藤  
 家に遺つたところでございます、これ全たく三郎兵衛借兼が豪  
 勇故群のいたす處とはいへ、その氣象淡泊にいたして、よく艱  
 難に堪へ、苦節を守つたからであり、馬場三郎兵衛にひきとめられ  
 る物語り、さても寶藏院覺禪坊は、馬場三郎兵衛にひきとめられ  
 る儘、五六日由比九八郎の宅に逗留いたし、毎日酒浸りに

なつておりましたが、いつ迄厄介になるも氣の毒と覺、オイ馬場、もふおれは出立するよ馬ウム、貴様がすればたれも立たふ、シテ之からどこへゆく覺おれは、關東の方へ……馬フム、關東では道伴にならん、おれはどこかへいつて、暫らく世渡りに武術の指南でもやつている内、又面白い事があるであらうと思ふ、せひ父の仇、徳川家を覗ふの考へた覺ハツハ、……

戦場、で敵味方となるは戦國の常だ、それを一々仇呼はりをしては際限がない、もふいゝ加減でよせ、戦は強い者がかつに極つてゐる馬イ、ヤ、よさない、おれは飽迄も徳川を怨むのだ、と、夫より兩豪傑は、由比九郎夫婦の者より、少ながらす、錢別を貰つて、遂に九八郎、お仙に別れをつけ、由比ヶ濱を出立に及びました、馬場三郎兵衛信兼は段々と東海道を上方筋へ下つてまいり、寶藏院覺禪坊が箱根山において大鷲退治の顛末は次といふ、圓らすも覺禪坊が箱根山において

第 八 席

席に譲つて伺い續けまする……。

然るに豪傑寶藏院覺禪坊は、由比ヶ濱邊を後にいたし段々と道を急いで富士川も何なくわたり、原驛沼津の城下もすぎ今しも三島の町へさしかかり覺サア之から箱根山だ、一つどこかで休んでのぼろう……」とドス、と麓の茶店に出てまいり覺、オイ婆さん茶を一杯くれんか、婆、ハイ、御出家様お登りでございますか、サアどうぞ……」と婆は直様茶をくんでだす、覺禪坊はそれをのみながら彼方此方を見まわしておりますと、折柄茶店の奥よりたちいでたる一人の婦女、年頃二十二三才で、もございませうか眼をなきはらして何か愛いに沈んでおる様子、後より出てきた老爺は、件の婦女に向つて爺、コレお初もふな



院 藏 寶 の 後

いてくれるな、幾等手前がクヨクヨ思つた處が一旦さらはれた  
 吉松は、再び戻つてくる氣遣はない乃公かて孫だから可哀想だ  
 とは思つてゐるが、これも前生の因縁約束事さあきらめるより  
 外仕方がないわい、余り心配して自分が煩つてはいけなないぞッ  
 初アイ阿父さん妾しは何う考へ直しても、吉松はいきており  
 はすまいかと思ひます、阿母さんは大驚につかまれたといはん  
 すが、それもみた譯ではなしせめて空骸でも捜したして、立派  
 に葬式をだしてやりたふござんす、スルト婆も目を屢叩き 婆  
 オ、尤もじやがお初母は屹度大驚がさらつていつたものどしか  
 思はれん、今まで近處の手供衆がなくなるのは皆な大驚の所業  
 だよ、居なくなつた日を命日に弔いをするがよい……」と、親  
 子三人はシクシクどないてゐる、覺禪坊はこれをきいて不審に  
 思ひ 覺「コレくお前方は小供が紛失したといつてないでいる  
 様だが、一体どうしたのだ 婆「ハイ御出家様アおさゝ下さい

院 藏 寶 の 後

ませ、これは妾の娘お初と申しましてこの三島の驛の仁平とい  
 ふ者に嫁入つております、その仁平とお初の間でできた吉松と  
 いふ、今年漸々四ツになつた小供がございまして、色々人手を頼んで  
 の五日ほど後から不意になくなりまして、色々人手を頼んで  
 八方を捜しましたが、皆目行衛が判りませんので……多分この  
 箱根の裏山蛇腹峠にすんでゐる大驚がさらつていつたものと、  
 斯様に妾は思つております今さら何と歎いてもどりかへしはつ  
 きません、誠に残念な事をいたしました」と、話をきいた  
 覺禪坊は 覺「フムそれは氣の毒な事じや然し驚の所業と判つた  
 ら退治してしまつては何うだ 爺「イエ御出家その驚が却々容易な  
 らん奴で、これまで色々工風をしてみましたが、退治する處の  
 騒ぎじやアございませせん、弓や鐵砲に妙を尽たお武家様や獵師  
 が度々のりこまれますが、皆な大驚のために生命をとられるか  
 怪我をするか、少しも退治する事ができませんので…… 覺「フ、

院 藏 寶 の 後

ム、何うも話をきくと愈々けしからん事だ、飛道具でやつつけ  
 る事ができないとは何うしたものであろう…… 爺へエその大  
 驚は却々賢い奴で、弓も鐵砲も届かん高い處にすをくつて、  
 人がいつたら姿をかくしてしまい、不意に思ひもよらん横合や  
 背後からとびかゝつて、引つ掴みますそうて今までこの手でや  
 られたものばかりでございます 覺成程鳥類でも考へていると  
 みへる、然し万物の靈長といはれた人間で退治る事のできんと  
 いふ筈はない、亭主心配するなおれがのりこんで退治てやろう  
 爺「エ……御出家がおのりこみなさいますと……、それはお  
 よしなさいませ逆も駄目でございます 覺イヤだめでも構はん  
 おれは左様いふ事をきくとすておけん性分だ、氣の毒だが大き  
 な握飯三ツと小犬が一匹いるまいか…… 爺へエ……犬をどう  
 なさいます 覺犬を鷲の飼食にして誘きだすのだ 爺へーン妙  
 な事を思いつきなさい……イエ宜しふございます、折角そう仰

院 藏 寶 の 後

しやるものをおどめ申した處がたきいれはございますまい、  
 犬はその邊に野犬が澤山おりますから一匹捕へてまいります  
 婆さん握飯をはやくこさへてあげな 婆「アイ合点でございます  
 と、そこでお初と婆は急いで飯をたき握飯を三ツ四ツこしらへ  
 る、その間に爺は何處かへ出ていつたが、懸て大きな犬を一匹  
 ひつはつて戻り 爺「御出家この犬は三島の町で一番強い奴です  
 何うかおつれなさいませ 爺「ウム結構く夫ではボツく出か  
 けやう、コレお初とやら時によると吉松とかいふ梓も無事でい  
 ないども限らん、マア的にせずとまつてたれ 初「ハイ何うぞ宜  
 しふお頼み申します 覺「オ、合点だ」と、薬僧覺禪坊は右の手  
 に例の槍を杖つき左りに犬をひきつれ、腰に握り飯の風呂敷を  
 プラさげノソリく箱根山の裏山さしてのぼつてまいります  
 る、この頃合はまだ關所はございませんから役人に咎められる  
 心配は少しもないが、山路のけんそなる事は到底話しになりま

せん、なれども蒙氣の覺禪坊は左様な事には頓着せず、段々分けのぼつて裏山へ出てまいり木の根岩角をふみこへく、漸々蛇腹峠の絶頂へきたり覺禪坊のすのあたる木だ、ヨシ一休みいたそうに大木がみゆるのが鷲の元ある木だ、ヨシ一休みいたそうと犬を五六間彼方なる松の根元にく、りおき、握り飯を一つとりだしてくはせ覺禪坊コリヤ黒よ今に鷲が貴様を目かけてとんでくるから、決してクワンく、ほへるでない予乃公は樹蔭にかくれてまつているのだ」と、その儘樹蔭に身をしのばせ自分も握飯をムシヤく、とやつていりおき、何處からともなくとびきたつた見ると恐ろしき一羽の大鷲、五六間向の犬をのぞんでサアとまいおりたこれを見たる覺禪坊は、突つたち上つて雀躍りなし覺禪坊オ、まつていたのだ御參なれツ只一つきツ」と叫びながら矢庭に槍をおつとつて、バラリとそれへこんで出た然るに件の大鷲はそしらのふりしているのみか、ソロく、手斧の様に

な嘴を犬の脊中へつしたてんとする覺禪坊、イこん畜生ツ」と覺禪坊は隆々と槍を扱く間も遅し、ヤツと大喝諸共に大鷲目がけて突つ掛つた、相手もさるものバタくと飛び廻つて今度は覺禪坊に掴み掛らんとする、その眼の鋭き事は大抵の人なら一目みて震へ上つて終ふ處であります、覺禪坊は怯ともせず、覺禪坊ア不敵な大鷲奴ツサアこい」と、なんしろ頭の上一二間の處をさびまわつていりるのでありますから、槍どりのばしてエイヤツとついて掛る、鷲も大いに怒りを現はし羽たたく音も物凄く、彼方此方に躲しなから隙をねらつて坊主頭をつかまんの權幕なり覺禪坊も人間を相手にするの違つて却々骨がおれる今しも武術の極意をもつて、ヤツとばかりに宙に向つてさび上りエイツと一つき力に任せてつくはつたが、彼奴もさるもの鎗はそれだけかじひろげた片翼に突つこんだ覺禪坊、イ仕損じたか残念だツ」と、無二無三に鎗を閃かしてつきあける、元來

上と下との争いだからいつも仰向いていなければならぬので甚だ働き悪い、殊に自分の身体もふせぎ相手をしとめる大役をもつている。覺禪坊は、もふ鎗術も絲爪もあつたもんじやアない、エイオーと喚き叫んでとび上り躍り上り必死になつてつきまくつて、途端に、何うした機會が鎗をガラリと取り落した。覺禪坊、しまつたッ」と、身を屈めて手早く拾いとらんとする一刹那、この時遅しかの時早し件の大鷲はゑたりといはぬばかりにサツと飛び掛つたと思つたら、覺禪坊の帶際を鋭き爪でムツとつかみ一方の足で襟頭をさらへ、バタ／＼とまい上らんとするイヤ之には一番驚いた豪僧覺禪坊も覺ヤ、ッこは大變だ、恐ろしい力もあつたものだッ」と、そこは禪學の奥義を極め武術の腕前優れし覺禪坊だ、慌てず騒がす氣をおらつけ地上より離れて二三間ひきあげられたかと思ふ處で、猿臂をのばして大鷲の兩足をムツと掴み滿身の力を振りおこして、こゝそ一生懸命と

襟と帯との足をム、……とひきねじると、流石の鷲も覺禪坊の怪力に驚いたるにや、バラリ引つはなしてにげんとする拍子に覺禪坊は宙ぶらりと相成つて、鷲の兩足へとりすがつてゐるッ」と、ウン／＼力味んでゐる鷲も犬や小牛位なら空天遙かにつかみ上るはいと安い事でありすが、人並より大きな人間一匹殊に相手が大力無双とさきてゐるから、大きな翼をバタ／＼と羽叩きするばかりで、容易にとぶ事はできない覺禪坊はそれに反して、地上へひき下そうと兩足をつかんでブラ下りウン／＼力に任せて引きしやくつてゐるといふ有様、こふなつては幾等剛惡な鷲も堪らないッリ／＼と次第／＼に下へ／＼と下つてくる、覺禪坊は大いに勢をえて覺ウム旨い／＼地邊にをりたら此方のものだ、今にみろウ」と益々烈しくグイ／＼としやくつている、今一間ばかりで地上へ届こうといふその折柄、俄かに

院 藏 寶 の 後

驚は可笑な鳴聲をしなかと思つたら、尖りたつたる嘴をカツと  
 開き覺禪坊の坊主頭を望んで咄嗟かみつかんとする、その權幕  
 の凄まじい事は到底言語にのべ難く、流石の覺禪坊も思はず悸  
 ぞいたし、首を縮めて身震いなし、覺禪坊主頭をやられては  
 逆もだめだ、そうかといつて片手を放しても足でつかまれる、  
 こりや何うしたらよかろう丸つきり放せばにげてしまつて、今  
 までの辛苦も水の泡だ」と無茶苦茶に身体をもがき坊主頭を右  
 左りにふり廻し、鋭き嘴をさげんとしたかなんしろ驚も一生懸  
 命だから、或は翼で覺禪坊の身体を叩く嘴を開いてかみ砕こう  
 とする、上と下とでもかき合の根比べでございます、もふ仕  
 方がないと覺禪坊はあらん限りの怪力をしほりだして、驚の兩  
 足を左りの手に二つながらひん振り右の手でかみつかんとする  
 驚の咽喉をグツとつかみ、グイ／＼としめつけるこれには驚も  
 弱つたとみへ働の自由を失つて、何なく地上に足が届いた、驚

院 藏 寶 の 後

オ、これで大丈夫だ」と、気がゆるむ途端に驚はパツとより  
 放して空中遙かにとび上つた、覺アツしまつた、これ程に苦心  
 をしてとりにがすとは残念だオ、何うしてくれん」と、鎗を拾  
 つて突つたち地圓駄ふんで空を睨んでたります、驚も何條こ  
 の儘に逃げさるべき暫らく空中にあつてとびまはり、元氣を發  
 つておりましたが應て再びまひおりさま、唯一つかみと覺禪坊  
 の首をのそんでとびついた、パツと躰をかわした覺禪坊は鎗を  
 構へて呼吸をもつがせず突つかしり、カツと開いた口中目がけ  
 てヤツと一聲拳も通れどつゝ、こんだ、急處をやられて何條堪ら  
 ん流石の大驚も苦しもうな悲鳴をあげて、パツと地上におち  
 てくるシテやつたりと覺禪坊は、鎗をひき扱くと同時に處嫌は  
 す力に任せてなぐりすへ、大分弱つた處を今度は眼中へブスツ  
 と貫き、漸々その場へつきふせた驚は兩の翼をパタク／＼といは  
 し足を突はり、暫しは悶へ苦しんでいましたでしたが到頭いきたへて

院 藏 寶 の 後

動かなくなつてしまつた。これを見澄したる覺禪坊もはりつめし氣がゆるんだとみへ、どつかと尻餅ついてフウクといつてゐる、折柄何處ともなくからくど笑ふ聲がきこへますから、氣をとり直した覺禪坊は覺ハテナ今のは確かに人間の笑い聲何者なるぞツ」と、さつと背後をふりむれば七八間向ふの岩の上、年頃七十ばかりの老人が手に一挺の弓矢を携へ、傍へ一人の小兒をつれて覺禪坊の姿を眺めてニコニコと笑つておりましたから覺アイヤ愚僧の態を仕とめしを笑はれし御身は一体何人であるや、我れは南都の寶藏院覺禪坊である」とまいた老人は小兒を抱へてヒラリ岩上よりとびおり、ツカくと覺禪坊の側に進み老きては貴僧が寶藏院流の鎗の名人覺禪坊胤榮殿かツ、某は何を隠そう今川浪人松倉鬼夜丸の身の果だ、主家滅亡のその後は二君に仕へる心底なく、この箱根の裏山に閑居なし風月を友として世を送つているのである」と、さいいた覺禪坊

院 藏 寶 の 後

はうち驚き覺アム兼て噂にきいてをる今川の豪傑松倉鬼夜丸でござつたか、シテそれなる松倉殿が何をもちてお笑いめされた松ハツハ……また御身は若い、幸いに荒鷲を退治たからよい様なもの、翼ある鳥類を退治るに鎗をもつてするとは了簡遠い、全体鳥といふものは飛道具でなくばうてないものと極つてある、殊に先刻よりみうけるに御身の鎗術もまた神にいらるといふ程には手にいつていらん様子、今暫らく修業が肝心である」と、いはれて血氣盛んの覺禪坊は赫つと癢きこみ覺アニ某の鎗術に難辨をつけるとは聞きすてならん、然らばこの處において一試合仕らう松「いかにもお相手申そう、サア用意さつしやい覺心得たり……」と、覺禪坊は法衣の袖をまくりあげ坊主頭にキリ、と鉢巻しめこみ覺アサア相手になり申そう御免……」と、いふが早いか隆々といひつ扱き勢い鋭く鐵壁も碎けよと突つかゝる、松倉鬼夜丸は年こそとつたれ今川家名題

院 藏 寶 の 後

の 鎧 の 名人、ヒラリく、とつきくる鎧先をかわして、  
へたるが、今しもエイツと一聲かけると等しく鎧の千段巻のあ  
たりを、もつたる弓で發止とうつ思はずガラリと槍とり落した  
覺禪坊は、バツと背後へどび退り覺ハ、ッ恐れいつたお手の  
内、迎も我れ等如きの及ぶ處でござらん」と、手を支へて平伏す  
る松倉鬼夜丸はニツコとうち笑つて松イヤ、さにあらず  
御身の鎧術は天下無双、なれどまた年の若いだけ血氣にはやる  
處あり、幾等槍術が名人でも太刀うち業を手にいれざれば、  
その極意を極め難し目下上州箕輪に上野伊勢守秀綱先生あり、  
神陰流の大名人として日本一といはれてござる、それゆへ天下  
の豪傑勇士はその門に集るもの數しれず、門前常に市をなすの  
光景御身も暫時それへ入門せられ、劍法を極められるが宜しか  
らう然らば鳥に翼を與へたる如く、車の兩輪鬼に金棒とはこの  
事だと懸々と説きつける、覺禪坊は大いに喜悅んで覺ハイ

院 藏 寶 の 後

誠、に御教訓忝ない仰せに従い一應江戸表へ参り、夫より上州へ  
罷りこすでござる、松イヤこの少年は先達山中において、之なる荒鷲  
でござるか、松イヤこの少年は先達山中において、之なる荒鷲  
のためにかつさらへられ既に一命危き處を、拙者が驚をおい  
らし助け歸つて只今まで手許に育ているのであるが、何でも三  
島の者にいたして吉松といふだけには判れども、獨りでかへす譯  
にもゆかずシャといつて世をのがれた某がつれゆくも甚だ迷惑  
に存じ、誰か獵師でもくれれば頼まんど日々このあたりには  
づれど、大鷲のために恐れをなし獵師は恐か犬の子一匹も参ら  
んとといふ始末、貴殿に對面せしを幸い御依頼申さんと心得て  
た處でござる覺、フム左様でござるかそれは丁度よい都合、實  
は拙僧が大鷲退治にのりこんだも夫なる吉松の親に聞きこみ、  
それがために罷りこしたる次第御深切の段兩親共になり代つて  
某より御禮申しおく松ナニ、禮には及ばぬ拙者も以前より

此なる荒鷲を退治くれんと存じてはいたなれど、結局鷲がいるために俗人共がよふ参らす我が閑居には屈強の場處と、斯様に思つて今まで見のがしていた様な譯でござる、ハッハッ……、  
 覺成程世すて人の身には然か思はるゝも道理千万なれども一  
 理一害は免れ難し、御身には便利な世に害をなす上からは  
 退治ねばなりませんまい、松如何にも左様敢てその事を苦情申す  
 のではない、兎に角その少年を呉々もお頼み申す、覺イヤ宜し  
 い御安心あれ……、松それではもやお別れ申す、松倉鬼  
 夜丸は悠々として奥山深くたちさります、後見送つた覺禪  
 坊は覺フム色んな處で妙な人間にであふものだ、剛らすも一  
 つの教訓をえてこれほど嬉しい事はない」と、暫らくは茫然と  
 たちすくんでおりましたか、吉叔父ちやんもふ歸ろう……、と  
 吉松のいふ聲に不圖氣つき、覺オ、吉松かつ、よく無事でいた  
 阿母さんは大變心配してゐるぞ、歸ろう……、と、云ひつ

第 九 席

退治に鷲の両翼をひろげてみると、端からはしまで一丈五六  
 尺もあるうといふ大鷲だ、覺フ、ム恐ろしい大きな鷲だ、道理  
 でおれをつかみあげた筈だ」と、流石の覺禪坊も身震いなして  
 驚いているそこで鎗の先へ件の鷲をひき縛り、それを擔いで吉  
 松を脊中へくくりつけ黒犬をつれて段々と元さし路を麓へ降り  
 漸々日のくれ近くに、三島の驛へかへつて参りまするといふ、  
 之より覺禪坊が江戸表へのりこみ、一つの騒動をひきおこしま  
 するお物語りソハ次席に申しあげます……。

さる程に豪僧寶殿院覺禪坊は、首尾よく大鷲をしとめ、吉松も  
 よじに手にいれて、ドス〜三島の驛へ戻つてまいり、件の茶  
 店へ歸つてくると、爺い、婆ア、まつたお仙夫婦は、急いでと



院 藏 寶 の 後

びだし、吉松の姿をみるや、夢かよばかりうち喜こび仙オ、  
吉松、よふアおじていてくれた」と、しんだ者が蘇生つた様  
に騒きたち、交るく、覺禪坊に向つて禮をのべ、一伍一什をさ  
いて愈々驚き、件の大驚をみて何れも覺禪坊の武勇に感じてお  
りまする、そこで直様この事を町内へふれ廻り、その夜は盛大  
なる酒宴を催して、町内一統の者より覺禪坊を深く慶應し、非  
常に喜こび勇んでいる、さてもその翌日と相なりますと、件の  
大驚は茶店の爺に與へ、覺禪坊は一同の者に別れをつけ、再び  
箱根山をドスく登り、八里の山道も何なくこへ、小田原、  
大磯、平塚、藤澤、戸塚、程ヶ谷、加奈川、川崎、品川と、泊  
りを重ね、江戸の土地へ、道中變つたお話もなく、漸々武藏國豊島  
郡花のお江戸の土地へのりこんでまいりました、今しも覺禪坊  
はブラリくと例の館をつき鳴しながら、日本橋へさし掛つて  
まいりますと、向ふより身のたけ抜群の若武士兩人、何れも武

院 藏 寶 の 後

術修業者とみへて、黒紋服には深緑とつたる野袴をはき、肩を  
振つて大道狭しとやつてくる、覺禪坊はこれをみるより、覺  
、ア、流石は豊臣家をおしとめ、天下を握らうといふ、徳川家  
の膝許ほどあつて、修業者も澤山きているとみへる、マアく  
よけて通るに限る」と、橋の片脇によつて身を躲している、  
件の兩人はシロく、覺禪坊の風体を眺め、態と聞へよかしに  
甲「オイどうだい、物騒な坊主もあるものじやないか、館をさ  
げているよ」乙「ハッハ、……、みれば月形十字の管筋らしいが  
きけば南都に寶藏院流管筋の名人、寶藏院覺禪坊胤榮といふ坊  
主があるそうだが、或は其奴の弟子坊主かもしれない、甲「フム成程  
存外年の若い處をみると、真逆一流をあみだしたる覺禪坊であ  
るまい、とに角可笑な坊主だねい」と、呵々とあざ笑つてゆき  
すぎ、やうといたしますから、覺禪坊はグツと癪に障り、ヅカ  
くと橋の中央へ進みいで、覺「アイヤ、それなる兩人、愚僧が

この鎧をもつてゐるを、あざ笑ふとは何たる事だ、禮義作法を  
 辨へたるをこれを眞の武士といふ、汝等如きはみかけ倒しの犬  
 武士であらう、アハッハ、……」と、阿々々笑ひ返せば、件の  
 兩人はきつと後より返り、甲「なんだ此奴、いふ事に事かいて、  
 犬武士とは不埒千萬、今一逼いつてみよその分にはすておかぬ  
 ぞッ 覺ハ、……、怒る處がおかしいわい、われを誰とか思ふ  
 ぞッ、南都において寶藏院月形十字管鎧の開祖、寶藏院覺禪坊  
 とはわが事なり、とや角申すと鎧玉にあげるぞッ」と、大喝一  
 聲となりつける、スルト件の兩人はヅカ〜と進みより、乙「ヤ  
 イ坊主、いゝ加減の事を申すと承知せぬぞッ、みた事はないが  
 寶藏院覺禪坊は汝の如き年若い坊主とは違ふわい、假にも一流  
 一派をあみだす人物、もふ彼これ年頃と存じてゐる、弟子坊主  
 の分際で師匠の名前を騙る不所存者めッ、今日の處は許し遣は  
 す、キリ〜たちされッ、われは天下の豪傑、磁端半藏秀國だぞ

フ 甲「おれは、武内加賀之介である、まごつくに於ては、川中  
 へほりこむがどうだッ」と、右左りよりつめよせる、覺禪坊は  
 これをきいて益々うち笑い、覺アハ、……、汝等こそ他人の名  
 前を偽る不埒者、天下の豪傑、磁端半藏や武内加賀之介が、途ゆ  
 く者を捕へて嘲弄する筈がない、とや角申すとひきむいてやる  
 から、左様心得るッ」と、いふが早いか鎧とり直して鞘を拂い  
 仁王だちにと相なつた、この時武内加賀之介は、じつと覺禪坊  
 の舉動に目をつけておりましたが、なに思ひけん顔を和げ、武  
 イヤ御坊、御身は眞寶藏院覺禪坊殿かッ 覺いかにもそうだ  
 天下に二人の寶藏院覺禪坊はない筈、それがどうした、スル  
 ト加賀之介は、磁端半藏に向つて、武内加賀之介、どうも本物ら  
 しいぞ、あの鎧を搦へたる舉動、鞘の毛でついた隙もない、貴  
 様はどう思ふ……、半ッム、おれも少々疑つてゐるのだ、ア  
 ヤ御坊……、愈々御身が寶藏院流の開祖覺禪坊胤榮ならば、我々

院 藏 寶 の 後

兩人に翁の秘術をみせて頂きたい、餘り年が若いからなつたばかりでは安心ができない」と、二人は半信半疑でいる、此方覺禪坊は首をふり、覺イヤ、いかない、御身等兩人が果して天下高名なる磁端半藏、武内加賀之介ならばみせもいたそうが、愚僧の目からみると疑はしい、磁端武内ともあらうものなら、かゝる禮義を辨へぬ事はしない筈だ、贗者に違いあるまいどうだ」と、兩方が贗者、といひだした、いつ迄たつても果しがありませんから、武内加賀之介は思案をいたし、武イヤまたれい御坊、双方が贗者呼はりをして疑つておつては水掛論だ、夫ではこよいいたそう、拙者兩人も腕前をみせるから、御身もみせて頂きたい、それで得心がいつたらよからう、覺ウム面白、どういふ風にして腕前をみせてつもりだ、この處で試合に及ぼうか、武イヤ、これはいけい、斯様な大道の中央で試合をいたしては通行人が迷惑、どこかよい場所へまいつて、夫

院 藏 寶 の 後

々極意を現はす事にいたそう、覺ウム、それよからう、ナア贗物、こい……、半オイ、武内、こんな贗坊主、係りあつていた處が仕方がない、ゆこう、武イヤ、さて磁端、万一寶藏院覺禪坊であつたら、後日に到つて我々が面目を失ふ譯だ、別にせく用もない身体だ、天下の豪傑と腕前を比べるのが我々の目的ではないか」と、いはれて磁端半藏もうち點頭き、半成程、貴様の様にいへばその通りだ、トシおれが今に贗坊主を驚かし、てやらう」と、三人はドス、と日本橋を渡つて、どこがい、場所はないかとつれたつてゆく、全体この磁端半藏秀國と申し、まするは、上泉伊勢守秀綱先生の片腕といはれた奇代の武術家で、太刀をとつては當時東國の麒麟とよばれたる、塚原小太郎勝義と互角の腕前をとらうといふ天晴れ豪傑でございします、まつた武内加賀之介は作洲津山の産にいたして、津山の領分下に波賀村といふ處があつて、こゝに小具足十手の達人と雷名を

天下に轟きたる武内中務大輔久盛といふ人がありました、常に阿太古明神を信仰しておりましたが、頃は天文の元年六月廿四日に、一人の修験者がまいり、捕縛の術五手といふものを譲りました、これは阿太古明神の傳授であるといふので、愈々信心怠りなく、夫より武内流といふ一派をのみだしました程の人物その子がこの加賀之介久吉であつて、實父久盛より腕前が勝れていると、世間ではいはれて位の家傑でございませうが、この時代はまだ磯端が三十七八才、武内が三十五六才の分別盛りで血氣盛な年輩でございませうから、却々後へはひかない、おまけに寶藏院覺禪坊は當年とつて二十五才、厩坊主といはれたのに腹をたて、一步も譲りません處より、到頭斯様な衝突が起つたのでございませうするケレドモ何れも天下名題の人物だけあつて無闇にきりあふ様な無茶な事はしない、今しも三人は相談してズン／＼向ふへいつている、丁度日本橋より四五丁南へきたつ

て、中橋といふ處へさし掛つてくると、行手に當つて群衆が黒山の如くたち塞がり、ワア／＼と騒いでいる、半イヨ、なんだらうこれは……武サア、喧嘩でもやつているのではないか……」と、三人は群衆をおしわけて、内部を覗いてみると、六人の立派な武士が酒氣に乗じて一人の商人らしき若者をひきすへ、ぶつたりけつたり、惨散な目に遭はせている、若者はヒイ／＼と悲鳴をあげて、半死半生の体でおります、これを眺めた武内加賀之介は、何か胸中にうち點頭き武ウム言ひ、オイ厩覺禪坊も磯端もこれへこい、腕前比べをするに屈強な事があるぞッ 覺ナニ、屈強などはどうするのだ厩武内……武イヤ、他ではない、あの町人が不憫だから、我々三人が六人の亂暴武士を二人宛ひきうけ、一つも手だしをしないで、やつつけてやろうではないか 覺フム、スルト睨み倒すんだな 武それは、貴様の勝手だ 鎗ヨシ、合点だッ 武磯端、いゝか……半イオ、

そんな事は朝飯前だ、サアやれい」と、三人はヅカ〜と六人の真前へつたち、エイッと一聲口々に氣合をかける、これはソモいかに、ウーンと六人が叫んだと思つたら、バタリ〜とそれへふつ倒れ、枕を並べて氣絶した 半「アハッハ、……どうだおれはこの二人だぞ 覺おれは、此奴兩人だ 武拙者は、彼奴等だ、イヤそれで漸々本物の覺禪坊といふ事が判つた 覺ハ、……、おれもその通りだ、どうもすまなかつた 半「ナニ、我々が實は悪かつたのだ」と、今更の如くに互いに挨拶をいたしている、群集は何が何やら薩張り譯が判らない △「オイ、一体どうしたんだらう、エイッと三人が聲をかける、六人がウーンといつてぶつ倒れたなり氣絶したよ □「サア、妙な魔法もあるもんだ ○然し うつ倒れた奴を其方のけにして、可笑な挨拶をやつてるせ、廢物とか本物とか……全体何の事だらう……と、喉ト〜リでございませう、三人の衆傑は左様な事には願

着せず 武「オイ、此奴等をどうしやう…… 半「マアまで……」と、磁端半藏はヅカ〜と若者の側へ進み、倒れたるをひき起してやり 半「コレ町人、もふ氣遣いな、あの通り六人はねさせてある、今の間に早くゆけ〜 町人「へい、どうもあり難ふ存じます、自分等がよつている事はいいはないで、つき當つたとか何とかひつ掛り、この様に遣されました、私は淺草藏前の清吉と申しまして…… 覺「コリヤ〜、そんな事はきくに及ばん、又目をさますと面倒だ、急いでかいれ…… 町「へエ、大きにあり難ふございませう」と、若者は痛さを堪へてひよろめき上り、禮をのべつ、ゆかんとするを、覺禪坊はよび留めて 覺「ア、コリヤまで町人 町「へエ、まだ何ぞ御用でございませうか 覺「オ、貴様身体を蹴たりふんだりせられて、随分けがをしたであらう 町「ハイ、この様に所々青血にいつております、顔はすりむかれて…… 覺「ウム、氣の毒だ、六人から膏藥代を貰つてや

る、暫らくそれになつておれ」と、覺禪坊は六人の側により、懐中へ手をつゝこみ、一々紙入を引だし、覺イヨ、ある、これは五兩三分、此方は二兩二分……此奴に吝な奴だ、僅か二朱しかもつていない……」と、順々に勘定して、六人の金を集めてみると、十二兩餘りある。覺コリヤ町人、これをもつてゆけ……ナニ遠慮をするな、膏藥代にとつておけ……

町へ、大事ございませんが、覺拵よものか、此奴等は焼てくほうと、にたくほうと、我々三人の自由だ、チア歸れ」と、件金の金を渡してやると、町人は大きに喜び、頻りに禮をのべつゝ、急いでその場をたちさります。後に三人は互いに顔見合し、大口あいて何々どううち笑つておりますといふ、愈々三葉傑が千代田城内へのりこみ、大御所家康公の御前において、武術玄妙を現はします。大眼目は、暫らく休憩いたしまして、次席のおたのしみといたします……

第 十 席

この時三葉傑は暫らく倒れたる六人の顔を眺めておりましたが、半何うだ身装なぞの様子では、確かに一廉の武士とみへるが蘇生させて充分意見をさし加へてやろうではないか、武成程それが宜かろう、まてッ……乃公が引き縛つてにげない様にしておこう……」と、懐中より用意の繩をとりだし、素より小具足十手の名人であるから、件の繩をといてヤツと聲をかけるが、いか、六人ながら瞬く間に繩をかけたるその早さ、實に目にはやへぎらぬ早業でございます。活いている者でも譯はないのでありますから、正体のなき奴に繩をかけるのは雑作もありません、覺禪坊はこれを見て大いに感心いたし、覺アム何うも鮮なものだ、イヤ、感服……」と、背後にまわつてエイと

一々活をいれるとウーと六人は呼吸ふきかへし、キヨロク  
 四邊を見廻はしているこれをみた磯端半藏は聲荒らげ半アイ  
 ヲ六人御身遠は何といふ事だ、察するに徳川家の臣と心得るが  
 僅か一人の町人を惨散な目にあわすとは大人氣ない、この儘ひ  
 つたて、その筋へさしだせば必らず重き刑に罰せられるは必定  
 である、以後改心いたすかどうじや」と、いはれて六人は面目  
 ない顔色にて甲誠に酔興のあまりすまん事をいたした、何う  
 か御勘辨に預りたい以後は屹度謹むでござろうスルト磯端半藏  
 は半ハ、……却々口で巧くいつても改心はできまい、到底こ  
 んな心得違いの奴は一思いにさつてしまつた方がよいであらう  
 ノオ覺禪坊……覺オ、そうだ、それに限るよ」と、はや鎗  
 を抜いて威かしている六人は青くなつて、平身低頭し及び只管  
 に詫びいつておりまする、武内加賀之介はねが温厚なる人物で  
 ありますから、武イヤ兩人、まつた處で仕方がない兎に角万事

おれに任せてくれ、よく意見をしてみやう」と六人にうち向ひ  
 武コリヤ六人の者汝等はいわく三人を誰だと思ふぞツ、この男  
 は今天下にその名も高き上泉高弟の随一人、磯端半藏秀國だま  
 つた之なる坊主は南都において豪僧とよばれたる、片鎌鎗の大  
 名人寶院藏覺禪坊である尙ほ又おれは武内加賀之介といふもの  
 だ」と、きいた六人は大いに驚き六人さては今天下に雷の如く轟  
 いたる磯端半藏秀國先生、寶院藏覺禪坊殿、武内加賀之介先生  
 でござつたか、とても我々が敵はんのもむりはない……」と、  
 あまりの事に茫然としておりますと武内加賀之介はなほも六人  
 にむかつて武汝等が我々三人にみつかつたのは不運であるが、  
 必竟するにとるにもたらぬ町人風情をいじめる罰だ、すておき  
 難き奴なれど今日の處はみのがしてくれ、この後下々の町人  
 共を苦しめる事は断じてできない以後を謹めい」と、懇々利害  
 をといて意見に及び縛めの繩をといてやると、六人の者はそれ

へ平伏なし六人「ハイ誠に恐れいりました、御意見に基いて今後  
 は謹むでございませう、我々は……」と、名前を名乗らんと  
 たしますを加賀之介はおしどめ「武イヤ姓名は承はるに及ばん  
 早く歸らつしやい」と、花も寶もあるその言葉に六人は益々  
 しいり、交るく「禮をのべ喜び勇んでたちさりまする半ハ  
 ……存外手應のない奴ばかりだ、然し武内……覺禪坊と折角  
 出あつて直に別れるも何とやら、今夜は宿を一緒にとつて夜と  
 共に語りあかそうではないか武ウムよかろうく覺禪坊いぎ  
 はあるまい覺イヤ返つて此方より願いたい處だ、サアゆこう  
 と三人はその場をたつてプラリノと二三丁ゆくと、ヒヨイと  
 横町よりとびだしたる一人の町人能くみれば先刻助けてやつた  
 清吉といふものでございませう覺オ、貴様はまだこゝにいた  
 のか町「ハイ助けて頂いた上にお金まで頂き、この儘お別れ申  
 してはすまんと心得、どこかで一杯さしあげたいと存じまして

半「ハ……よせく町人、我々は狸の生れかわりでのみだ  
 したら一人前五升や六升は、どこへのんだやら判らんといふ酒  
 のみばかりだ余計な心配するよりも、すまんがよい宿屋へ案内  
 してくれ清へイ畏まりました、サアこふおいでなさいませ」  
 と、清吉につれられて淺草觀世音前に出てまいり武藏屋紋藏と  
 いふ宿屋へとまりこみ、三人は直様酒肴を注文いたし町人清吉  
 も相手させ互いに武勇の物語りをなし、夜のふけるまでのみす  
 へさて翌日になつて三人は勘定すまして、既に宿屋を出立な  
 ると仕度しているその處へ廻らすも昨日懲しめた六人の武士が  
 亭主の案内につれてやつてまいり六人「イヤ昨日はどんだ無禮を  
 仕り、何ともはや面目次第もござらん我々は徳川家の旗本、内  
 藤甚左衛門、小栗内膳、山中又兵衛、村上傳四郎、水谷忠五郎  
 野間半十郎と申すものでござる實は昨日お後をつけて、當宿屋  
 へ御一泊を見届けたかへつて旗本連中に吹聴いたしたる處、何



日しか我が君のお耳にはいり今朝登城のその折柄、大御所様の仰せには江戸表にかゝる勇士がいりこみいるとは、又と得難きことである一應目通りをさせたいとの御嚴命が、我々に下りました何卒只今より御登城下さる譯にはまいりますまいか」と、聞いた三森傑は互いに顔見合せ半づムさては御貴殿方は旗本のお歴々でござつたか、それはどうもすまん事をいたしましたシテ家康公が我々をおめしでござるか内如何にも左様是非おき、すみ下されたい」と、強ての頼みに三人は眞逆否とも云ひかね、快よくおうりをする、そこで三森傑は内藤甚左衛門はじめ六人につれられ、一應甚左衛門の屋敷へまいりこいで充分仕度になんで、又も六人の旗本連中に案内をしられ紅葉山千代田の城に登城をいたし、大廣間にうち通る既に大廣間上段の間には、大御所家康公は威儀嚴然と御着座遊ばされ、その左手には江戸中將秀忠公なほ又少し下つて兩側には、徳川家勇士森傑の面々を

じめ旗本連中が綺羅星の如くに居列んでいる、一座は森閑として虫なき原野をゆくが如くでございます、三森傑はツカくと進み遙か下手に平伏いたしますと案内役の内藤甚左衛門は家康公の御前に向い内ハツ恐れながら申しあげます、お目通りへまかりいでましたるは磯端半藏秀國、寶藏院覺禪坊、武内加賀之介久吉の三名にございます」と、恭しく言上するスルト家康公はニツコと黙頭さ給い家オ、三人の者珍らしき對面である、予は徳川家康なるぞッ早速の目通り過分に存する、苦しよない近ふ進め……」ハツと三名は等しく敬禮いたし半、これは家康公には麗はしき御尊顔を拜し、恐悦至極に存じ奉りまする浪人者の我々三名、お歴々のお目通りへ罷りいでまするは如何にも失禮の至りとは心得ましたが、折角のお召しと承はり不肖を願みず忝上いたしました」と、恐るゝ氣色もなく申しのべる何んしろ此處等邊りの森傑になると、家康公をみた處で

院 藏 寶 の 後

まるで朋友の様に思つてゐる、只位階がないだけの相違でござい  
ます、覺禪坊、武内加賀之介も、夫々御挨拶を申しあげ悠  
然としてさし控へておりますと、家康公は殊の外御機嫌麗はし  
く、家「イヤその方共は、流石天下の豪傑」といはれるだけあつて  
遠慮をしない處が氣にいつた、かく三勇うちそつて予が面前  
にまいつたを幸ひ、各々得意の妙術を現はし家來一同にみせて  
はくれまいか、若武士共後學のためにもなる事である」と、仰  
せいでられたこの時、武内加賀之介は席を進めて「武恐れながら  
申しあげます某は柔術まつた小具足十手の業に候へば、眞の腕  
前を御覽に供へるに付ては、武術者との試合は少と不都合の様  
に存せられます、勿論武術も辨へていない事はございませんが  
武術の試合は磯端半藏と寶藏院覺禪坊兩名へ仰せつけられたく  
私は只捕手の早業を御覽に供へたく、左様お思召しの義を願ひ  
あげ奉ります、家ウム左様か道理の事である然し柔術の捕手と

院 藏 寶 の 後

か小具足十手の組打といふは如何なる手数のものなるや、一應  
みたいものである、武「ハイ我が實父中務大輔久盛以來、家に傳  
はる眞劍白刃と、或は穴藏捕りなど、都合五ツの術がございま  
す捕手の手数も色々あります中にも、一番難ケしきは穴藏に陥  
りました者を捕へるか、最も眞劍の業にございませぬればこの穴  
藏とりの玄妙を一手、次に眞劍白刃と、又早繩の捕方を御  
覽に備へたふ存じます、家ウムそれは一段と面白からう武シ  
テその術は汝一人にて出来かねます、御近臣の中で屈強なる方  
を兩三名借用仕り、その方に劍をもたせて拙者にたち向はせ、  
右の眞劍を奪いとるの玄妙でございませぬ、家「成程それを眞劍白  
刃とりと申すか、イヤ面白い事である誰予ある武藝自慢の者は  
たちいで、武内の身体を眞二ツにいたしてやれ苦しふない手  
が許すツと、左右を見廻して仰せいでになるハツと答へて居流  
れたる勇士豪傑の面々は、一同顔見あはせて尻ごみなし、誰れ

一人進みでる者が、ないそれもその筈でございませう、徳川家にも夥多名題の豪華はありますが、たれか酔興にとびだして縛られる奴がございませう、又真二つにきれいといはれても、相手が無双の人物であるから却々左様旨くきれい譯のものではないと何れも躊躇いたし、只々片唾をのんで家康のお目にふれぬ様に小さくなつておりますといふ、愈々之より三豪華の腕前比べ、ソハ次席にゆづります……。

第十一席

この時武内加賀之介は身仕度いたしてつゝ、たち上り 武アイヤ誰方でも宜しい、無闇に縛られるは心苦しく思はれるであらうが、これも後學のためでござる、各々は拙者を敵とみなして、飽迄もうち掛つて頂きたい」と、ズラリと一座をみまわすと、

遙か末席の旗本連中のその中から、ノコノコたち上つたる一人は、これ予徳川家名題の大久保彦左衛門忠教でございませう、よく芝居や講釋でする大久保彦左衛門は、大抵老人に極つておりますが、この時代の彦左衛門忠教は、年は三十五六才にいたして、血氣盛の元氣一方、ツカクとそれへ進みいで、家康公に敬禮して加賀之介に向い 彦アイヤ武内加賀之介とやら、拙者は大久保彦左衛門忠教といふものだ御身の相手はおれがならう 武アイヤ、これは大久保氏でござるか、お一人では興味が薄い、もふ二三人願いたいもので…… 彦成程、多い方がよいと申すか、ヨシ……」と、旗本の席をシロくねめ廻しておりましたか、彦コリヤ、小栗又一と水野十郎左衛門、若い者の癖に何を小さくなつてゐる、これへでろ、貴様等は日頃から武藝自慢で豪そうにいつておるのじやないか、おれと三人で加賀之介をウンとヤツつけてやらう、サアでろ……」

と、大きな聲で呼ばりますと、家康公も點頭さ給い、家「ウム、これは屈強な相手だ、小栗水野の両名共に早速仕度をしてたちいでろ……」もふ鶴の一瞥で仕方がない、二人はハツと答へに及んでたち上り、お次の間へ下つてまいり、水「オイ小栗、大久保の兄貴が満らん事をいふものだから、到頭蒙い目にあふたな……」小「そうだと君前で縛られるのは、餘り嬉しい事はないよ、水「ケド、相手は今うりだしの豪傑だ、まけたつて耻る處はないが、外に澤山人もあらうに、我々をめざすとは大久保も人間が餘程悪い、マア仕方がないでかけやう」と、之から兩人は身仕度に及んで、バラ／＼と元氣よくたちいでた、此方武内加賀之介は手早く禰十字に綾なし、早繩を腰にゆいつけ、用意充分にでき上つた、武「サア、之からでござる、こゝでは働さ悪い庭前へ躍りでると、大久保彦左衛門、小栗又一、水野十郎左衛門

門の三人は續いてとびおり、何れも禰鉢巻、袴の股立を高くとり、正面左右より真劍をひきぬいてシリ／＼とつめよせる、家康公を始め秀忠公、まつた老臣勇士の面々は、片づをのんで目を注ぎ、いかなる妙術を現はすであらうと、一心不乱に見物する、大久保彦左衛門と小栗水野の三人は口にはいはねど心には三「ナニ、相手は名題の豪傑とはいへむてだ、我々とても千軍萬馬を往來した豪傑である、おまけに真劍をもつて掛るに、高が素浪人の一人位い、何條何程の事やあらん」と、シリ／＼と油断なくつめよせて、エイッ矢聲諸共、三人等しくきりこんだ白刃の下、あはや真二つと思いの外、ヒラリと体を躲して潜りぬけ、又きりこむと彼方此方と巧にどび交している内に、こはソモいかに加賀之介がヤツと鋭く氣合をかける、三人の白刃はボロリとおちてしまつた、餘りの事に流石の三人も、ハツと驚きてもち無沙汰で、茫然としております、武内加賀之

介は手早くおちたる刀を拾ふて、武「これが、真劍白刃どりでございませう」と、三本の刀を椽側へさしたすと、大久保彦左衛門小栗又一、水野十郎左衛門の三人も呆れ返り、彦「オイ、おうも判らん、宛で魔法使いにであつた様なものだ……」と、感心しております折柄、武内加賀之介が「ヤッ」と大地を叩いたと思つたら、よいに加賀之介の姿がみへなくなつた。三「オヤッ、どうしたのであらう」と、ウロウロみまわして、あに園らんや頭上の大木の上で、ボン／＼と手を拍く、アツと一同は樹の上をみあげると、加賀之介は枝に腰うちかけて、にこ／＼笑つてゐる、家康公を始め見物なしたる面には、異口同音にほめそやし、拍手喝采の聲は暫しはなれもやみません、この時武内加賀之介は聲をかけ、武「アイヤ、御前に申しあげます、三人の方々がかく下にあり、拙者がこゝにあつて、所謂穴藏捕りの秘術を御覽にいたします、三人の方にどうかそれなる真劍をもつて

お構へ下さい」と、いはれて三人は急ぎ一刀さるが早いが彦「ア、美事とれるものならどつてみる、側へよつたら真二つたぞ」と、真甲によりあげて、きつと睨まへている、加賀之介は平氣の平左で、武「ハ、……、御油断めさるな、今でござるぞ」と、いふ聲諸共に、ヤツと一聲とびおりたかと思ふ途端に、まいつた／＼と三人がいふ聲が聞へますから、一同はどうしたのであらうと、瞬もせずみていると、こはいかに、はや三人は繩に掛つて、武内加賀之介は繩尻を掴んで、スツクとたち上つてゐる、これをみられた家康公は思はず膝を叩きたまい、家「天晴、神變不思議の早業である」と、非常に感賞せられます、繼て武内加賀之介は三人の繩をさき、武「イヤ、どうも恐れいりました、彦「オイ、われ生れて今迄斯様な目にあはされた事はない、イヤハヤ妙な術もあるものだ」と、各々苦笑いしてひきおりました、寶藏院燈禪坊も磁端半藏も、目前こ

院 藏 寶 の 後

の早業をみて、今更ながら加賀之介の腕前に感心しておられます。そこで今度は磁端半藏と寶藏院覺禪坊のたちあいといふ事になり、兩人は次の間に下つて、夫々仕度に及んでゐる、この時武内加賀之介は御前に進み、武恐れながら、御前に申しあげます、名人の聞へをとつたる兩人のたちあい、行司がなくては適いますまい、願くば拙者に右行司の役目を仰せつけられたふ存じます。家ツム、その方の願ひ道理である、許す行司役を勤めてよからう」と、仰せつけに相なつた、やがて兩豪傑は仕度をいたしてたち現はれ、磁端半藏は二尺三寸の木剣を提げ、寶藏院覺禪坊は團穂付の稽古鎧をかきうけ、ズイとその處へ進み、雙方互いに會釋をいたした時に、磁端半藏は寶藏院覺禪坊に向半アイヤ覺禪坊、申す迄もない事だが、總じて武術は互いに遠慮があつては、精一杯の技倆を現はすことはできないものであるから、拙者をばめさす仇だと思つて、充分いきこ

院 藏 寶 の 後

でまいられよ。覺いかにもその通り、拙僧とてもそう願ひたい。お心安いは常の事だ、个ザまいらう……」と、兩人ヤツと後へとび退り、磁端半藏は神蔭流眞の極意の位どりに及び、正眼にビタリとつける、寶藏院覺禪坊は、鎧にリツク」と扱ぎをくれ、これもヒタリと構へ互いにエイヤツと、聲をかけながら、ザリ、と二足三足前へ進んだぎり、一歩も動かす暇みあつてゐる、行司役の武内加賀之介は、鐵扇を構へて油断なく目をくばり、じつとたちあすくんでおります、家康公を始め一同はどんな面白い勝負があるかと、手に汗握つてみつめております。之介も、鬘の毛一ツ拵かきさす……オット覺禪坊には鬘の毛はありませんが、とに角只にらみあつたばかりで、總身より熱湯の様な汗をタラ」と流しだした、スルト武術の心得なき人には、ボツ、と喉を始め、甲、どうだい、尊公は何方が勝つと思ふ、乙、

院 藏 寶 の 後

サア、何方でも笑つた方が負だらう 丙「ハ、……、馬鹿な事を  
 いつてはいけん、ねめつ比べじやアあるまいし……あれ見給へ  
 覺禪坊は坊主頭からポツと汗をかいていりよ 丁「ウムそら  
 た、磁端も大變汗を流して、白い鉢巻が茶色になつてきたよ、  
 手「イヨ、段々側へ進んできたが、薩張り面白くない試合だ  
 な 丙「ケド、坊主も却々強いな、早く何とかすればよいに……  
 と、心なき連中は色んな評判をいたしている、兩人は一生懸命  
 に氣合をかけあい、チリ／＼進みよつたと思つたら、覺禪坊は  
 氣を焦ち、ヤツと一聲鐵壁も碎けよと、つきたす鎗先電光石火  
 相手をさるものヒラリ体を躲して發止くと拂いのけ、上段下  
 段、虚々實々、陽炎、稻妻、水に月、稍暫らくの間は互いに秘  
 術を盡して、右に拂へば左につき、頭にくれば足を規い、まじ  
 す劣らず奮闘する事、凡そ三十有餘合でございましてが、再び  
 パツとたら別れ、にらみあつたなりフウ／＼と烈しきいき使ひ

院 藏 寶 の 後

に及んでいり、武内加賀之介は兩人の顔色をみると、二人なが  
 ら真青に相なつて、眼色血走り物凄きこと限りがない 武「フム  
 これは大變である」と、思つている中に磁端半藏の元結がブツ  
 とさされて、パツと亂髪と相なつた、それと同時に覺禪坊の鉢  
 巻は血がにじんで、紅で染めたやうに相なりました、武内加賀  
 之介はこの体をみるや 武「アイヤ、双方暫らく……」と、聲か  
 けながら真只中へわつていり、鐵扇をもつて、兩人の得物をバ  
 ン／＼と上へはねあげると、途端に磁端半藏と覺禪坊は、タチ  
 ン／＼とよめいて、ドンと後へ尻餅つき、それなり氣絶を  
 してしまつた、ソレツといふので、直ちにつめあいの御殿醫者  
 がかけつけ活氣薬を服用せて介抱するやがて程なく二人共蘇生  
 いたしますと、家康公は聲かけたまい 家「ヤ、武内、只今の勝  
 負は何れが勝ちじや、手には順と判らなかつた 武「ハイ、兩人  
 共さらに劣り勝りはございませぬ、あれをうちすへおく時は二

人ながらその儘相はてまする家「ナニ、しぬると申すか、それはなせだ……」武「されば、氣を使いすぎて全たく絶命をいたすは、名人上手の試合には間々ある例い、然しいづも天下名題の豪傑ほどあつて、驚きいつたものでございませう。家「フム、シテ元結が自然にされる、鉢巻に血がにじむといふはどういふ譯だ。武「ハイ、餘り氣をはりつめ、かゝること相なつたものとみへます、これも別に怪むにはたりませぬ、所謂氣合試合といふはこの事でございます。家「然し、額も破れないに血がにじみどうもしないに元結がされるとは妙だ。武「これ即ち、武術の極意でございます。俗に申す血の汗を流すと申すはこれらの義であらうかと愚考仕ります。家「成程、その方の申す處一應は道理の様であるが、只妙とか極意とかいつたばかりでは、さらに合点がまいらん、何とかか極意とかいつたばかりでは、さらにくれまいか」と、家康公は頻りに不審に思つておられる、スル

ト覺禪坊は最早介抱をうけて、大丈夫に相なつたとみへ、ゾカ〜とそれへ進みいで覺「イヤ、仰せに従い愚僧が極意を御覽にいれませう」と、いひつゝ、じつと庭前を見渡すと、向ふの方に小雀が五六羽おりて、何やら餌を拾ふている。覺「御前、御覽遊ばせ、妙の極意は斯の如きものでございませう」と、クルリむき直つて、ハツタと雀をにらみすへ、エイツと一聲氣合をかけますと、六羽の雀はバタ〜と翼を縮めて、コロリぶつ倒れた、覺禪坊はたち上つて庭におりたち、雀の側へきたつて、一々拾いとり、家康公の御前へ持参なし。覺「ハイ、鎗術の妙はこれにありませう、雀は氣合にあてられて氣絶をしておりませう」と、六羽の雀をそれへ列べますと、家康公を始めとして一同の人々は、これは〜とばかり感じいり。家「フム、深い、シテその雀はもふ蘇生いたすまい。覺「ヤ、かくの通りでございませう」と、又もヤツと一聲にらみつけますと、六羽の雀はバタ〜と



羽叩きして、チウくく、と何れへかどびさります、これを御覽に相なつた家康公は、家「フム、成程感心く、鎗術の極意もここに到れば確かなものた、イヤ驚きいつた、誰かある三人の者に杯をせいらせい……」と、それより酒肴を下しおかれまして三人はあり難くおうけをして次の間に下り、快よく酒肴を頂いて生方御苦勞に存する、拙者が酌をいたそう、乙「某も、一献頂戴いたそう」と、我もくくとおしかけてまいり、頻りに三人をとり圍んで、武勇の物語をまいていり、やがて暫らくすると再び家康公はおめしとなり、家「どうじや三人の者、その方等は何れも浪人の身の上、覺禪坊は僧侶ではあるが、これも別段さし支へはあるまい、只今より予の家臣となる氣はないか、今天下種なる様ではあるが、いつ何時關東關西の談判破裂いたし、一大合戦と相ならんも計り難し、その時には汝等の武術をもつて

のりだし、天晴功名手柄をいたせば、鎗先をもつて一躍大名になれんとも限らん、篤と思案をして返答せよ」と、有難きお言葉が下る、なれども三人ながら窮屈なる人の家來となる事は好みませんから、覺「ハイ、別に思案をいたす迄もございませぬ、愚僧は幼年のみぎり、仔細あつて佛弟子となり、今は世棄人の身の上、殊にわが寶藏院流の鎗術を天下に擴めるが願念にござれば、幾重にもお断り申しあげます、家「フム、然らば磁端半藏武内加賀之介はどうじや、半「ハイ、某は未だ修業中に候へば、とても御率公はできかねます、磁「某も、覺禪坊と同じく、武内流の小貝足十手の極意を世に傳へたい存念、平にお断り申しあげます」と、三人ながら承知をいたしませぬ、家康公も至極おしい事には思はれましたが、これ程の豪傑になると、威光をもつて強ゆるといふ譯にもゆきませぬから、據なく三名にお暇を下しおかれるについて、一名に白銀拾枚づゝ下賜せられ、三豪

院 藏 寶 の 後

傑はあり難く頂戴に及んで御殿を下り、再び浅草の武藏屋に歸つてまいり、うち寛いで酒宴を催はし、覺禪坊は磯端半藏より上泉伊勢守先生への添書を貰い、後日の再會を約して、互いに袂を別つ事と相なりました、之より覺禪坊胤榮が、上泉伊勢守秀綱先生の道場へのりこみ一條、段々愉快絶なる講談は之からでございませす、ソハ次に譲つてべんじます……。

第十二席

さても豪僧寶藏院覺禪坊は、磯端半藏秀國、武内加賀之助久吉の兩人に別れをつけ江戸の土地をたちのいて、段々と上州さし、のりこんでまいり漸やく箕輪に到着して、上泉伊勢守秀綱先生の道場を訪ね磯端半藏の添書をだして、入門の事を申し、いと上泉伊勢守も他ならぬ磯端半藏の添書といひ、天下名題の

院 藏 寶 の 後

寶藏院覺禪の事であるから快よく承諾いたされ、夫より四天王八天狗の連中にもひきあはせられて、上泉道場にどまる事と相成つたそこで覺禪坊は日夜秀綱先生について劍法を學び、又は四天王八天狗と伎倆を闘はし、到頭三ヶ年の間に神蔭流の極意をゆづりうけ劍術において免許皆傳の腕前と相成つた、この時寶藏院覺禪坊は四天王の一人たる柳生又左衛門と義兄弟の約束をとり結びました、この又左衛門こそ後に柳生但馬守宗冬と改め、一万石を領して三代將軍家光公の御指南役と相成る人物でございませす、後江戶表で再びあいの場處がありま

すから、茲には別にお話もございません、さて覺禪坊は首尾よく三ヶ年の功をつんで、神蔭流の極意を會得いたし、ふ大丈夫と思ひました、處より、師匠秀綱先生に暇を貰ひ、夥多の門人と別れをつけ、道場を出立いたそうとする時に秀綱先生は覺禪坊をよびとめ、秀時に覺禪お身はもはや天下に敵なしといつて

傑はあり難く頂戴に及んで御殿を下り、再び浅草の武蔵屋に歸つてまいり、うち寛いで酒宴を催はし、覺禪坊は磯端半藏より上泉伊勢守先生への添書を貰い、後日の再會を約して、互いに袂を別つ事と相なりましたが、之より覺禪坊胤榮が、上泉伊勢守秀綱先生の道場へのりこみ一條、段々愉快絶なる講談は之からでございませす、ソハ次に譲つてべんじます……。

第十二席

さても豪僧寶藏院覺禪坊は、磯端半藏秀國、武内加賀之助久吉の兩人に別れをつけ江戸の土地をたちのいて、段々と上州さしてのりこんでまいり漸やく箕輪に到着して、上泉伊勢守秀綱先生との道場を訪ね磯端半藏の添書をだして、入門の事を申しおれると上泉伊勢守も他ならぬ磯端半藏の添書といひ、天下名題の

寶藏院覺禪の事であるから快よく承諾いたされ、夫より四天王八天狗の連中にもひきあはせられて、上泉道場にどまる事と相成つたそこで覺禪坊は日夜秀綱先生について劍法を學び、又は四天王八天狗と伎倆を闘はし、到頭三ヶ年の間に神蔭流の極意をゆづりうけ劍術においても免許皆傳の腕前と相成つた、この時寶藏院覺禪坊は四天王の一人たる柳生又左衛門と義兄弟の約束をと結びました、この又左衛門こそ後に柳生但馬守宗冬と改め、一万石を領して三代將軍家光公の御指南役と相成る人物でございませす、後に江戸表で再びあいの場處がありますから、茲には別にお話もございませせん、覺禪坊は首尾よく三ヶ年の功をつんで、神蔭流の極意を會得いたし、門人とともに思いましたる處より、師匠秀綱先生に暇を貰ひ夥多の門人も別れをつげ、道場を出立いたそうとする時に秀綱先生は覺禪坊をよびとめ、秀時に覺禪お身はもはや天下に敵なしといつて

院 藏 寶 の 後

然りな腕前ではあるが、矢張りこの上州真庭に真庭念流の大達人、樋口十郎左衛門といふ郷士があるこれは却々の名人であつて、一子小太郎といふは樋口の小天狗といはれ、父にゆづらぬ天晴腕前一應この者と試合つてみるがよかるう、決してまける氣遣はないが他流試合をしなければ腕はあがるものではない。『ハイ畏まりました、夫ではお暇申しませう』と他年の恩義を謝して秀綱先生に別れ、ブラリ瓢然と箕輪をたちのき段々を真庭をさしてやつてまいります内、中途で日がズンブリとくれてしまつたが、左様な事に頓着のない覺禪坊は覺ア、夜道のが結句静かでない然しこふ暗くなつてきては閉口だ、初めての土地だから少しも勝手が判らない』と、鳥羽玉の様な闇夜をも厭はず今しも榛名山の麓の途をスグく向ふへいつていると、思いもよらずドンとつき當つたものこそあり、覺禪坊はきつとたち留り覺ア、氣をつりッ人並より大きな坊主が歩いてゐる

院 藏 寶 の 後

のが判らんかッ、大喝一聲怒鳴りつけると相手の男は呵々とうち笑ひ男アハッハ、……その咎立ては此方からする事だ、乃公は身のたけが六尺九寸だぞッ真逆貴様が人並より大きいといつた處で、乃公より大きい事はあるまい鼻をつかんでも判らぬ闇夜に、互いにつき當つたのは双方に落度がある、不埒な事を申すと許しはおかぬぞッ』と反對にやりこめる、覺禪坊は怒るまい事か覺黙れッ此奴口實しく口喋るなッ、汝ッ勘辨ならんッ』と、もつたる鎧をとり直す件も聞にすかしてこれをみるより男ナユッこの悪僧奴ッ問答無益だッ、尋常に勝負しろッ覺ア、望む處だサアこい』と、例の鎧を隆々どふりまわし勢い鋭く突つ掛つた、相手の男も一刀ズラリとぬき放ちつき来る鎧先を上げ下段と軽くうけ流す、覺禪坊はこれをみて密かに驚き覺ア、ム此奴は天晴の腕前だ、定めてよしある武士に相違ない』と思ひながらに油断せず、エイオーとつきたて

院 藏 寶 の 後

星のかりに奮闘する光景は、双龍玉を争ふが如く、両虎の深山に  
 嘯くにさるもにたり、約そ二十有余合の戦に及んで、少も勝負あ  
 つきません、相手の武士も大いに驚いたとみて、突つこまれたる  
 鎧先を發止とせよ、武アイヤ御坊、暫らくまたれい」と、慌  
 しく聲かけると、覺禪坊は槍をひいて、さつと身構て、覺までとは  
 何の用だ、今さら卑怯であらう、武アイヤ卑怯でない拙者、これまで  
 天下の豪傑、勇士とであいたれど、御身の様な鎧術、優れた人物に  
 嘗てたぢあつた事は、ない、察する處、この頃、天下にその名も高き  
 寶藏院片鎌鎧の開祖、寶藏院覺禪坊とみたまは、ひがめか、某事は當  
 上州眞庭の住人、眞庭念流を指南いたす樋口十郎左衛門光俊と  
 申すものでござる、何卒尊名承はりたす樋口十郎左衛門光俊と  
 めて、慇懃に尋ねますと、覺禪坊は、大いに驚き、覺ナニ御身が  
 眞庭念流の達人樋口十郎左衛門殿でござつたか、それは、御  
 鄭重なる御挨拶、痛みある如何にも拙僧は、南都の寶藏院覺禪で

院 藏 寶 の 後

ざる御眼力の程、恐れいつた……」と、名乗りますと、十郎左衛門  
 は、うち喜び、十、これは意外の御無禮をいたした、圖らぬ處で  
 天下の豪傑に對面を仕る、シテ之より、何れへおこしなされる、覺  
 イヤ寶は、斯様、くで上泉先生より、貴殿の事を承はり、お伺ひ申  
 す途中、生憎、ゆきくれて、かくの始末でござる、十、フム、左様で  
 ござつたか、それは、丁度幸い何は、然し、今夜は拙者の屋敷へおこし  
 下されい、悠々御物語り仕らう、覺、然らば、御厄介に相成り申す  
 と、覺禪坊は、十郎左衛門につれられて、樋口道場へやつてまいり  
 十郎左衛門の、一子、小太郎、とも對面いたし、その夜は、主客互いに  
 うちとけて、酒宴を催はし、武藝の物語りに、夜をよかし、翌日と相  
 成りますと、覺禪坊は、十郎左衛門、三本試合にて二本をとり、小太郎は、  
 したが、十郎左衛門とは、三本試合にて二本をとり、小太郎は、  
 ても、覺禪坊には、勝てないといつて、ひき下る、又も、夫より、酒宴と  
 なり、覺禪坊は、寶藏院流、十郎左衛門は、眞庭念流の極意を、交換い

院 藏 寶 の 後

たし、ひき留められる儘に五六日、逗留して夥多の門人にも指  
南をなし、遂に樋口親子に別れをつげ眞庭をたつて段々上州  
地を後に、碓氷峠も何なくこへて信州地へいりこみ、輕井澤、  
杓掛、御代山、小廣、田中と出てまいり漸々信州上田五万三千  
石松平伊賀守御城下へとやつてまいりました、この上田城は  
關ヶ原合戦以前までは眞田安房守昌幸の居城でありましたが、  
關ヶ原戦争眞田家は大阪方に組し江戸中將秀忠の大軍をこゝに  
くひとめ、大いに徳川家を惱ましたる廉により徳川家のこゝに  
をうけて、遂に上田城をあはれ眞田昌幸と一子左衛門尉幸村と  
は、重だつたる郎黨を従へ紀州九度山の麓なる九度村に閑居な  
し、諸國へ問者を放つて密かに世の動靜を窺つていたのでござ  
います、その後へ領主としてきたつたのが、則ち松平伊賀守  
であつて徳川家譜代の大名であります、それはさておき寶藏院  
覺禪坊は、今しも信州上田の城下へいりこんでまいりますと、

院 藏 寶 の 後

行手に當つて人がワア〜とたち騒いでおりますから 覺ハテ  
何であらう、又喧嘩かもしれない……」と、足をはやめて件の  
場處にきたり群集の後よりのびあがつてみますると、背後姿で  
よくは判りませんが手頃三十才ばかりの武士と、相手は四人づ  
れでもつて互いにぬき合せ、今やまりあひ眞最中でございます  
る 覺「オヤッ何ういふ喧嘩かはしらないが、四人に一人では敵  
ふまいそれなら一人の武士も、余り立派な腕前でもないら  
しい一番のりこんで仲裁に及んでやろう……」覺禪坊は鎧の鎧  
をもつてのいた〜と群集おしわけ、内部へとびこむが早いか  
覺「アイヤ四人の方々またれい、如何なる仔細かはしらないが  
只一人を多勢できりまくるとは宜しくない、拙僧が仲裁申す刀  
をおひきめされ……」と、鎧を毘沙門つきにいたしてよばると  
四人は赫つと怒り 四「黙れッ坊主汝等の出沙ばる場處でない、  
そこのけ〜……」と、少しもきゝいれない、覺禪坊も怒りを現

院 藏 寶 の 後

はし 覺オ。そらいふ事ならも頼まん、さる代りにはおれも  
意地だこの武士へ加勢をするから、その分承知に及べい……」  
と、いひつゝ一人の武士の方へ向いヒヨイと顔見あはして吃驚  
仰天 覺ヤ、貴公はお兄上ではございませんか 武オ、そちは  
覺禪であつたかよい處へきてくれた、おれはその方を尋ねて諸  
國を捜していたのである、委細は後にて話す實は之なる四人の  
武士が、おれにつき當つて喧嘩をふつかけ幾等詫てもきゝいれ  
ず、遂に果合におよんでいたのだ万事は汝に任すからよきに計  
らつてくれい」と、兄の中御門武藏は大いにうち喜び、ホッ  
と胸なで下している、今度は覺禪坊が承知せず 覺ナニ此奴等  
が兄上に喧嘩をふつかけましたか、已れッ憎くい奴だ宜しい覺  
禪がのりこんだからには、片端からひねりつぶしてやります」と  
兄の武藏を片脇によけさせ、呆れかへつて貧棒している四人の  
前に躍りいで 覺ヤイ四人の奴もふ許してくれと泣顔しても承

院 藏 寶 の 後

知しないテツ抑もあれなるはおれの只一人の兄上だ、兄上に向  
つて喧嘩をふつかけるとは不埒千万察する處汝等は松平伊賀守  
の家來と存するが、武士の風上にもおけぬ犬武士だイザ一々鎧  
玉にあけてくれん、覺悟しろう」と、鎧を扱いてうち向つた四  
人の武士はこの勢にタシと後退りをしたが、相手を貧乏坊  
主と侮つて漸やくふみ留り 武士ナンダ糞坊主出家の分際で鎧を  
携へているとは狂氣坊主奴、ソレ西瓜頭を叩きわつてしまへ  
と、四人は四方より喚き叫んできつてかゝる、覺禪坊は怯とも  
せず 覺ニ、イ未熟な腕前で何を小癪なッ」と、パンと  
と鎧をふりまわして瞬く中に四人の白刃を叩きおとし、足を拂  
つてなぎ倒し四人ながらそれへとつておさへ 覺ヤイ何うだ木  
ッ葉今こそ名乗つてきかす、我が名をきいて驚くな我れこそは  
南都において、寶藏院流片鎌鎧の開祖寶藏院覺禪坊であるぞよ  
ッ」と、名乗るをきいた四人はブルと身をふるはして青く

院 藏 寶 の 後

なり 甲とヘーそれでは御坊が當時天下にその名の高い、寶藏院に禪坊殿かつ乙道理で少つと強いと思つた丙イヤ誠に悪い事をいたした、どうかお許し下さい丁以後は断じて彼様な事をいねさん、信度謹むでござろうと、四人は口々になかなばかりに歎願する、覺禪坊は漸々押へたる手をはなし四人の情々とおき上るをまつて覺コレ方々全体御身達は兩刀は何がために帯していられる、只みだりに喧嘩や果合をするためではござるまい、かつ又各々の一命は主君にさへ上げてある身体であつて我身なれども自分の自由にはできないもの、それ位い事を辨へない御身等ではあるまいがあまりといへば余りの致し方、今は泰平の様なれど何日何時戦亂おこらんとも計り難し、その時には君の馬前において忠勤をぬきんでなければならん大切な身ではござらぬか、生命を粗末にする者に限つて、碌なものは一人もない以後は必らず共に離まつしやい、早くお歸りあれい」

院 藏 寶 の 後

と懇々意見をしられて、四人は面白なげに三拜九拜いたし月を拾いとつて鞘におさめ、挨拶もそこへに群集かきわけこそとどたちさりまする、後見送つて覺禪坊はからくとうち笑ひ覺ハツハ……世の中には仕方ない武士もあるものだ」と云ひつ、兄武藏の側に近より覺兄上四人は到頭おつはらいました武オ、覺禪誠に忝ないおれも一人や二人は別に恐れもいたさんが、四人に掛られては少々往生だイヤ貴様にであつたので助かつた」と、兄の武藏は深く喜悅んでいる覺禪坊も共に喜悅び覺ナニ兄上とても彼等の五人や七人には豈夫まけられる氣遣もござるまいが、兎に角思はぬ處でお目にかゝりこれほど嬉しい事はございませぬ、それにいつて氣掛りなは兄上が私を尋ねて諸國漫遊とは、一体どうした譯です何かお父上のお身の上で變つた事でもできましたか……」と、心配そうに尋ねます武イヤ父上は御遊者であるが、何をいふても今年七十才そ



れゆへ常々その方の事を物語られ、今一應覺禪にあつて死にた  
いと口癖の様、にいづていられるのじや、乃公も始終お側にたつ  
てそれをきくのが情、いから父上にお願ひ申してその方を尋ねに  
でたのだ、覺へエ……それなら安心いたしました、兎も角もど  
こかへ宿をとり、悠々お話をいたしませうと、兄弟はその場を  
たつてプラ／＼と城下へいりこみ、信州屋茂平といふ宿へどま  
り、その夜は兩人が酒をのみつゝ、積もる物語りに旅の疲れも忘  
れ互ひに久しかりで枕を並べ、最も快よくうちふしました、が  
翌早朝に兄弟はおきいで、覺夫では兄上、一刻もはやく故郷へ  
かへり、お父上を御安心おさせ申さねばなりません、之より出  
立いたしませう、武オ、よかろう……」と、遂に兄弟は上田の  
城下をたつて、ドス／＼と途を急ぎ奈良へさして戻つてまいり  
まするといふ、圖らずも寶藏院覺禪坊が弓術の大達人菊岡二位  
宗政と腕前比べの大活劇、愈々出で、愈々面白き顛末は、一寸

呼吸いれまして次席のお楽しみ……。

第 十 三 席

葉僧寶藏院覺禪坊は、圖らずも信州上田の城下において兄の武  
藏にであい、父薩摩の消息をきき、及びましたる處より、一日も  
早く故郷へたち歸らん、兄の武藏と共にドス／＼と途を急ぎ、  
泊りを重ね、ねむりを重ねて、道中別にお話もなく、漸々大和の國は  
奈良の町へたち歸り、久々に父薩摩に對面すると、薩摩の喜  
こびはいかばかり、父オ、覺禪か、よく戻つてきてくれた、武  
藏も首尾よく捜しあて、御苦勞であつた、たれも最ふとる年だ  
から、老さき永くはあるまいと思つて、せひ共生前にその方に  
あつてしにたい、かと思つて武藏に尋ねにやつたのだ、大分こ  
の頃は名前をあげてきて、父も密かに喜こんでいる……」と、

話は夫からそれへと親子兄弟は最もむつまじく語りあい、互いに笑い興じておられます。そこで覺禪坊は父の宅にいつ迄もいる譯にまいりませんから、寶藏院におち歸り、道場の代稽古を命じてある高弟中村市兵衛尙政にす中の模様を聞き、まつた寶藏院の方は弟子の胤舜より委細をききとり、夫より以前にもまして門人をとりたて、盛んに寶藏院流の鎗術を指南いたし、傍ら父に孝養を盡し、いと安樂に老年を送らせておられます。然るに或日の事寶藏院覺禪坊は、只一人寶藏院をたちいで、ブラリと興福寺南大門の傍りへ散歩にでかけてまいります。一人の町人が五六名の武士にとり圍まれ、頻りに打擲をしられて、やつておくも不憚だ、挨拶をしてやらうと、ブカくとそれへかけつけてまいり、ヒヨイと件の町人をみると、之なん兼て世話にいたして、寶藏院の檀家大紺屋治平の養子清七でござい

ございますから、覺禪坊はみるよりバラリ武士の中へわつていり、覺アイヤ、各々暫らくおまち下さい、この町人は少々自分によ縁のある男でござる、どういふ譯かはしりませんが、餘りの御折檻の様にみうける、もし悪い事がござらば、拙僧がなり替つてお詫をいたす、おみうけ申す處何れも歴々のお方々と存するが、どうか御勘辨に預りたい、愚僧は寶藏院覺禪坊でござると、慇懃に言葉をかけると、件の武士共は打擲する手をどめて互いに顔見合せていました、中にも頭分とみへたる一人は傲然と進みいで、武ハ、ア、御身が寶藏院流片鎌鎗の開祖とかいつていばつて、武ハ、ア、御身が寶藏院流片鎌鎗の開祖とかいつて、之なる町人は我々に對して無禮をいたせしゆへ、かく打擲に及んで、思つて、あり難く心得ねばならん筈だ」と、人情けであると思つて、

なげなる大言に、覺禪坊も憤どいたしました。が、何をいつても相手が菊岡二位宗政といへば、射術の大名人といはれてゐる。傑であるから、覺禪坊も怒りを鎮めて、覺「これは、御貴殿が菊岡二位宗政先生でござるか、初めて御面會仕る、シテこの町人はいかなる粗相をいたしましたか、一應承つた上で幾重にもお詫をいたすでござらう」と、益々腰を屈めて申しますと、二位宗政は愈々肩怒らし、菊「イヤ、外ではない、拙者がつれてゐるこの犬が、あれなる鹿をおつけしたのだ、スルトこの町人のめが山砂ばつて、わが寵愛する犬をけつたのである、よつて格別の慈悲をもつて打擲いたしているのだ。覺「ハ、ア、成程犬が鹿をおつけした爲め、その犬をけつたこの町人を折檻に及ぶのだ」と申さるゝか、菊「いかにも、そうだ……」覺「イヤ、それはしお考へが違つてゐると心得る、元來この鹿と申すは、春日明神の神鹿と迄よばれて、昔しより大切にかつてある者でござる

それゆへ鹿を殺したものは石粉せめの刑罰に行ふ筈さへある位い、現に愚僧がかく出家と相なつたも、九才の節過つて鹿を殺し、それがために出家をしなければならん事と相なつたのでござる、町人は鹿を大事と思つて犬をたい散したのでありませうが、とに角高が畜生より起つた事でござれば、この場の場合には、御勘辨に預りたい……コ「ヤ、清七、貴様は今菊岡先生のいはれた通りに相違ないが、清「イエ先生、私は決してけつた覺はございませぬ、只犬をおつたばかりでございます。覺「フム、そのうであらう」と、覺禪坊は何かうち點頭しながら、再び二位宗政に向い、覺「菊岡先生、町人もあの様にいつてゐる事でござれば、別に犬もけられた譯ではござるまい、何も眼色をかへて怒る程の事でもない、武士道に關はるといふでもなし、この儘お濟しになつては如何でござる」と、きいた二位宗政は大いに怒り、菊「黙れッ、すまそうとすすますまいとおれの勝手だ、汝

は坊主の癖に少々、術を心得ていると思つて、この菊岡二位宗政を嘲弄した事を申す奴だ、他迄も許す事は相ならん、そのけくツツ……」と、大尉なる権威でございませう、覺禪坊は莞爾とうち笑つて、覺禪ハ、……、然らば拙僧が折角挨拶をいたすをおき、いれはないか、菊くどいッ、ならん……、覺して、これ程道理をどいて話して判らん様な馬鹿武士は、此方から相手にしない、さる代りには事の起りはこの犬から起つたのであるから、愚僧が犬を成敗いたしてくれ……」と、いふが早い、覺禪坊は、バラリとび掛つて、家來がつれてくる犬をムンツとひつ掴み、ヤツと一聲微塵になれと叫びつけた、何條堪らん犬はクワンクワンと悲鳴をあげ、何なくそれへ即死をする、アツと驚く家來は素より、菊岡二位宗政はかつと眼をむき、菊ヤ、犬をなげ殺したなッ、スルト覺禪坊は落つき拂い、覺アハ、……、犬めが悪戯をしたばつかりで、人間が打擲しられてゐる

のだ、畜生が尊い人間が劣しいか、天下名題の菊岡二位宗政ともあらうものが、それ位いが判らないとは笑止千萬、眞の豪傑は情けをもつて土臺とする、みるときくとは天地の相違、近頃片腹痛き次第である」と、傍若無人に嘲笑へば、菊岡二位宗政は愈々憤り、菊オ、不埒至極な糞坊主めッ、この上は汝が相手だッ、サアこの處において勝負しろッ、只一矢にて射殺してくれん……」と、家來にもたせし弓矢をおつとり、仁王だちに相なつた、覺禪坊は驚きもせず、覺ハ、……、弓と鎗との試合は面白がらう、いかに承知いたしました、コリヤ清七……、汝は院へたち歸り、日頃使いならした鎗をもつて、清へイ、合点でございませう、清七は一目散にとびだした、まつ間程なく鎗をそれへと持參する、覺禪坊はうけとるが早い、衣の袖を脊中へ括りつけ、げたぬぎすて、隆々と抜きをくれ、覺サア、相手になつて遣はず、汝等の矢はこの鐵石の覺禪にはたちない

ぞツ、どこからでも射てみらう」と、ハツタとにらんだその勢は、武藏坊辨慶の再来かと思ふばかりでございませぬ、菊岡二位宗政も何條猶豫いたすべき、ハツと七八間向ふへとんだと思つたら、矢頭を計つてつちたち上り、携へたる弓を満月の如くひき絞り、弓に矢番へ規いを定め、菊ヤイ覺禪坊、今雨が下に美事うけられるものならうけてみよツ、覺オ、何でもない事寶藏院流片鎌鎗の極意をみせてくれん……」と、ハツ構へて、チアこいとつたつた、菊已れツ、今にそのいきの根とめてくれるヲツと、エイツとかけたる矢、聲諸共、絃音高くとび來つたる矢は稻妻の如く、あはや覺禪坊の咽喉深く、グサツとつきたつかと思ひの外、覺禪坊は鎗にて何なく拂い落す、ついで第二第三と、矢繼はやに射出す矢は秋の稻穂のとぶにもにて、流石天下に並びなき射手の大達人とこそ思はれたり、されど覺禪

坊は、びくともせず、鎗を水車のごとく、ふりたて、とびきたる矢を、たゞさおとしはらいのけ、こゝを先途とはたらいておりました、が隙を窺い、シラ、と取りつめきたり、二位宗政と間い七八間と相成つたりと思ふ途端、エイツと叫んだ氣合と共に一足とびに宗政の側へおどりこみ、ハツと槍を閃かし、たどみへたるが流石の二位宗政も弓をたゞさ落されて、アツと驚き慌て、腰なる一刀に手をかけんとする處を、隆々どつきす、まれ身体こゝに谷まつたどみへ卑怯にもマラ、とにげだした覺禪坊はつきよせるのはいと安けれど、アツラ天下の豪傑をかゝる事にて手にかけるは惜しいものと、最初よりこよ思つておられますから態と大聲聲をはりあげて、覺ヤア菊岡二位宗政ともあろうものが、敵に背後をみせるとは何事ヲ返せ戻せ、いと、呼はりながらすさまじくおつかける、幾等射術の名人で、弓を叩きおとされては、猿が木からおちたも同然蟹が手に

をものがれた様なものでございませうから、見苦しくも家來なぞは  
 それへうつちやらかし、ドン／＼と南圓堂の森中さしてに  
 げこみ、到頭行衛しれずと相成つてしまいましたが、豊アハツハ  
 ……あれだけうち懲しておけば少々は改心するであらう、斯  
 る射術の名人でありながら氣質が傲慢無禮とは殊に疵だ、イヤ  
 面白い事であつた」と、槍を杖つきノソ／＼と以前の場所へ戻  
 つてくると、はや家來の奴も何れへいつたか一人も姿がみへま  
 せん、清七はバラ／＼とかけよつて、清先生何うもあり難よご  
 ざいます、既での事に半死半生にあはされる處でございまして  
 覺イヤ怪我がなくて結構／＼、菊岡二位宗政といへば、随分高  
 名な弓の名人だがおれに威かされてにげだすとは何うだ、アハ  
 ……清イエ矢張り先生の方がお強いからです」と、互いに  
 話している處へ門人共も追とり刀でドン／＼かけつけてまいり  
 ましたが、覺禪坊と清七に委細の様子をきき、一同は手をうつて

大笑い、その盛寶藏院へひきあげて戻りまするサア之より愈々  
 寶藏院覺禪坊の名聲は四方にひろまり、遠近より尋ねきたつて  
 その門に集まるもの二千人以上、道場は日増しに盛大と相成つ  
 てまいりました然るに月に村雲花には嵐、世の中は儘ならぬも  
 のでございまして覺禪坊の父中御門薩摩は、老病にうちふして  
 一年ばかりすると到頭死亡をする、一方には大阪において、殊  
 臣、徳川の大合戦となり、天下騒然として鼎のわくが如く、殊  
 に奈良邊りは大阪に近ふございませうから、人心恟々として何れ  
 も安き心はございませぬ、その中において覺禪坊は兄の武藏と  
 共に父の遺骸をいと懇ろに弔い、一ケ年の間父の喪に服してお  
 ります内、遂に大阪夏の陣も豊臣方の大敗北と相なり、憐  
 れ滅亡の悲運に陥り、世は徳川の天下となり、泰平をうたふの  
 時代と變つてまいりました、覺禪坊は豊臣徳川兩家に因縁はご  
 ざいませぬから、何方がかつても負けるも別に差支へはありませ

んが、豊臣家の滅亡を誠に氣の毒に思い、覺ア、世の中は判らんものじや、大閑殿下御盛の時代には、徳川家康公なぞも、五奉行の一人で秀吉公には頭も上らなかつたが、秀吉公の御他界になつた後は、僅か數年たぬ間にこの様になつてしまつた。豪傑に二代なしたはよくいつたものじや」と、頻りに歎息をしており、それを、それはさておき、或日の事、覺禪坊は、用事あつて二人の門人をつれ、伊賀の上野へまいり、用事を済してその夜は宿に泊り、翌日上野の城下をたつてブラリと三人が、今しも城下端れへさし掛つてくると、向ふより裸馬にのつたる年の頃十二三才の少年が、ドンとかけつけてくる様と相みへる、これを眺めた二人の門人は、よせばよいのに互いに囁きあひ、甲オイ金子、あの小僧をみる、小癩にも裸馬にのつて、これみろといはぬばかりにかけているせ、金ウムそうだ、一番驚かしてやらうか、ノオ松本、松イヤ、師匠に叱られるよ……

金ナアユ、先生はズン、先にいつてるでないか、構ふ事はないやツつけろツ、松ケド、どうするのだ、金ハ、……、萬事おれに任して、貴様そこで見物しろ」と、いつている内に、今しも少年をのせたる馬は威勢よくのりつけてきて、あはや二人の前を通り抜んとする間一髪、先刻よりまち構へていた金子大藏は、ヤツと叫んで馬の行手にとびだし、兩手をひろげてつたつた、案の條馬は驚いて、ヒャンと一聲嘶くよとみへたるが前足をつたて、さばだちと相なつた、その途端に馬上の少年は、アツといふ間もあらばこそ、頭顛倒と落馬したかと思ひの外、おちる拍子にクルリと筋斗うつて地上につ、たち、突然金子大藏にとび掛つて胸倉つかみ、少コリヤ、なんで満らんことをするのじや、なに意根があつて、馬を驚かした、サアいへ……吐せツ」と、小突きまはされて、金子大藏はよろめきながら金ア、痛いッ、ヤイ小僧放せツ、いきが詰る……」と、ふり

放さんといたしましたか、伴の少年は却々力の強い奴とみへ法ともせず、少エ、イ、いまが詰るもあるかい、汝ッこふしてくれてやらう」と、ヤッと一聲かけると等しく、さしも大兵なる金子大藏を頭顛倒と横倒しに叩きつけた。金ヤア、松本きてくれッ」と、死聲だして叫んでいり、片脇でみていた松本文平も朋友がやられてみている譯にもまいりませんから、ヅカ〜と進みより、松ヤイ小僧、何を小癪なことをする、そこ放せッ」と、押へたる腕を掴んで、つきとばさんといたしますと、少年は大いに怒り、少ナニイ、貴様も此奴の同類だな、許さんッ」と、つゝたち上るが早いか、松本文平の胸倉掴み、エイッとはかりに脊負なげ、金子大藏の倒れたる上へ叩きふせ、兩人を押しつけて動かさず、少サアどうだ、大きな頭体をして弱い僻に餘計な事をするといふがあるかッ、之れでもかッ〜と、拳骨固めてボカリ〜と殿りすへておりますといふ、必竟この少年

第十四席

はこれ何者でございませうや、ソハ次席においてくはしく相判ります……。

然るにお話しかわつて此方寶藏院覺禪坊は、ドン〜と先にたつて歩いておりましたが、ヒヨイとふりかへつてみると二人の門人がおりませんから、覺オヤッついてきている事と思つたに二人ながらみへんとは何うしたのだらう、オーイ松本……金子と、大きな聲でよびますと、金先生……お助け〜と、何處かで叫ぶ聲がきこへる、覺ハテ助け今の聲は確かに金子大藏に相違ないが……と、いひつゝ、ボッ〜後尻ッをしてきたつてみると、大道の真中で金子松本の兩人は一人の少年にとり押へられ、ボカ〜やられていりるこれをみた覺禪坊は、覺ヤ、又二



人が何か悪戯をしたな、それにしても少年は強い奴だ……」と少年の舉動に見惚れ、止める事もうち忘れて頻りに首を捻つて感心している。金子大藏、松本文平の兩人は、金ア、痛い、先生門人の我々が叩かれていたのに、ニコニコ笑つてみている。余り二人が悲鳴をあげているから、覺禪坊はツカ、とすゝみより、覺コレ少年どういふ間違いはしないが、この兩人はおれの門人じや腹も立たふが許してやつてくれ、私は奈良の町にすむ寶藏院覺禪である。と、いふをきいた少年はズイとたちあがつてとびのき、少オイ和尚さん寶藏院覺禪とは槍の先生だらう。覺ウムいかに左様だ、少その名高い先生の門人にこんな無茶な奴があつては面汚した、早く破門をしてしまへ。覺ハ……却々威勢のよい少年だ、シテ一体どうしたのだ破門をし

なければならん譯があれば随分する……一應この場の始末を語つてさかせ、少オ、話してさかしてやろう、實は斯様くでおれの乗つてゐる馬を驚かしたのじや、それも過つてした事なら咎めはせんが能と大手をひろげて馬の前へたちはだかるとはどうだ、之でもおれの方が悪いかつ、ときいた覺禪坊はうち驚き、覺ナユお前の馬を驚かして落馬をさせたのか、それは門人が悪い……コリヤ金子松本……どうしたものじや、満らぬ事をし、て反對にかゝる少年に酷い目にあはされて、面目ないとは思はなか馬鹿者奴がツ以後は屹度謹むがよい……金へエ何うもすみません、余りこの少年が豪そうに裸馬につて、これみろといはぬばかりにしていたものですから、ツイその……覺黙れツイそのが悪い、松ダトお師匠こんな強い小僧とは真逆思いませんで……覺それがいけないのだ、少年と思ひ悔ると飛んでもない事になる見うける處人品骨柄、尋常ならん少年と心

得る今さら仕方もないが小敵とみて侮るなかれ、大敵とみて恐る、勿れといふ兵法の極意を忘れるから斯様な目にあはされる年甲斐もない見苦しいとは思はぬかッ」と、惨散にしかりどばされる少年は傍らでニコニコ笑つておりました。少和尙さんもふ叱らんでよい、こんな蠅虫みた様な奴破門をするねうちもない、私も許してやるヤイ以後氣をつけい……」と、云ひすていヒラリ側なる馬にうち跨り、少和尙さん左様なら……」と、一鞭加へてかけたそうといたしますから、覺ア、コリヤまでその方は何といふものだ、却々頼もしき少年である。少へい私はこの向ふの荒木村の者で、荒木十左衛門の一子丑之助といひます、へい……左様なら……」

覺コレコレ左様急がんでもよい、然し少年……何うじやおれの門人となる氣はないか、少へいそれは門人にして下されば、随分なつてもあげませうが……阿父さんに相談せんといけません、覺アム愈々面白事を申す、な

つてもあげませうとは氣にいつた、イヤその方の親にはおれが直々對面をして申しうけるであらう」と、覺禪坊は伴の少年に見處あると思ひました。處より、その儘少年に案内させ二人の門人をつれて、荒木村へ出てまいり、少年丑之助の父荒木十左衛門にあい、一伍一什の物語りをして頼みこむと、丑之助の父荒木十左衛門も大いに喜び、十イヤ御坊のお言葉誠に忝ない、某も目下はかく郷士とは相成つていれど、普通の士民百姓の血統ではござらん、おき、及びでもござらうが、天正年間、武名を轟かしたる、荒木攝津守村重の子孫でござるから丑之助をこの儘手許でくち果すは残念と、常々思つていられる様な次第、兎に角丑之助は本日より御坊に進上申すにより、にてくほうとやいてくほうと自由にお望み通りにして頂きたい、左る代りにはどうか天下に名をあげる様荒木の家名を耻かしめないだけに仕こんで貰へば結構でござる」と、快よく承諾をする覺禪坊は大いに喜

院 藏 寶 の 後

二七〇

悦び 覺イヤ承知仕つた恩僧が習いおぼへし武術は悉く仕こみ  
天晴英雄豪傑とよばれ、天下に名を轟かす事はお受合申す  
と、ひきうけるそこで荒木十左衛門は直様酒肴の用意を命じ、  
その場において覺禪坊と丑之助と師弟の杯をとり交させ、改め  
て丑之助に向い 十「コリヤ丑之助の方は今より覺禪殿の門  
人となつたのじや、よく武藝を勵み荒木の家名をあげてくれよ  
まつた今日以後は我れを決して親とは思ふな、あくまで覺禪殿  
を師匠とも親とも思つて仕へねばならぬこの父は其方の顔を見  
すとも天下に名をあげるを何よりの樂みといたしてゐる、吳々  
も忘れては相成らぬぞ」と、懇々といつてさかせる丑之助は  
いよてもまだ十二才の少年、兩眼に涙をたへて 丑「ハイ父  
上よく判りました仰せに従い必らず天下に名をあげて後、再び  
御目にかゝるでございませう」と、立派なるその一言この親に  
してこの子あり、後に荒木又左衛門吉村といつて天下名題の家

院 藏 寶 の 後

三七一

となり一に富士二に鷹の羽のくひ交い、三に上野で花予さかせ  
るとまで後世に歌はれ伊賀の上野において、三十六番斬りの大  
仇討をいたした天晴れ英雄と相成るのでございませうから梅檀は  
二葉にして香ばしく少年の中から既に人をのむの氣質があつた  
ものでございませう、覺禪坊はよき門人を手にいれたと胸中の  
喜悅は如何ばかり、その夜は十左衛門の宅に一泊なし翌日丑之  
助と門人二人をつれて奈良へ歸つてまいり、門人一同にもこの  
事を披露して夫より丑之助を自分の秘藏の弟子となし自ら手を  
とつて丁度三年間寶藏院流の術をしこみますと、熱心の功茲  
に現はれて丑之助は免許皆傳の腕となり、一躍して代積古を  
勤めるの身の上と相成つた時に丑之助は年十六才でございませ  
る、然るに或日事覺禪坊は書齋にとちこもり一心に書物をよん  
でおりますと、フイウトく、と假寝んだと思ふ間もなく夢に春  
日明神が現はれ給ひ「ヤ、覺禪その方は佛道に仕へながら、鎗

院 藏 寶 の 後

術に心をゆだね流名を天下にひろめんとは善哉、汝の志に  
感じ予が興ふるものこそあり、漱草山の麓をほりてみよ屹度重  
寶現はれん夢疑ふ事なけれ……」と、いふかと思へば忽然とし  
て目がさめました覺禪坊は、頻りに腕組をして考へこんでおり  
ました。が、覺禪坊、アさては今のは南柯の一夢であつたか、然し  
ながら古來より神のおつげといふ事はよくあるものだ、我が武  
術熱心を春日明神が嘉納したまい夢枕にたち現はれ、おつげが  
あつた者に相違あるまいア、忝なしあり難し……」と、春日明  
神のお社にむかつて三拜九拜いたし、夫より人しれず鍬を携へ  
て漱草山の麓へ出てまいり、夢にみた通りをほつてみると果し  
て磐鎌鎗地藏尊体の三つの寶器が現はれた、覺禪坊は大いに喜  
悦び、盤釜愈々神のおつげ通りだ、これを寶藏院流鎗術の寶  
物となし益々研究をつまねばならん」と、もち歸つて床の上に  
安置なし日夜片鎌鎗の秘術を研究しております、それがため

院 藏 寶 の 後

に寶藏院流鎗術に限つて、二代三代四代五代と代をうけ継ぐも  
のは必ずすこの磐鎌鎗、地藏尊体の三つの寶物を一緒にゆづ  
りうけたものでございませう、……るに覺禪坊は今までも天晴名  
人ではありましたが春日明神の靈夢に感じて、三種の寶物をほ  
りだして後は一人心不乱にその術を極めたる結果、腕前はズンズ  
ン上達いたして鎗をとつては天下無双と價値が定まりました、  
處へさして龜井流鎗術の名人柳川大膳太夫盛忠、高田流鎗術の  
達人穴澤五郎兵衛盛秀、佐分利流鎗術の使手五坪兵庫景成の三  
豪傑が、寶藏院覺禪坊の武名を慕つて尋ねてまいりましたるを  
幸ひ、この三人と相談をいたし始めて片鎌鎗の用法、まつた表  
十五ヶ條の形を作り眞草の位を別けて、愈々寶藏院の片鎌鎗は  
覺禪坊胤榮の開祖といふ事に整然と定めました、方今で申すと  
專賣特許といふ様なものでございまして、他人がまねをしよう  
にも流名をぬすもうにも覺禪坊胤榮の許しをうけなければ、決

して勝手に指南をする事ができない則ち柳生流が天下のお留流であつたと同じでございませう、到頭覺禪坊は多年の望を茲に達して覺ウムもふ大丈夫だ之より今一度天下を漫遊して、普ねく流名をひろめなければ寶のもちくさりだ、それにしてもこの頃さけば兼て數ヶ年以前、上州箕輪上泉伊勢守秀綱先生の許にありし頃、義兄弟の約束を結んだ柳生又左衛門が徳川家に仕へて指南役となり、一万石を領して大名となつてゐるそうだが人間もこれだけ出世すれば結構だ、なほ又噂によると又左衛門の長男十兵衛光巖なるものが、武藝熱心の余り發狂して大和國添上郡正木坂の陣屋にひっこもり、保養をしてゐる、この話は何うも天晴豪傑を氣狂にしておくはおいしいものだ、一番の話し何で面會をなし何とあしてなほしてやりたいものだ、と、獨り思案をしておりましたがその翌日と相成ると高弟荒木丑之助を手許へ招き、覺ウレ丑之助之より大和添上郡へまいる積りだ、貴

様もゆくかどうだ、丑ハイ添上郡の何處へいらつしやいます、覺オ、正木坂じや、丑ヘエそれでは近頃噂のある柳生十兵衛光巖殿といふ氣狂先生をお尋ねでございませうか、覺ウムそうじや、丑イエお供いたしましたませう、氣狂先生でも武藝は天下無双とかいふ事でもございませうから一應お目に掛つておきたふ存じます、覺成程然らば用意いたせ、之から直にゆくのだ、丑ハイ長まりましたと、直様師弟兩人は仕度におよんで留守を高弟に頼みおき覺禪坊と丑之助は奈良をたつて、段々と途を急ぎ何なく添上郡正木坂へのりこんでまいります、然るにお話し代つて此方正木坂の陣屋にある柳生十兵衛光巖といふ人は、あまり武藝ができます處より少々慢心したとみへ、十乃公は日本一だ天下に我れをうちすへる者はないであらう」と、斯様に思ひこんだのがおひく、烈しくなり頭發狂をしてしまつたのでございませう、父の但馬守宗冬はこれを見て、宗ア、十兵衛はおいしい者

だが、あまり武藝にこりすぎて遂に發狂の身となつた、不憫であるが是非もないよしや全快いたせばとて最早や當家の相續して將軍家の御指南はできぬ、何うしたらよからう」と、燒野の雉子夜の鶴我が子を思はないものはございませぬ、色々と思案途方の末、宗ウムこれはいつそ我が手許へおくよりも、本國大和正木坂の陣屋へさし遣はし靜かに養生するに限る」と、斯様に思はれたものですから直様將軍家へはその手續をいたし、家來をつけて十兵衛光嚴を大和正木坂へおくり、途々隠居の身の上といたしました處で柳生十兵衛は正木坂の陣屋にあつて、一年ばかりも養生いたしましたが却々全快の様子にはさらになく益々激しくなる一方、或日の事十兵衛は座敷の真中に突つたち十ヤア、家來共我が秘藏いたす鎧をこれへもてッ……」と大きな聲でござなりだした、家來の面々は顔見合し「甲オイ又始まつたよ、全体この泰平の御代に鎧なぞをどうなさるのだからう

乙イヤそこが發狂していらつしやるのだから仕方がない、アもつてゆけ恩圖くしたら大變だよ」と、家來はぼやきながら、逆つてはいけなないと鎧をそれへもつてまいると、十兵衛は手早く身につけ「十アハ、……何うじや皆の者、乃公がこふ甲冑をまとつた有様は何んど勇ましいものであろう、家ハッ御意にございます、却々御立派な事……」十ウムそうであらう如何なればおれは泰平の世に生れたか、これが亂世であらうものなら第一戰場に望んで、華々しく功名をするのだヤア誰かある槍をもてッ」家來も仕方がないから九尺柄穂長の手鎧をさしたすと、十兵衛はどるが早いかリウく、とひつ扱き「十ヤア何うじや者共かく身に甲冑をまとい、鎧を構へたる處は何どもいへまい誰でも苦しふない手にむかつてこい、見事鎧玉にあけてくれるッ……」家メ、滅相もない左様な事をされて堪りますものかッ」と、一同は青くなつて尻ごみいたして居ると、柳生

十兵衛は大首をばりあげて、十ヤア、それに控へなしたるは平家方の侍大将、悪七兵衛景清とみれば、僻日か、かくいふ我れは天下の豪傑、柳生十兵衛光厳なり、イチャ一騎打の勝負、見、……と呼はり、……を縦横無盡にふりまわし、座敷の内をかけまわり、無茶苦茶にあいだした、斯様な有様でござい、ますから實に家來共、手のつけ様がない、皆、……見合せて只々呆れかへつております、……へさしてヒョッコリ陣屋の門前へやつてきた一人の旅僧あり、首に頭陀袋をかけ、頭に綱代の笠かぶり、身には粗末な墨染めに最も短かさ腰法衣、尻切草履に身をのせてじつと門前にとたち止り、ニコニコと笑つて背後を顧み、僧コリヤ丑之助おれに續いてはいれよ……と、ズカ、門内へいりこみましたるは之なん余人にあらず、寶藏院覺禪坊と荒木丑之助でございます、一説には柳生十兵衛の發狂をなほしたのには、品川東海寺の澤庵和尚とよむ人もございませう、澤

第十五席

庵和尚が品川東海寺より遙々柳生十兵衛の氣狂をなほしに、大和正木坂へくる筈もなし、色々玉秀齋がとりしらべましたる處、寶藏院覺禪坊の方が實説に近い様でございませう、その様に口演しておきます、愈々之より柳生十兵衛と寶藏院覺禪坊との大問答、遂に十兵衛の病氣全快に及びます、實に面白き顛末は、暫らく休息いたしまして、次席に口演し續けます……。

寶藏院覺禪坊は乞食坊主の風体でもつて、丑之助をつれてズイと門内へはいりますと、二三人の門番は忽ちこれをよび、ごめ門「ヤイ乞食坊主案内もなく門内へはいるとはどうか、貴様は何處からきたのだ……」と怒鳴りつけますと、背後に續いた丑之助は赫つと怒り、丑蹴れッ師匠を捕へて乞食坊主とは不埒な





院 藏 寶 の 後

暫らく考へておりましたが、十ナニ坊主がやつてきておれを小  
 勝者との、しつたかつ、フム、……不埒な奴だおれを小勝者と  
 いふ位ならば、定めてその坊主は西塔武藏坊辨慶であらう、相  
 手にとつて不足はない庭前へまわせつ、一騎うちの勝負に及ん  
 でくれん……ウム、……」家來はあきれたしまつて、家オヤオ  
 ヤ武藏坊辨慶が今頃出てきてたまるものか、氣狂といふものは  
 何をいふやら頓と取りとめないものじや」と、思ひながらも主  
 人の命だから仕方がない直々門番にこの旨通じると、門番は再  
 び出てまいり、門「ヤイ坊主庭前へ廻せとの御意だ、案内してや  
 る此方へこい、」イヤそれは忝ない」と覺禪坊は丑之助を従へ  
 て門番につれられ、奥庭へ通つて飛石の上へ腰を下しまつ間程  
 なく柳生十兵衛は、三池傳太光世の鍛へたる一刀を鷲つかみ、  
 ツカ／＼と椽側へたち現はれ、十「ヤイ坊主天下の豪傑柳生十兵  
 衛を小勝者といつたのはその方かツ」と、大喝一聲となりつけ

院 藏 寶 の 後

ると覺禪坊は落付はらつて十兵衛光嚴の顔うちながめ、覺ハ、  
 ア余程烈しく發狂をしてゐるわい」と、思ひながらニコ／＼笑  
 つて、覺「イヨ一氣狂の十兵衛かそう怒るから小勝者と申すのだ  
 次の間には家來の面々、クツ／＼笑つて口ひき袖ひき、家「オイ  
 オイ氣狂同志の衝突とはおかしいではないか、然しどうなるで  
 あらう」と、片唾をのんで覗いてゐる此方柳生十兵衛は尙も大  
 音はりあげて、十「如何に坊主汝我れを小勝といふからには、腕  
 におぼへがあるであらう何流を使つてゐるのだ、まづそれから  
 さかん疾く申せツ、覺「ハッハ、……汝は異な事を申す者かな、  
 我れは乞食坊主ではあるが弓馬劍鎗の術は申すにおよばず、武  
 藏十八番は悉く奥義を究め何にしろすといふ事なし、人をきり  
 殺すはなか大根をさるが如く百万の大軍もウムとねめば立處に  
 轉倒る、それゆへ天下の豪傑は我れを恐れて皆幕下につく、殊  
 に地獄では閻魔大王赤鬼青鬼をも家來となし、龍宮では八大龍

院 藏 寶 の 後

王乙姫なども我が郎黨となるその方如き只柳生流のみを學び、井底の蛙同然の分際で慢心するとは何事だツと、辨舌とうくとして吹いてくふさまくつた、次の間の家來共は家オイオイ大變な坊主もあるものだ、此奴は御主人より余程違つていらしいよと、ガヤ／＼いつている此方では柳生十兵衛烈火の如く憤り、十黙れ坊主ツ汝は恐ろしい大言をばく奴だ、それはど大言をばく以上は定めて腕前優れた者であらう、イザこれはい真劍をもつて勝負いたしてくれるツと、柄をにぎつて突つたつた覺禪坊はから／＼と嘲笑い、覺アハ、……汝は只今天下の榮傑といつたではないか、然るに真劍をもつて勝負いたさんなぞとは、これ匹夫下郎の勇にしてとるにたらざる無謀である、名人の上にも名人あり上手の上にも上手あり、劍は一人の敵なり學ぶにたらす百万の大軍を相手にする者こそ大榮傑である、唐朝の溜備立德は車にのつて曹操百万の大軍をおいかへし、諸

院 藏 寶 の 後

葛孔明は琴を弾じて司馬忠陸を奔らしたでないか、一人同志の闘いにかつともまけるも真の伎倆は判らず、万一左右からきりつけたる時は、汝如何にしてふせぐかその次第を承はらう、十ッナニッ我れに二人向ふ時は、所持する之なる三池傳太の一刀をもつて一刀兩斷にきつてするに造作はないわい、覺ウム成程然らばそれに倍して四人きたればどうするのだ、十ッアハ、……何を申すこの坊主四人か、れば柳生流の極意とする水月の術をもつてうちとるに、何の手間暇いるべきや、覺フム左様か、もしそれに倍して八人どびかゝる時は……十ッウム八人位は何でもない、八方微塵といふ極意ゆり、覺然らば十六人は……十ッ柳生流、天地人三卷の極意において、柴がくれの一手をもつてうちとるのだ、覺三十二人は……十ッ木の葉で片端から塵殺しだわい……覺シテ又六十四人の時は……十ッさればその時は真劍白刃とりの秘術あり、覺フム天晴／＼百二十八人かゝる時は何

んとする……十ヤイ坊主何處までふやすのだ、百二十八人き  
 たつたるその時はこの一刀を真甲に振りかざし、面もふらす大  
 勢の中へ躍りこみ斬つてきつてきりまくり、敵はぬ時は討死す  
 るまでの事だッ……覺アハ……ハ……夫では別に豪傑でも  
 名人でもない、柳生十兵衛の武術も百二十八人と相場が極つた  
 様なものだ、かくいふ愚僧は左にあらす計略をいばくの内に運  
 らし、勝ちを千里の外に決するをしり一度思案をすれば、百万  
 の大軍きたるともチヨイと二本の指先にてつまみ、掌にのせも  
 みくだいてブツとふきとばせば、粉微塵となつて飛んでしま  
 ふヘンどんなんもんだ……」と、態と大言をはきちらすといや柳  
 生十兵衛は怒つたの怒らんのだ、と、余程大言をはく奴だ成  
 程口では大海の水ものみ盡し富士山を枕として近江の湖水で足  
 を洗ふ事もできやう、言葉多きは品少しといつて、口喋る奴に

腕前の優れたものはない、それほど廣言をはくならばいざ勝負  
 に及べッ 覺アアそれがいかんだ、稍ともするとその身をほ  
 こり名人だ上手だと思ふのが間違、我が目からみる時はその  
 方如きは三才の小童も同然、さほど試合がいたしたくば随分た  
 ちあつてもやろう、ダガ汝は武術の極意とする歌を存知ている  
 かッ 十アハ……悟りの歌は何でもないことだ、山川の流れ  
 に木の葉沈むとも身をすて、こそ浮む瀬もあれ…… 覺いやい  
 やそれはまだ極意とするにたらん 十然らば…… 降るとみて  
 積らぬ先に拂へかし、雪には折れし青柳の枝…… 覺ハ……  
 それもいかん、まだ極意を悟る歌とはいへん今おれが一つかい  
 てやる、それを考へたら大名だ 十何を申す乞食坊主奴がッ  
 ナア何でもかいてみる、屹度悟つてみせるぞッ 覺アハ……と認め  
 おれい……」と腰なる矢立をとりいだし、何かサラ／＼と認め  
 覺この歌の心を悟つてみよ」と、十兵衛にさしたすと十兵衛

は手にとりあげてよみ下し 十ナニ付むな、ゆくな、戻るな居座るな、寝るなおきるな、しるもしらぬも……フムこれは宙ブ却々どうも判らない 十「ヤイ坊主これは一寸難しい、暫らく考へた上で返答してやる……」 覺ハ、……、それみる急には判るまい万一その歌の心が判らないその時は、汝の命は貰つたぞッ……」とグツとばかりに睨みつける、流石の柳生十兵衛も殘念無念と思つたが仕方がない 十「オ、今に考へて貴様の素首をひきぬいてくれる、まつておれい」と盛障りも荒々しくその儘居間へはいられる、後に覺禪坊は十兵衛の背後姿を見送つておりました、柳生の家來をよびよせて 覺「イヤ御家來十兵衛殿の發狂もその中に治る、あの歌を考へておれば必ず明はすまでは全快するから安心なさい、然し氣の毒だが酒を二三升と飯をもつ

第 十 六 席

てきて頂きたい」と、聞いた家來の面々は 密オイ〜 到頭乞食坊主の本性を現はして、酒と飯の注文だよ 乙「ケド仕方がないあの歌を御主人がお悟りになるまでは、坊主も腰をすへて容易に歸るまいそれに身装こそみつともないが、却々確りした事をいふ拙梅では業い出家かもしれん、粗末にして後で失策つては大變だ」と、家來も何だか薄氣味悪く鄭重に膳部をこしらへ酒をかんにして運びだしまするといふ、愈々十兵衛光嚴の狂氣全快、荒木丑之助改めて柳生十兵衛の門人と相成るお物語りは、次席をよんでしりたまへ……。

さても此方柳生十兵衛光嚴は、夜通しねもやらす一心不亂と歌の意味を考へましたが、却々判らない 十「フム付むなゆくな戻